

昭和54年度

熊谷市埋蔵文化財調査報告書

中条遺跡群・中島遺跡

1 9 8 0

熊 谷 市 教 育 委 員 会

序文

熊谷市上中条地区は、大穀倉地帯で、みわたす限りの水田が続き、のんびりとした静かな農村地帯です。このような地域も、農業近代化の波は、緩むことなくおしよせ、昭和50年、行田市と接する星宮地区、南河原村と接する上中条地区を対象に、荒川左岸地区農村基盤整備総合パイロット事業が計画され、昭和51年～56年にかけて、各地区ごとに着工されることになっています。

当地区は、熊谷市の北東部に位置し、古代条里遺構、古墳群が存在することが知られています。これらの遺跡は、貴重な文化遺産として後世に残していくことが我々の務めなので、計画の段階でこれを現状のまま残すことに努力してきました。しかし、工事の性格上やむをえない個所については、記録としてこれを残すことにせざるを得ません。

熊谷市教育委員会では、昭和52年～56年までの5ヶ年計画で、この事業に伴った発掘調査を、国・県の補助事業として実施しています。昭和53年度は、その2年次で、中条遺跡群のなかの中島遺跡として、上中条中島地区の発掘調査を実施しました。昭和54年度調査は、この中島遺跡に隣接した、鎧塚古墳をはじめとして、すでに削平されてしまっていた上中条古墳群の調査を実施しました。

本書は、昭和53年度発掘調査・中島遺跡の報告書です。中島遺跡は、遺跡地図にもものっていないものであったわけですが、このような遺跡の存在は、これからの文化財行政にも重大な注意を与えてくれたものです。

本書が、学術研究等に資するならば幸に思います。

最後になりましたが、県文化財保護課、深谷土地改良事務所、中条星宮土地改良事務所、地元中条中島地区住民の方々から、御指導御協力いただきましたことに深く、感謝の意を表します。

昭和55年3月

熊谷市教育委員会
教育長 森田芳一

例 言

1. 本書は、埼玉県熊谷市上中条にある、荒川左岸農村基盤総合整備パイロット事業地内の中島遺跡発掘調査報告書である。
2. 中島遺跡発掘調査は、5ヶ年の継続事業の2年次にあたり、昭和53年11月16日～昭和54年1月31日まで実施した。
3. 出土遺物一覧表に記した遺物番号は、図版番号、写真図版番号と一致する。
4. 本書の執筆・編集は寺社下博がおこなった。
5. 本調査に関し、次の方々に御教示いただいた。記して感謝します。
柿沼幹夫、駒宮史郎、酒井清治、倉田芳郎、平井隆、浜崎加余子、夏目米蔵、菅谷浩之、野中力
6. 採集遺物は熊谷市教育委員会で一活保存してある。
7. 調査組織は次のとおりである。

調査主体者	熊谷市教育委員会教育長	森田芳一
調査員	埼玉大学教授	新井寿郎
"	県史編纂室長	柳田敏司
"	埼玉大学教授	堀口万吉
"	"	原島礼二
"	熊谷市教育委員会社会教育課主事	寺社下博
事務局	熊谷市教育委員会社会教育課課長	山下光男
	" 課長補佐	関根貞二
	" 係長	養田元二
	" 主事	金井葉子

目 次

序文	I
例言	II
目次	III
図版目次	IV
写真目次	V
はじめに	2
I 発掘調査概要	2
II 発見された遺構	5
1. 竪穴住居址	5
2. 土師器窯址	21
III 古環境の復元	27
1. 試料	29
2. 試料分析及び古環境	30
A 地点試料	30
B 地点試料	34
3. 古環境の復元	37
IV まとめ	65
1. 遺構について	65
2. 遺物について	66

表 目 次

第1表. 主要花粉胞子化石ダイアグラム	38
第2表. 出土遺物一覧表	43
第3表. 遺構一覧表	69

図 版 目 次

Fig.

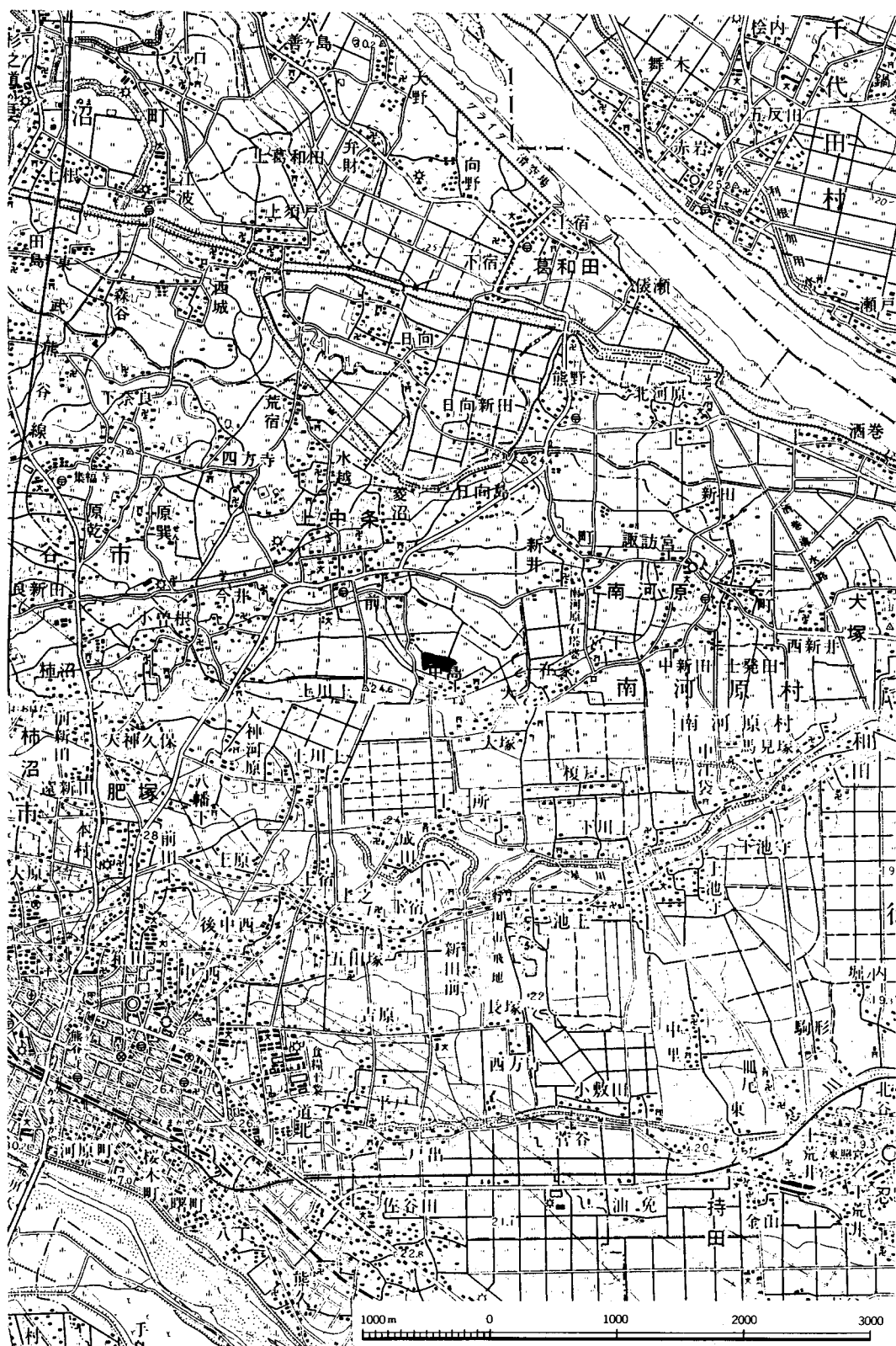
1. 地形図	1
2. グリット配置及び排水溝位置図	3
3. グリット及び遺構配置図	4
4. R-17住居址平面図	5
5. R-17住居址出土遺物実測図 I	6
6. R-17住居址出土遺物実測図 II	7
7. U-17住居址平面図	7
8. U-17住居址出土遺物実測図 I	8
9. U-17住居址出土遺物実測図 II	9
10. C-6住居址	10
11. Cライン出土遺物実測図	11
12. 9ライン出土遺物実測図	12
13. トレンチ確認住居址平面図	13
14. 2M-9・2N-9・2O-9・2P-9住居址平面図	14
15. 2M-9・2N-9・2O-9・2P-9住居址出土遺物実測図 I	15
16. 2M-9・2N-9・2O-9・2P-9住居址出土遺物実測図 II	16
17. 2M-9・2N-9・2O-9・2P-9住居址出土遺物実測図 III	17
18. 2M-9・2N-9・2O-9・2P-9住居址出土遺物実測図 IV	18
19. 2M-9・2N-9・2O-9・2P-9住居址出土遺物実測図 V	19
20. 2N-14住居址平面図	20
21. 2N-14・2P-14住居址出土遺物実測図	21
22. 2P-14住居址及び周辺遺構平面図	22
23. 2P-14住居址出土遺物実測図	22
24. 土師器窯址平面図	23
25. T-17・M-11窯址2P-13土壇出土遺物実測図	25
26. トレンチ出土遺物実測図	26
27. 周辺出土遺物実測図 I	39
28. 周辺出土遺物実測図 II	40
29. 周辺出土遺物実測図 III	41
30. 周辺出土遺物実測図 IV	42

写 真 図 版 目 次

PL.

1. 航空写真	71
2. 遺跡遠景	72
3. トレンチ 9 ライン	73
4. 発掘風景	74
5. 面発掘状況－2 P－13付近	74
6. R－17住居址	75
7. R－17住居址遺物出土状況	75
8. R－17住居址、2 M－9住居址出土遺物（1）	76
9. U－17住居址	77
10. U－17住居址カマド前遺物出土状況	77
11. U－17住居址出土遺物（1）	78
12. U－17住居址出土遺物（2）	79
13. C－1区遺物出土状況	80
14. C－6住居址	80
15. Cライン出土遺物	81
16. M－9住居址	82
17. P－9住居址	82
18. Y－9住居址	83
19. Y－9木官墓	83
20. 2 F－9住居址	84
21. 2 K－17住居址	84
22. 9ライン出土遺物（1）	85
23. 9ライン出土遺物（2）	86
24. 2 N－9住居址	87
25. 2 M－9住居址	87
26. 2 O－9・2 P－9住居址	88
27. 2 M－9住居址遺物出土状況	88
28. 2 N－9住居址カマド	89
29. 2 O－9住居址カマド	89
30. 2 M－9・2 N－9・2 O－9・2 P－9住居址出土遺物（2）	90
31. 同（3）及び周辺出土遺物（1）	91
32. 同（4）	92

33. 2 M-9・2 N-9・2 O-9・2 P-9住居址出土遺物(5)	93
34. 2 M-14・2 N-14住居址遺物出土状況	94
35. 2 P-14住居址	95
36. 2 P-14住居址カマド	95
37. 2 P-13土壇	96
38. 2 Q-14・2 Q-15竪穴	96
39. 2 N-14・2 P-14住居址出土遺物	97
40. M-11土師器窯址	98
41. T-17土師器窯址	98
42. M-11・T-17窯址、2 P-13土壇出土遺物	99
43. トレンチ出土遺物	100
44. 小排21号	101
45. 浅間B軽石層出現状況(小排46号)	101
46. 周辺出土遺物(2)	102
47. 周辺出土遺物(3)	103
48. 周辺出土遺物(4)	104
49. 化石花粉拡大写真(1)	105
50. 化石花粉拡大写真(2)	106



第 1 図 地 形 図

は じ め に

熊谷市上中条一帯は、土器散布地および古墳跡として知られている地域である。遺跡は、利根川の南方約3km、荒川の北方約4.5kmのところにあり、荒川の沖積扇状地の北端に位置している。標高は約24mで、大部分が水田であり、一部畑地となっている。

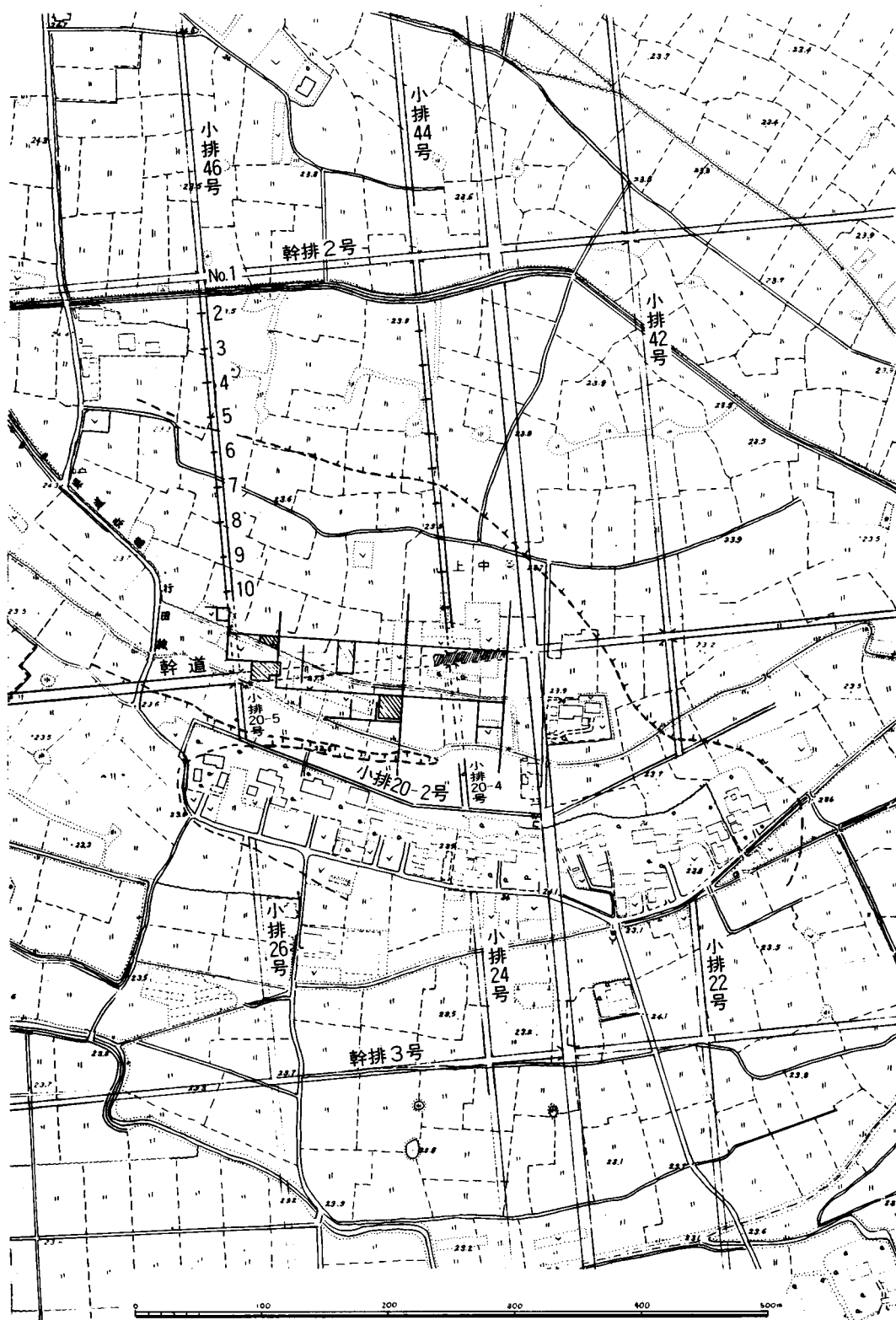
遺跡地は、先に記した当地区の遺跡範囲からはずれたところであり、遺跡台帳に記載されていない。しかし、地形を悉に観察すると、北西から、南東にかけて、微高地が舌状に伸びていることがわかるのである。上中条地内南部一帯に広がる水田面の南端に、東西に広がる戸数23の通称中島とよばれる集落があるが、周辺一帯の水田は、ほぼ南北に区画された個所が多いのに対して、字前耕地から、この中島にかけては、北西から南東へ舌状に区画されているのである。よって、この地形を利用した古代集落が存在する可能性が大であった。耕作者の話を聞くと、若干の土師器、須恵器が採集されており、増々その感を強くしたのである。その後、精密な表採を実施したところ、現中島集落の北側に、多くの土師器、須恵器片を発見した。地元民の話を総合すると、この区域は窪地であり、先に記した舌状区域から土をとって埋めたものであることがわかった。この土取りをした部分以外は、浅間A火山灰層が、耕作土下、すなわち、現地表下15cmのところに堆積している。この地域が遺跡地図に全く記されていないのはA火山灰層がほとんどさわられていないことから、地中の遺物が地表に現われることが少なく、よって、ノーマークの地域であったものであろうと思われる。

このようにして発掘調査区域を設定し、調査を実施したのであるが、後に述べるように、層位が全く安定せず、遺構の検出は、非常に困難であった。しかし、古墳時代を中心とした沖積地における集落が確認でき、ある程度の成果は上ったと思われる。

I 発 掘 調 査 概 要

発掘調査は、削平によって破壊される遺構一堆积土が浅い状況で遺構が確認される部分一の有無を確認することから開始することとし、トレンチ、グリッドを併用した。まず、幹線道路の交点を基点として、西へ発掘調査区を展開し、南北トレンチは、Cライン1～26、Gライン17～23、Sライン1～28、Wライン17～20、2Aライン17～20、2Iライン9～19、2Mライン5～16、2Uライン5～12、2Wライン5・6、東西トレンチは、5ライン2U～2X、7ライン2U・2V、9ラインA～2T、13ライン2M～2T、17ラインC～2L、21ラインC～F、S～2Cまでのトレンチを設定した。併せて狭小幅の小排水路(44号、46号)をトレンチとした。小排水路トレンチを含めると、南北11本、東西6本のトレンチに及ぶ。

トレンチは、5mグリッドの規格のもとに設定し、1グリッド1×3mを連続させたものである。トレンチ調査の結果、2層の火山灰層が確認された。浅間A火山灰層および浅間B軽石層である。

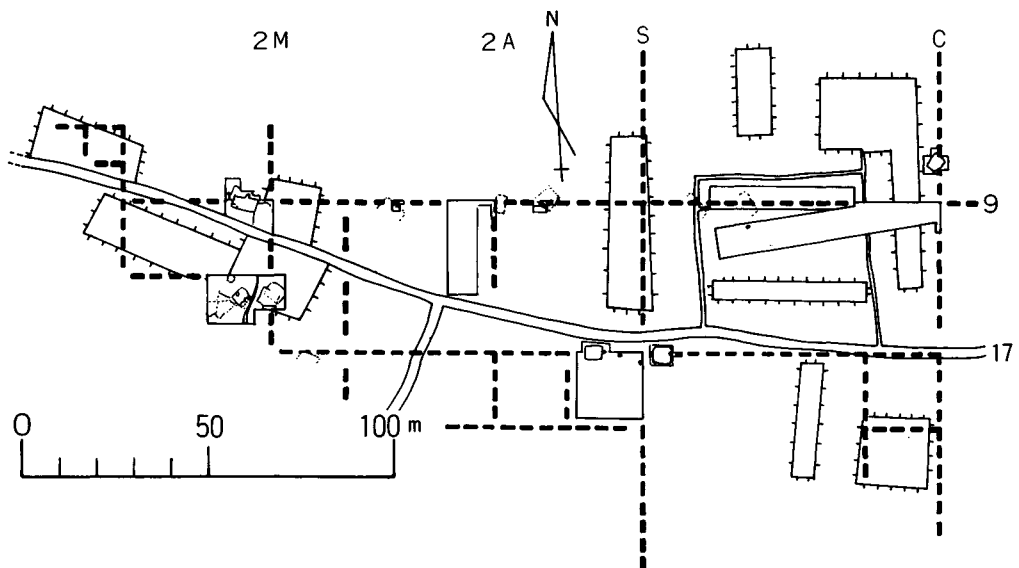


第 2 図 グルッド配置及び排水溝位置図

浅間A火山灰層は、地表下15cm、耕作土直下に堆積しており、厚さ5～10cmを計る。土取りしたところ以外は全面にみられる。畑地については、水田面より50cm前後高くなっているが、水田面と同様のレベルにA火山灰がみられ、畑の築かれた時期が推察できる。浅間B軽石層は、発掘調査区をとり囲むように堆積している。これについては後述する。

遺物が発見された範囲内には、浅間B軽石層は存在しない。この範囲内が集落部分と考えられるが土層堆積は比常に不安定で連続せず、土層の色調は極端に類似し、含有物による区別も肉眼では不可能に近かった。発掘区域中央部南側の一部（S-17付近）のみ比較的層位が安定し、平面で遺構を確認することができた。この区域は、先に述べた土取りをした部分であり、本遺跡中最も高い位置であったと思われる。またこの区域に存在が想定される遺構は、工事計画によると、削平され消滅してしまう恐れが強いため、面の発掘を実施したところである。その他で面の発掘を実施したところは、幹道1号に沿った遺構面の浅い、C～N、2L～2Qの2ヶ所、9ライン2A～2C、2M～2Pの2ヶ所である。しかし、4ヶ所いずれも層位が不安定で遺構の状況を確実に復元するには至らず、最後まで土層観察用の畦を取り去ることができなかった。

発掘調査対象が破壊を受ける部分に限定されていたため、トレンチ内に確認された多くの遺構が、一個の遺構としての確認面は深く、その存在を確認するにとどめざるを得ず、規模・性格等を明確に成し得ることができなかったことは残念である。



第3図 グリッド及び遺構配置図

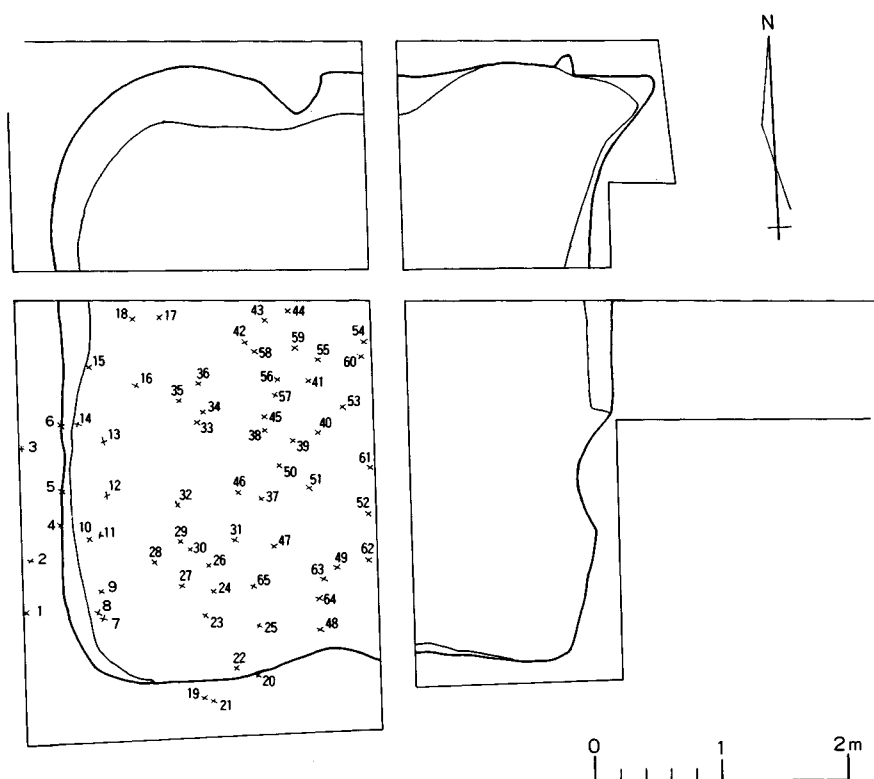
II 発見された遺構

発見された遺構は、古墳時代後期を中心として、奈良、平安時代におよぶ住居址、土師器窯址、土壇等である。また、時期、形態ともに不明確な竪穴、土壇、構状遺構等も検出されている。以下各々について記すことにする。なお、遺構名は、遺構の存在するグリッド名を用いた。

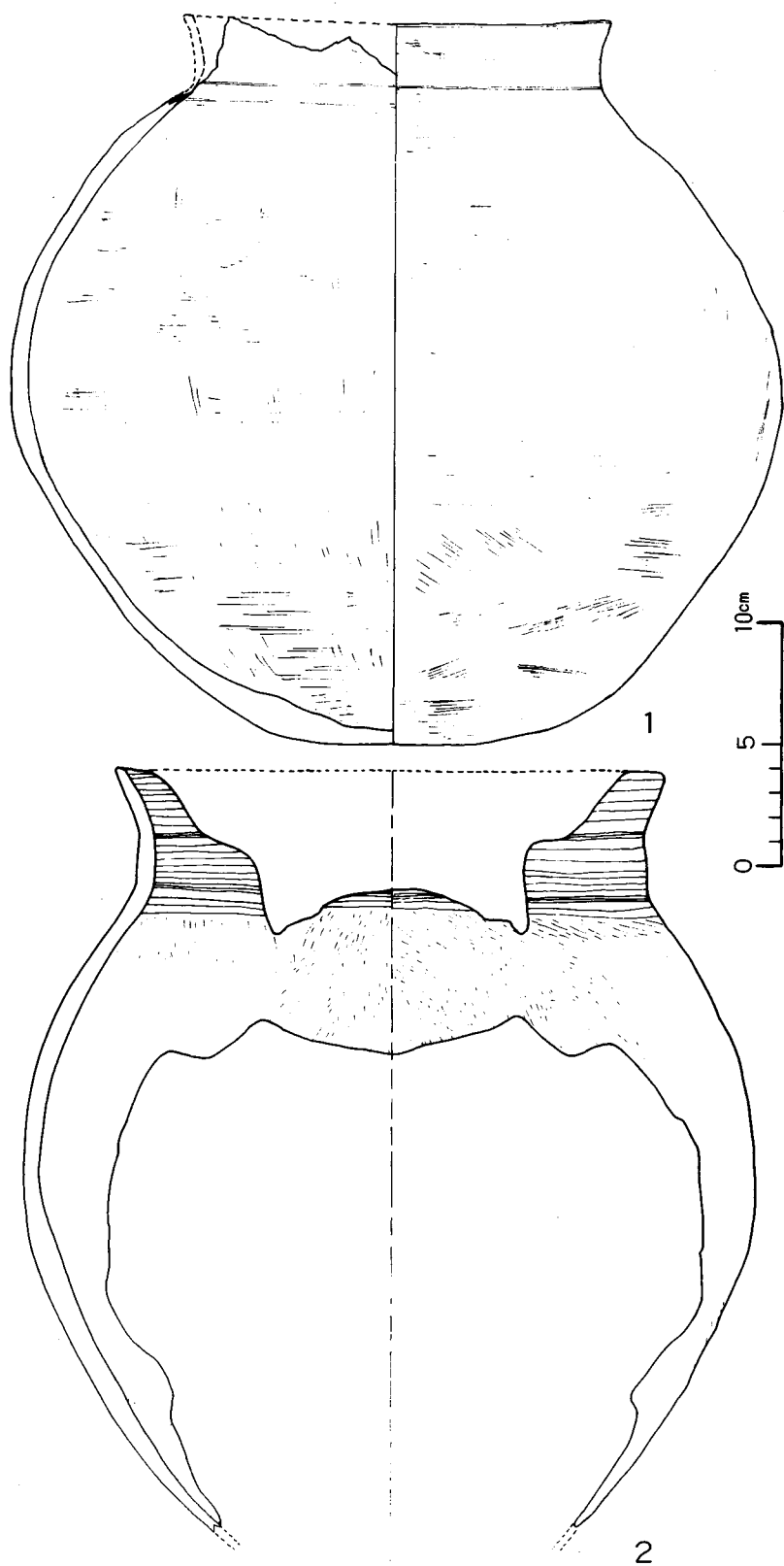
1. 竪穴住居址

R-17住居址

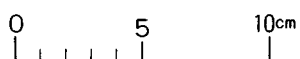
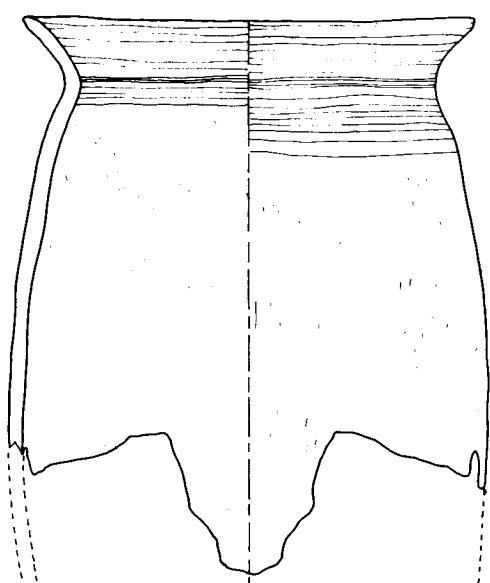
長軸をほぼ南北にとり、南北 4.7m、東西 4.3m の、隅が丸味をもつ形態を示す。床面は安定し、ほぼ全面に固い。壁は安定せず、南面ではほとんど垂直に、北壁は緩やかになっており、他はその中間を示している。また、床・壁共に火の使用痕は無い。遺物は、R-17区のみ実測図に示したが、ほとんどが、小破片で流入したものであり、住居址外からその痕跡がみられる。床面上には壺2個体、甕1個体が出土している。柱穴は1本も確認されていない。



第4図 R-17 住居址平面図



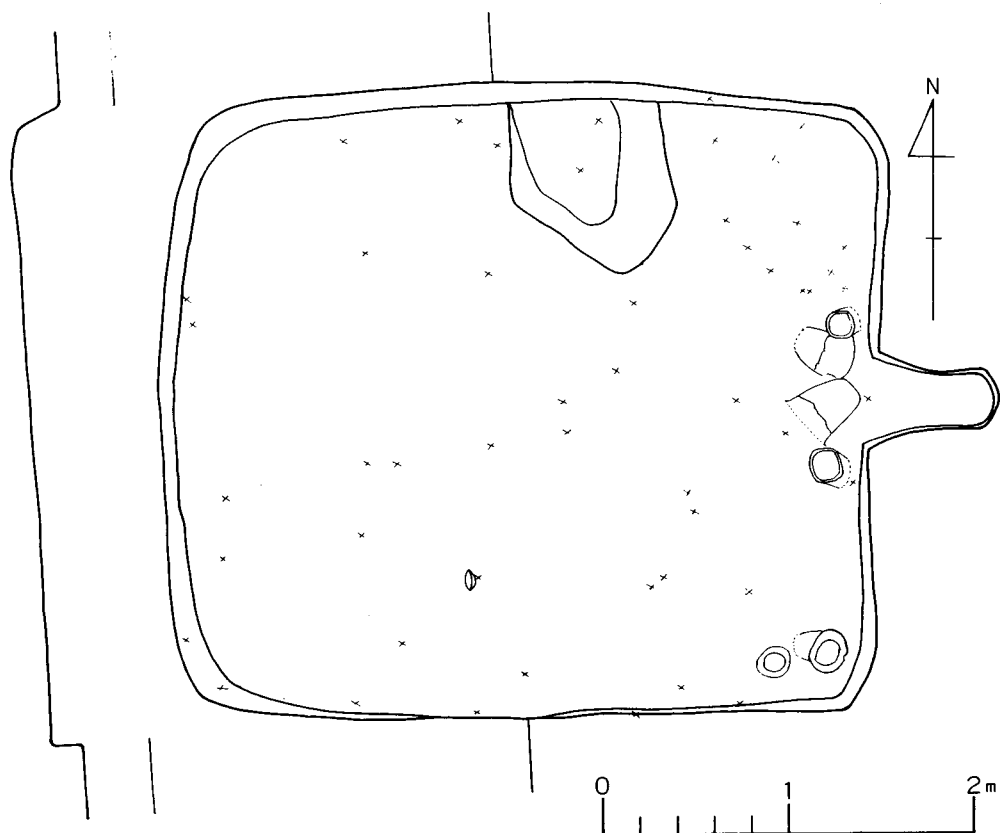
第 5 図 R-17 住居址出土遺物実測図 I



第 6 図 R-17 住居址出土遺物実測図 II

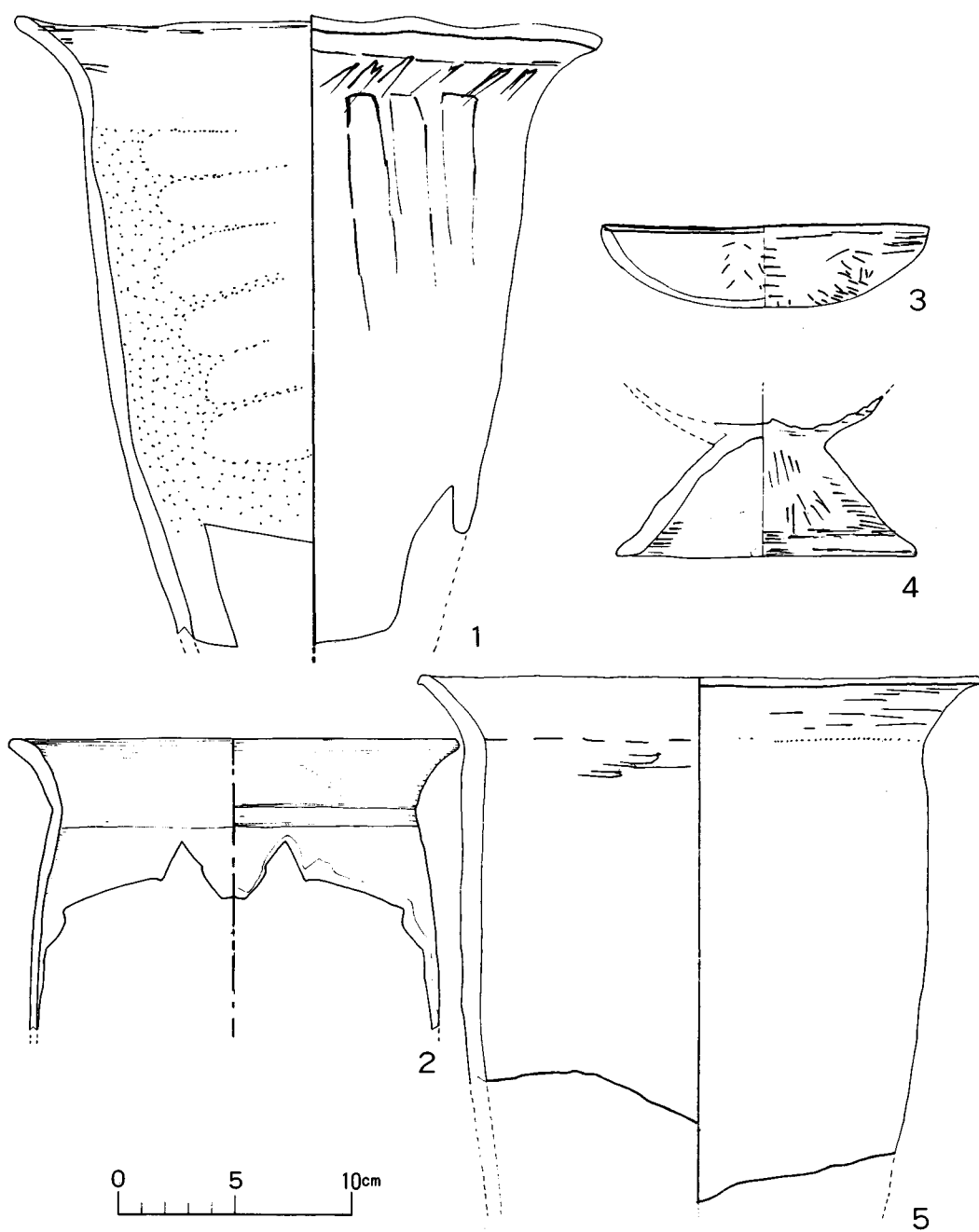
U-17住居址

N-90°-Eに長軸をもち、東西3.80m、南北3.40mを測る。壁はほぼ垂直であるが、北西隅は若干緩やかになる。床面はカマド付近を除いて安定せず、特に、北辺中央は不整形の落ち込みがみられる。柱穴は確認されていない。東南隅の襲出土地点は若干床面が窪むが、貯蔵穴であるとは言い難い。カマドは、東壁中央に設置されている。住居址内に30cmの袖をもつ。袖は、極少量の白色粘土を含んではいるが、床面を構成している。青緑色粘土がほとんどであり、先端部に各々甑形土器が使用されていた。煙道部

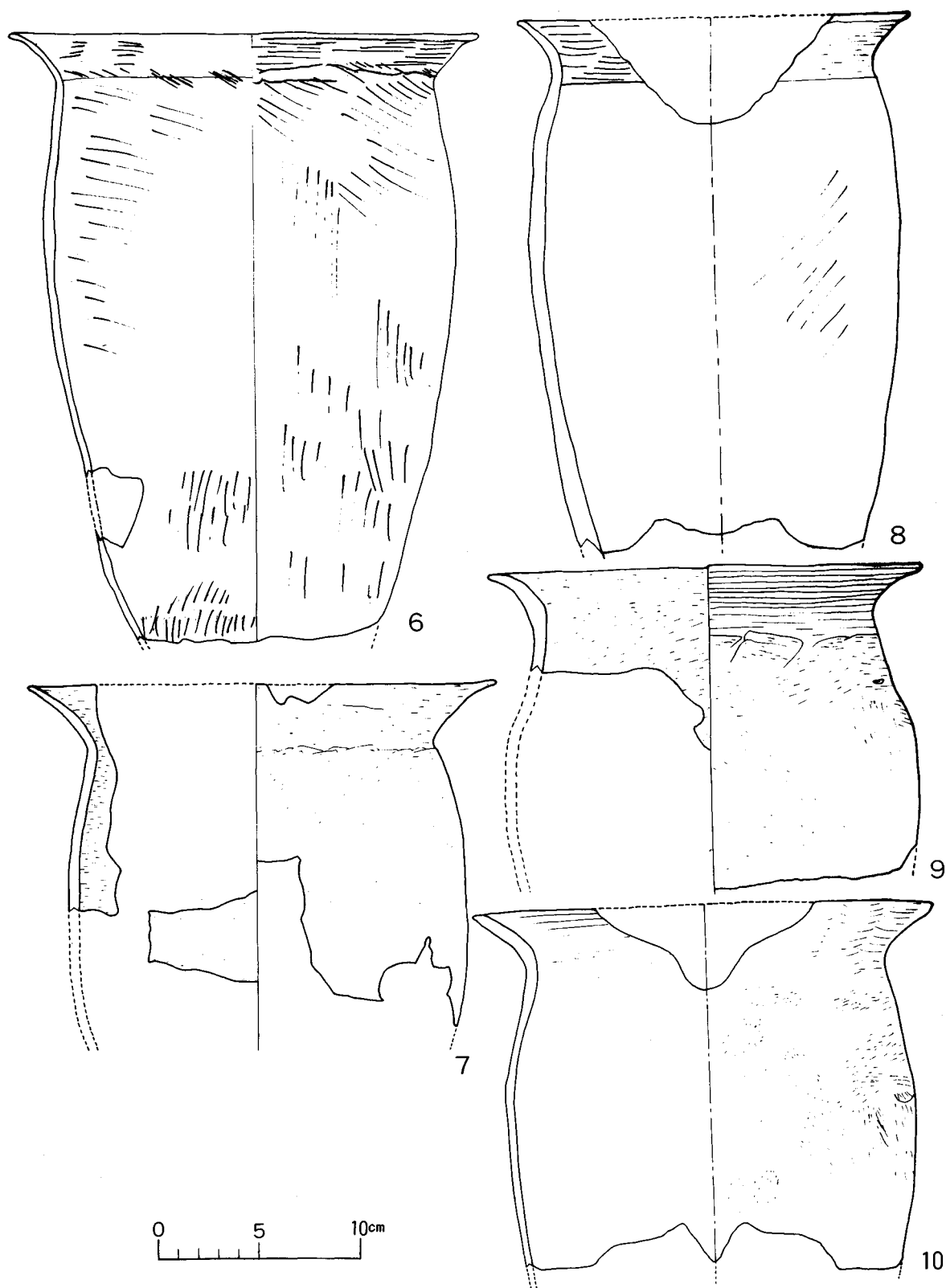


第 7 図 U-17 住居址平面図

は徐々に幅を狭めながら、壁外へ75cm掘り込んでいる。壁面における幅は45cmである。遺物は、カマド前面および住居址東南部に集中している。なお破片は、全国の覆土中にみられる。



第 8 図 U-17 住居址出土遺物実測図 I

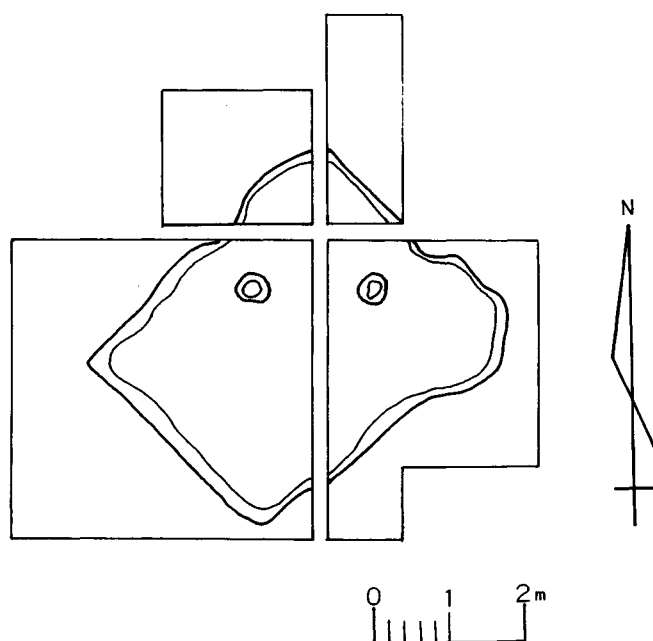


第 9 図 U-17 住居址出土遺物実測図 II

C-1区、同一レベル上に甑等大形の遺物が集中しており、住居址の可能性を思わせたが、層位に差がみられず、また、遺物を載せている面にも踏み固め等の痕跡が認められず、住居址であるとは断定しがたい。

C-6住居址

主軸を $N-45^{\circ}-E$ にとり、長軸 4.2m、短軸 3.1mを計る。東隅が若干張り出していたり、北西壁から線形を呈していたりするが、全体に長方形を呈する。床面は全体に固く踏み固められている。壁は、ほぼ直立する部分、緩やかに傾斜をもつ部分の両形状を呈する。遺物は大部分が土師器の破片で、床面上には一点も無い。

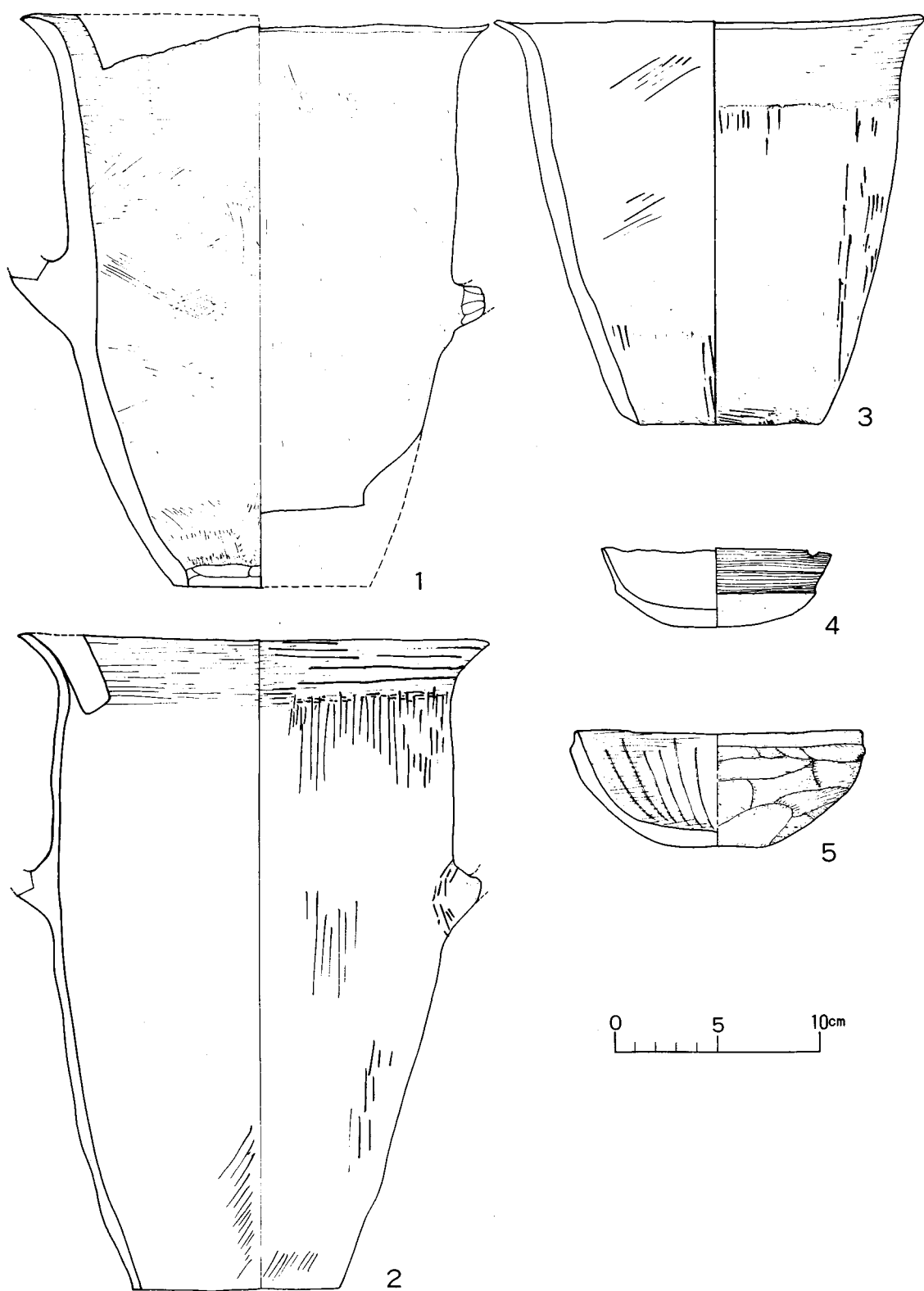


第 10 図
C-6 住居址

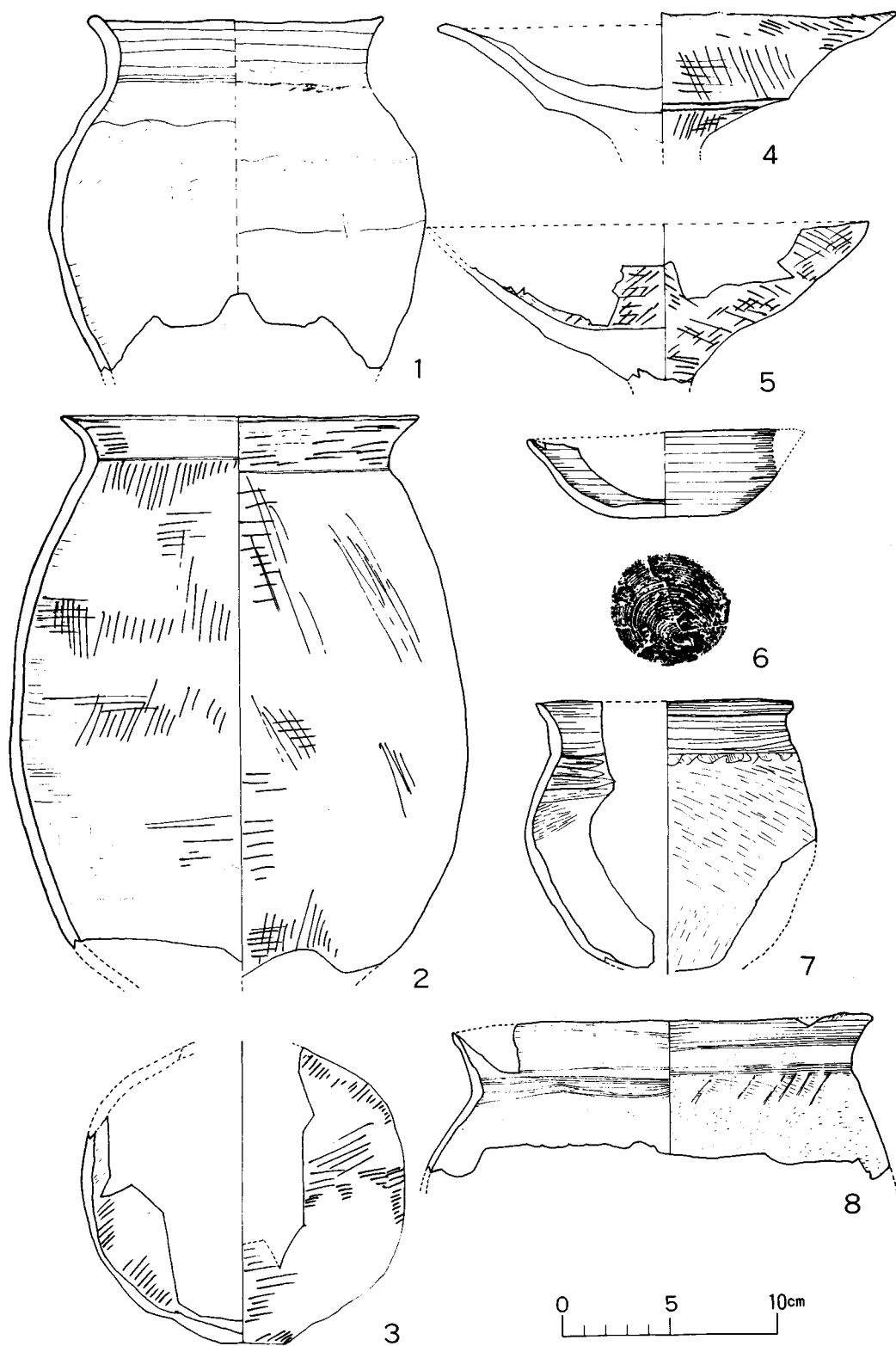
M-9住居址

甕が2個体出土している。土層が他グリッドと異り、また、遺物をのせている面も踏み固められていて、住居址であるとしてさしつかえあるまい。グリッド内における住居址床面は、一定しており、ピット等は発見されていない。グリッド東壁（1m幅）北隅から南へ40cm、北壁（3m幅）東隅から西へ38cmの範囲は、土層が異り、住居址の壁の存在が知れる。しかし、住居址壁を構成している土層は、隣接する、L-9区には全く見られない。また、遺物が出土した付近には、焼土粒、灰が出土しており、カマドが近在することを知らしている。これらのことから、M-9住居址は、 $N-45^{\circ}-E$ に主軸方位をもち、カマドを北東壁にもつ、やや大型な住居址であるといえる。

表土から遺構上面まで 1.2mあるため、遺構の存在を知るのみである。



第 11 図 Cライン出土遺物実測図



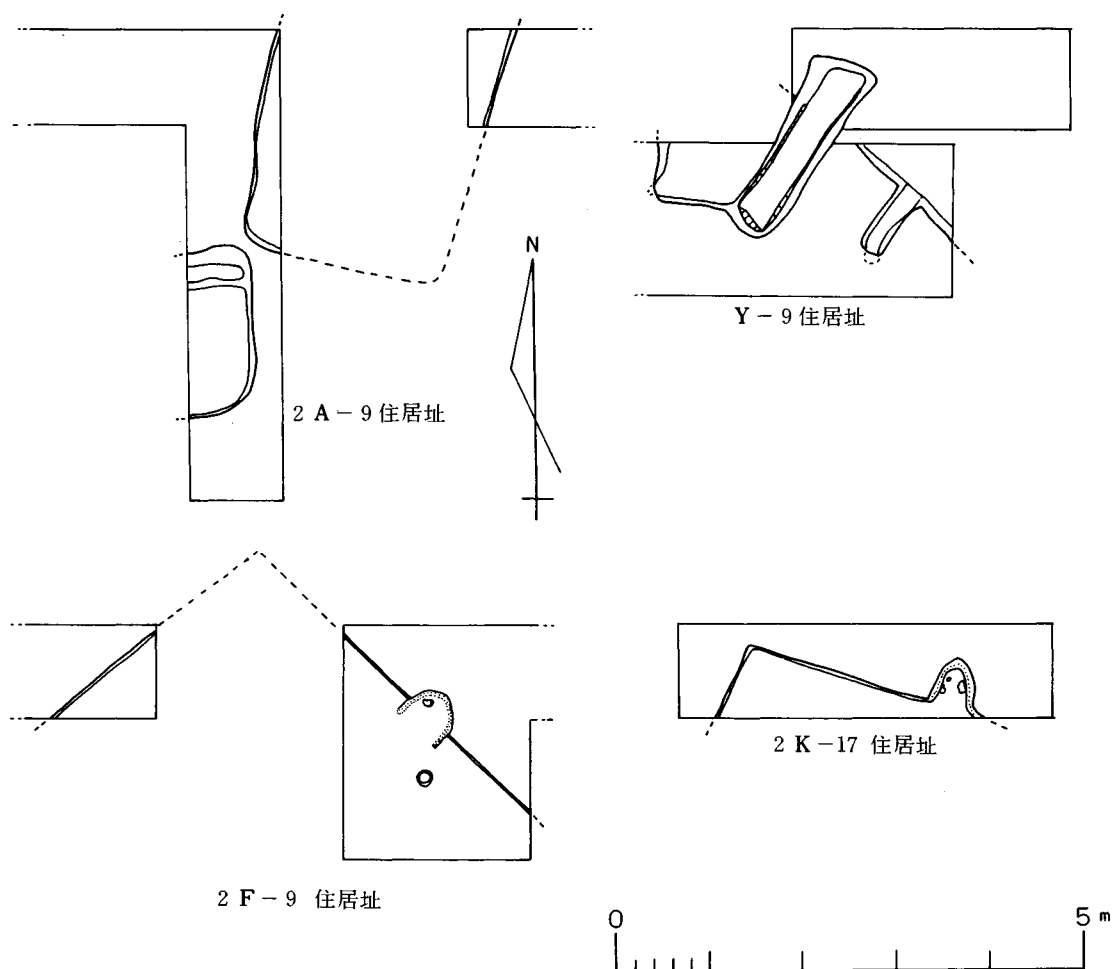
第 12 図 9 ライン出土遺物実測図

P-9 住居址

グリッド北東隅に甕が倒立して出土している。甕の周辺は、サラサラした粘土が散在しており、カマド裾に利用されたものと思われる。床面と考えられる面は、連続せず、また、軟かい。グリッド内の土層はほぼ水平に堆積しており、当グリッドが堅穴の中央に位置することを示すと思われる。規模・形態共に不明であるが、カマドの位置、粘土の方向からすると、M-9 住居址と同様の形態を示すものと思われる。出土した甕は、2 次的火熱を受けており、検出後、霜によって復元不可能なほど崩壊してしまった。

Y-9 住居址

西南壁のみ確認されている。主軸を、 $N-44^{\circ}-E$ とする。規模は不明であるが、X-9 区に壁が見られないから、小形の住居址であろうと思われる。壁は若干の傾斜をもつ。床は固く踏みかためられていた。遺物は全て破片で、覆土中より出土し、復元するに至らなかった。西南壁を掘り込ん



第 13 図 トレンチ確認住居址平面図

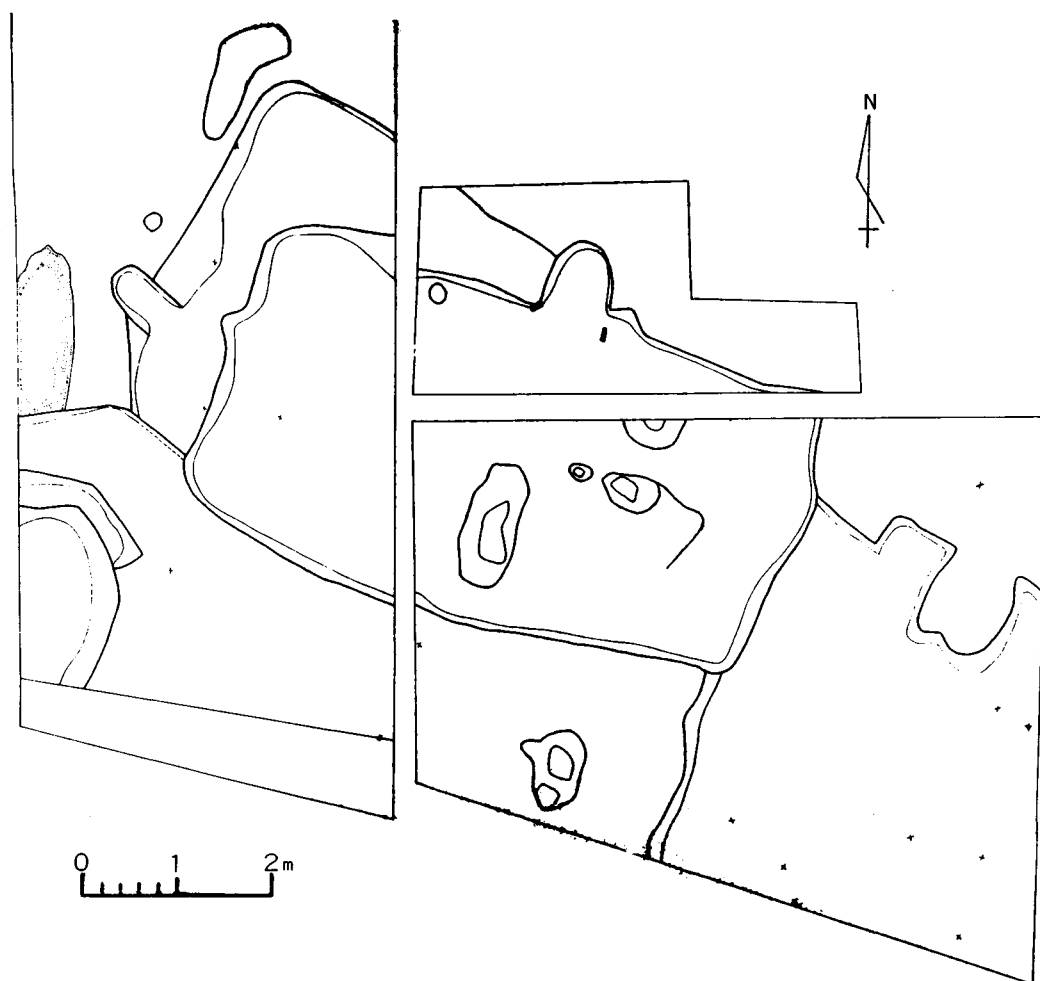
で長軸 2.2m、短軸 0.5～ 0.6mの長方形の土壇が在る。壁内面に杉板材を立てており、木棺墓であらうか。深さは48cmを計る。

2 A - 9 住居址

Z - 9 区、2 A - 9 区にかけて存在し、壁はほぼ垂直に落ちる。床面は水平で、全面に固い。N - 10° - E に方位をとる。Z - 9 区西側に竪穴東壁が確認されており、短辺 2.4m、長辺 3 m 以上の長方形を呈すると推察される。住居址内の遺物は、覆土中に土師器小片がわずかにみられるのみである。竪穴を掘り込んでいる住居址基盤層の最上層内には、Fig-12に示した高杯、壺が出土しており、住居址の時期を間接的に示している。

2 F - 9 住居址

主軸をN - 50° - Eにもつ。北東壁にカマドを有する。カマドは大部分が壁外に張り出している。壁面幅50cm、奥行52cmを計り、全体として馬蹄形を呈する。裾は、白色の粘土粒をごく僅か含むが、

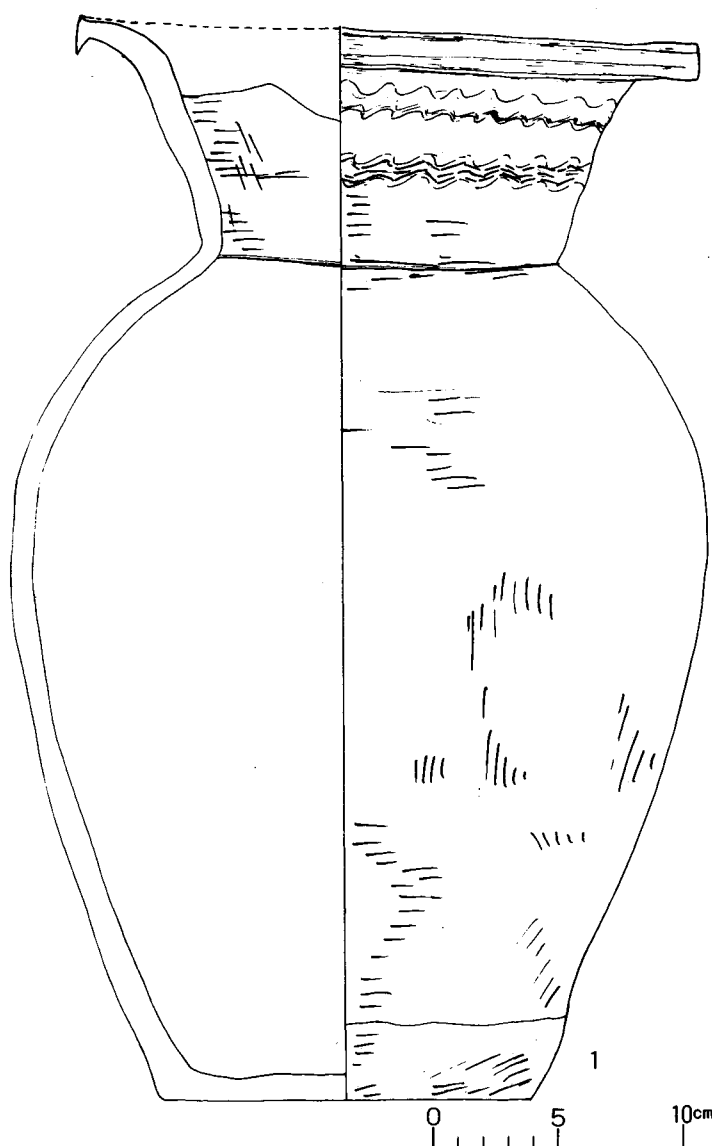


第 14 図 2 M - 9 ・ 2 N - 9 ・ 20 - 9 ・ 2 P - 9 住居址平面図

大部分が覆土と同様の粘土で構築されている。カマド内灰層中および、右裾前面の床面上に各々壺形土器が出土している。壁はほとんど直立している。床面は固く、水平であり、何の付属施設も確認されていない。住居址の規模は不明であるが、カマドが北東壁中央に設置されていたとすれば、一辺 5 m 前後であると思われる。

2 K-17 住居址

北東辺の一部および、カマドが確認されている。主軸方位は、 $N-20^{\circ}-E$ を示す。壁はほぼ直立し、コーナーは直角を呈する。カマドが北東壁中央に設置されていたとすれば、竪穴は一辺約 4.3 m 前後になるものと思われる。床面はほぼ水平で、何の設備ももたない。カマドは、大部分が竪穴外に広がると思われたが竪穴内に粘土を使用して裾を構築していたことが後に判明した。よって煙道部のみ竪穴外へ張り出したものと成し得る。



2 M・2 N・20・2 P-9

住居址

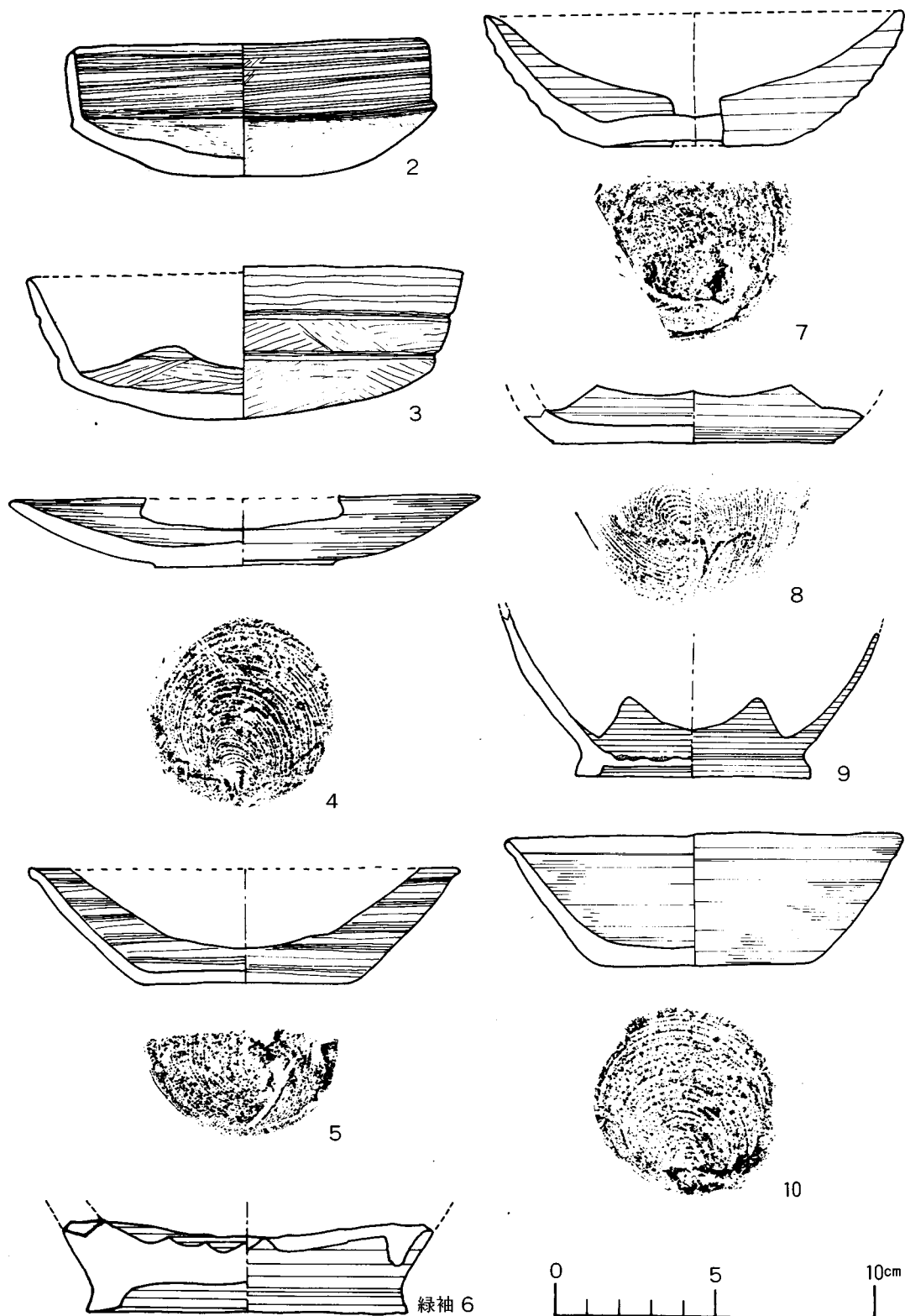
この付近は層位が全く安定せず、住居址の明確な規模は、2 N-9 住居址を除いてとらえがたかった。しかし焼土粒の混入床面レベルが住居址ごとに異なり、それによって、各住居址が区別されたものである。

第 15 図

2 M-9・2 N-9・20-9

2 P-9

住居址出土遺物実測図 I



第 16 図 2 M-9・2 N-9・20-9・2 P-9 住居址出土遺物実測図 II

2 M-9 住居址

主軸をN-25°-Eにもつ。床面は凹凸がはげしい。北東壁に若干の焼土粒・白色粘土粒を混入するブロックが見られたが、面を成すものは一つとして無く、カマドがこの位置に存在したものか、破壊された残物のみが存在しているものかの区別はつかない。壁を構成している粘土層も全く安定せず、傾斜等についても定かでない。なお住居址の規模は、焼土粒を含む、遺物含有層と、比較的安定した床面構成粘土と遺物含有層の混在層とも排除した段階をもってそれとした。

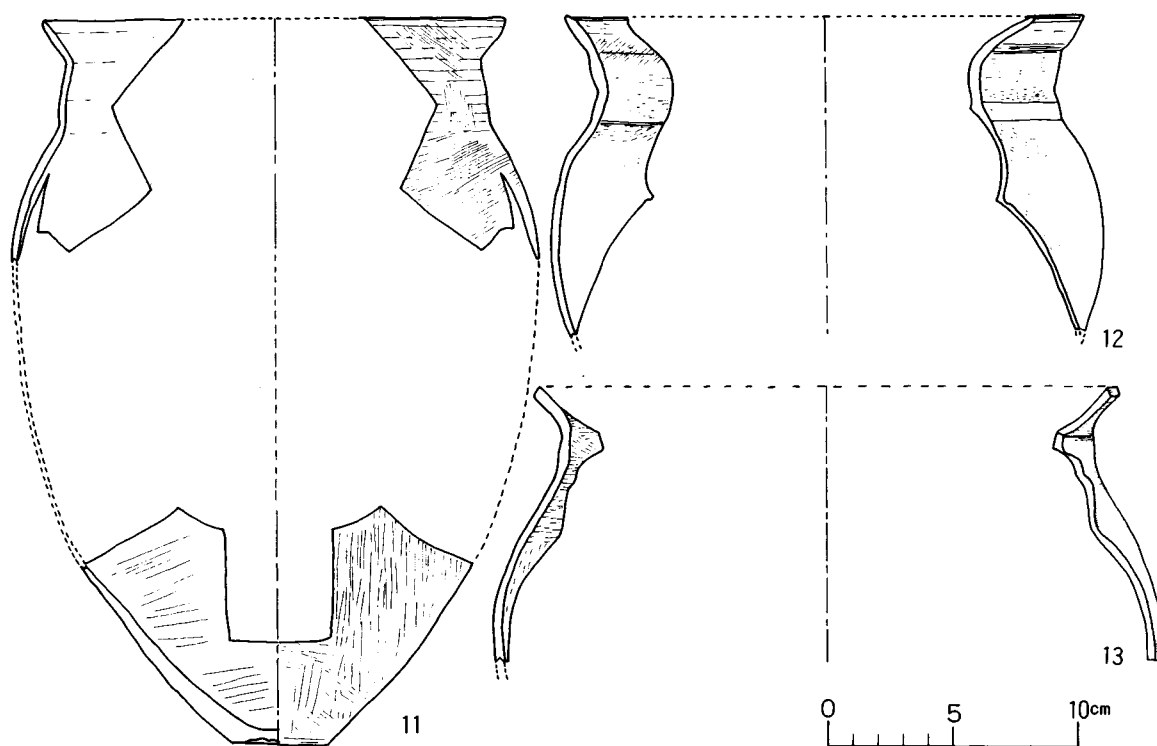
2 N-9 住居址

長軸 6.4m、短軸 3.4mの長方形を呈し、主軸を短軸側にとり、N-20°-Eを示す。床面は凹凸がはげしく、柱穴等の存在は知れない。壁は若干の傾斜をもつ。カマドは北東壁中央に設置されており、平面形態は、馬蹄形を呈する、ほぼ全体が壁外に構築され、住居址内には裾の芯に使用された花崗岩が1枚ずつ位置する。裾に使用された粘土は、覆土あるいは壁とほとんど同様に、壁に貼りつけたものなのか、壁を切ったまま使用したのか区別はつかない。カマド内灰層は、住居址の壁を延長した部分に最も厚く、2層認められるが、奥行きがない。

住居址中央覆土上面に厚さ1cm前後の灰層、焼土塊、炭化材、土師器片等が混在している。土師器窯址かとも考えられるが、東西 2.8m、南北 1.4mの規模をもち、不整形を呈する。

20-9 住居址

北西壁にカマドを有する。主軸はN-60°-Wを示す。東南部を2 N-9住居址、南部を2 P-9



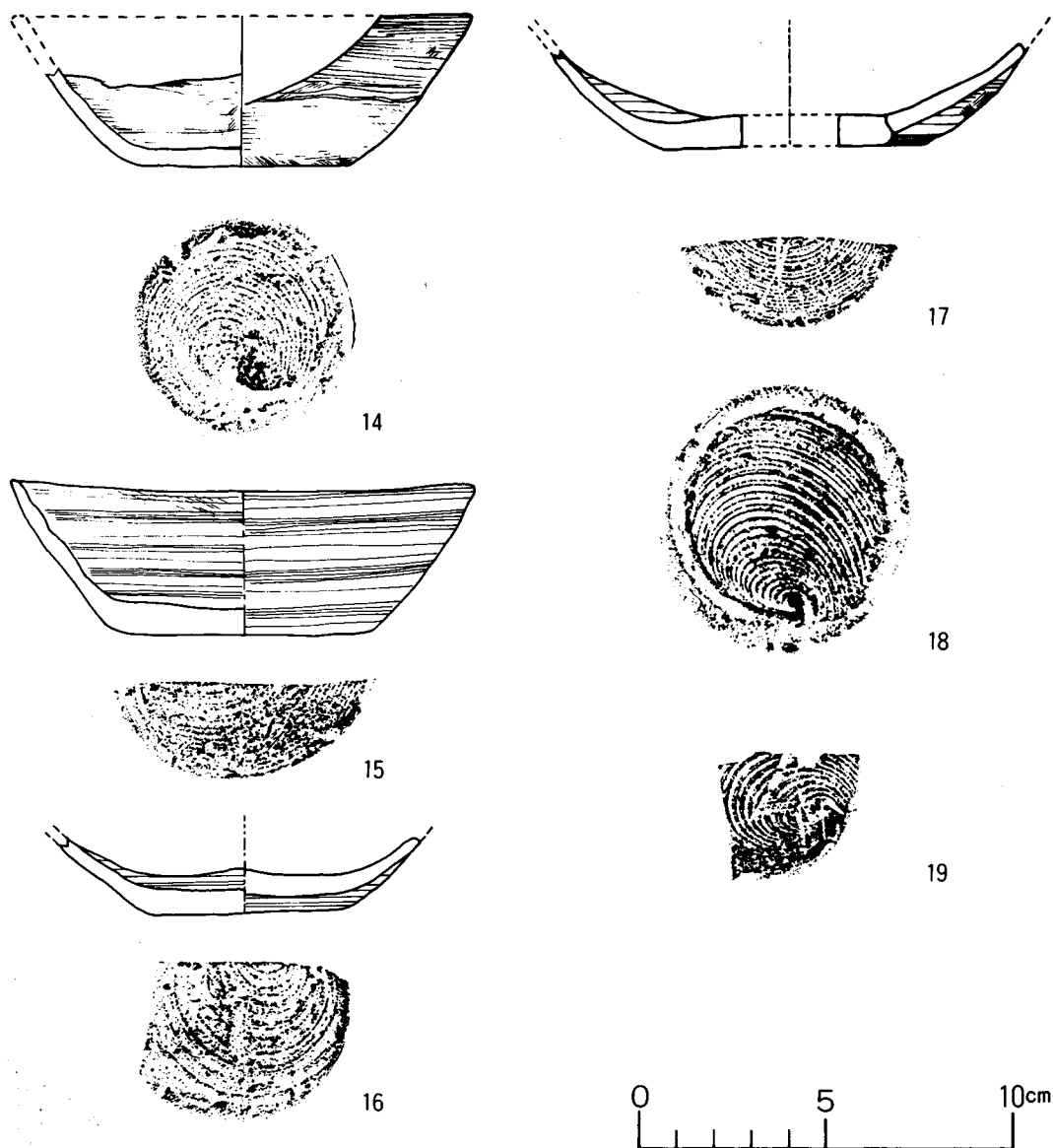
第17図 2 M-9・2 N-9・20-9・2 P-9 住居址出土遺物実測図 III

住居址によって切断されている為、規模は不明である。カマドは馬蹄形を呈する。焼土が多数散乱するが、灰層は僅かである。裾に白色粘土は使用されていない。カマドから住居址北隅にかけては、床面が2段造りになっているが、面は比較的軟らかい。

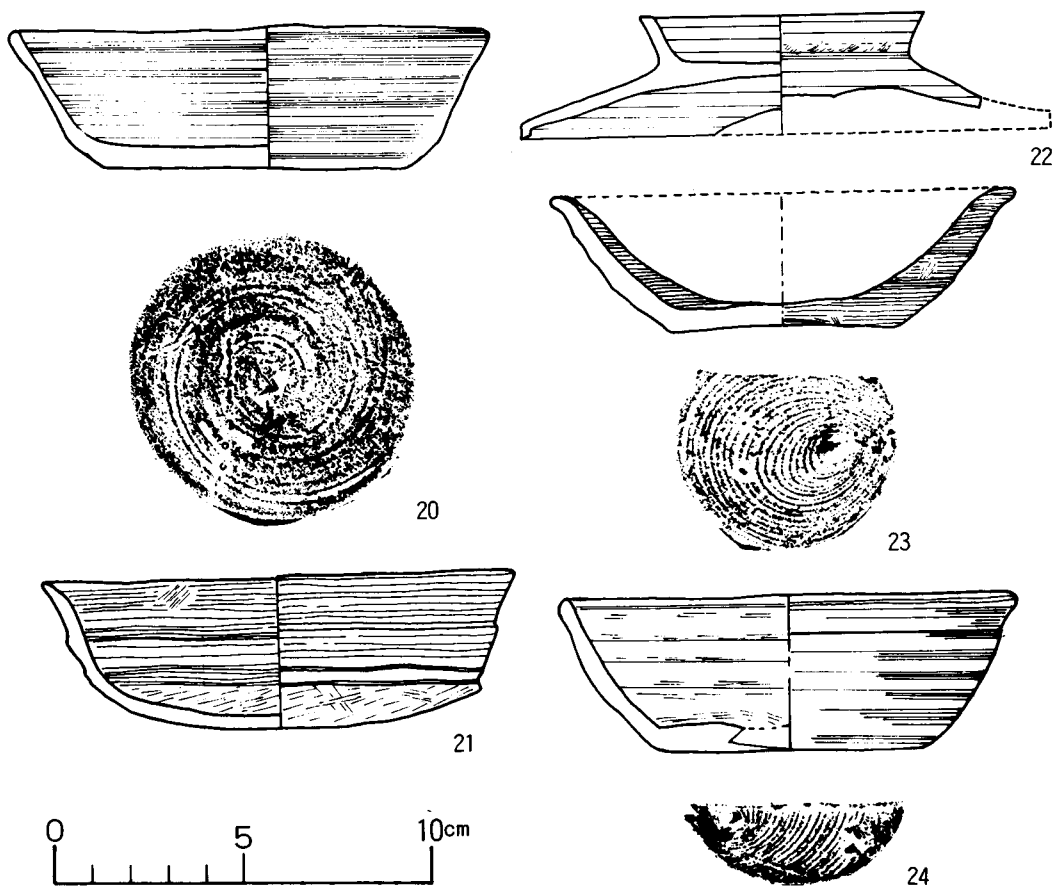
2 P-9 住居址

形態、規模共に不明であるが、連続した固い面をもつ。

これら4基の住居址の前後関係は、20-9住居址・2 M-9住居址→2 P-9住居址→2 N-9住居址となる。2 M-9住居址と20-9住居址の前後関係は層位では不明である。



第18図 2 M-9・2 N-9・20-9・2 P-9 住居址出土遺物実測図 IV



第 19 図 2 M-9・2 N-9・20-9・2 P-9 住居址出土遺物実測図 V

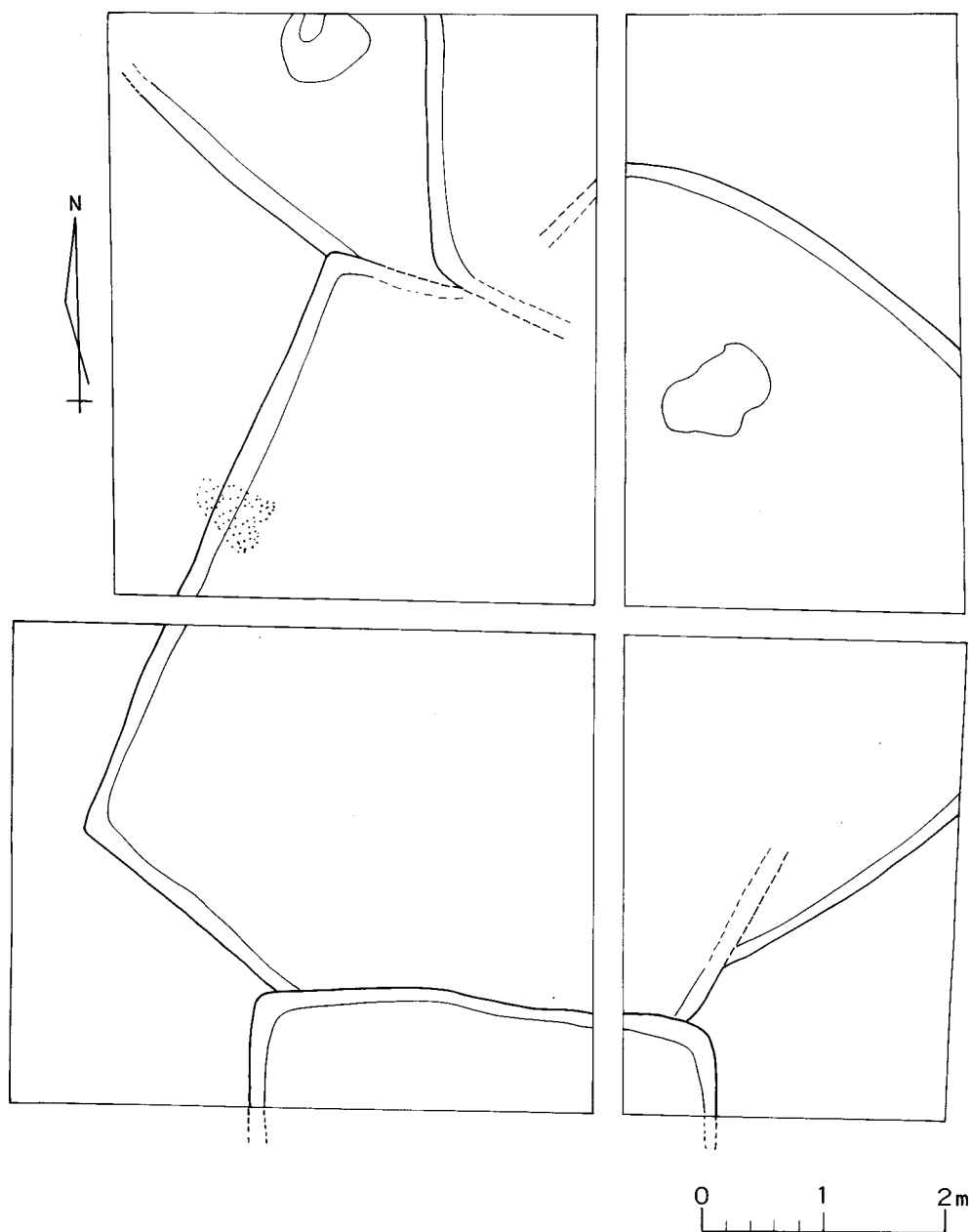
2 M-14住居址・2 N-14住居址

本住居址を中心とした地域もまた、層位の全く安定しない地域である。2 N-14住居址の主軸は N-70°-Wを示し、一辺約 5.3mを測る。全体に台形を成すようである。しかし北辺および東辺については不明確である。カマドは、北西壁中央にある。白色粘土を使用せず、北西壁と同様の緑青色粘土を使用したようである。大部分が住居址内にあったと思われるが、形態・規模共に不明である。出土遺物は全て覆土中である。床面西側は比較的固く、安定しているが、6種類におよぶ粘土（基盤層）によって構成されている為、若干軟らかくなる東側では、2 M-14 住居址の床面は、壁下が固く安定しているが、2 N-14住居址と区別がつかなくなる。2 M-14住居址の床面は、壁下が固く安定しているが、2 N-14住居址と重覆する周辺では、安定しない。

2 M-14住居址は、一辺 5.5m前後であろうと思われる。

2 P-14住居址

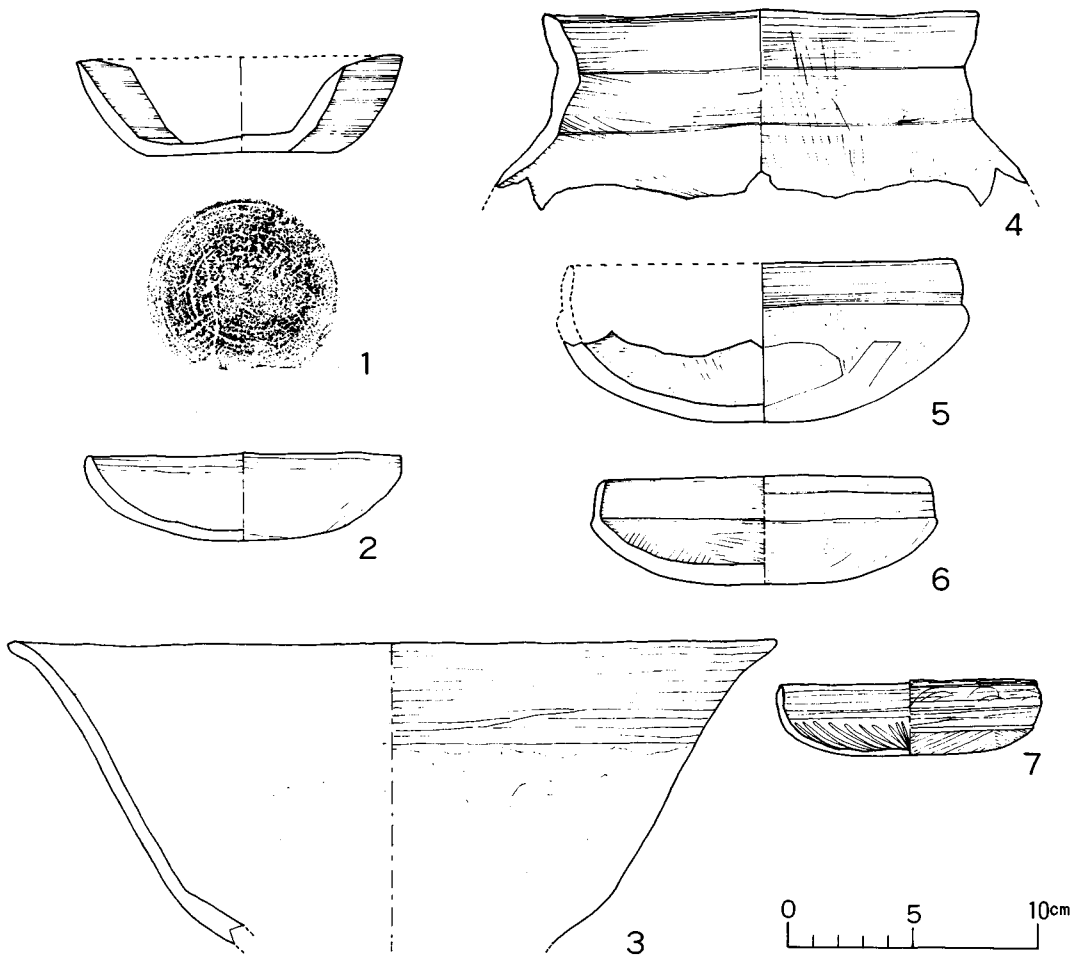
主軸方位を N-45°-Wにとる。5.0× 5.6mの規模をもち、若干横長の感を呈する。しかし、この付近は層位が全く安定しておらず、南東壁が正確に確認し得ていることは言い難い。おそらく、5.6m前後の方形を呈するものと思われる。カマドは北西壁中央に設置されている。白色粘土を利



第 20 図 2 N-14 住居址平面図

用しておらず、焼土もごく僅かしかみられなかった。カマドに使用された青灰色粘土、あるいは焼土等カマドを構成しているものは全て、竪穴内に位置し、三角形を呈する。柱穴は、北隅に1本確認され、径33cm、深さ42cmで円形を示す。床面は比較的安定し、平である。2N-14区内の住居址覆土上面に、焼土塊、灰、木炭層があり、2N-9住居址覆土中にみられた例と同様、住居址埋没過程の窪みを利用した土師器窯址と考えられる。

本住居址周辺は、先に述べた如く層位が不安定であり、遺構の検出が困難であった。Fig-22に示した点線部は、面の差を示したもので、各々住居址の可能性が考えられるが、範囲、形態を確定できるものは無い。そのうち、南北に横たわる溝は2本とも近代の所産であり、出土遺物は無い。



第 21 図 2N-14・2P-14 住居址出土遺物実測図

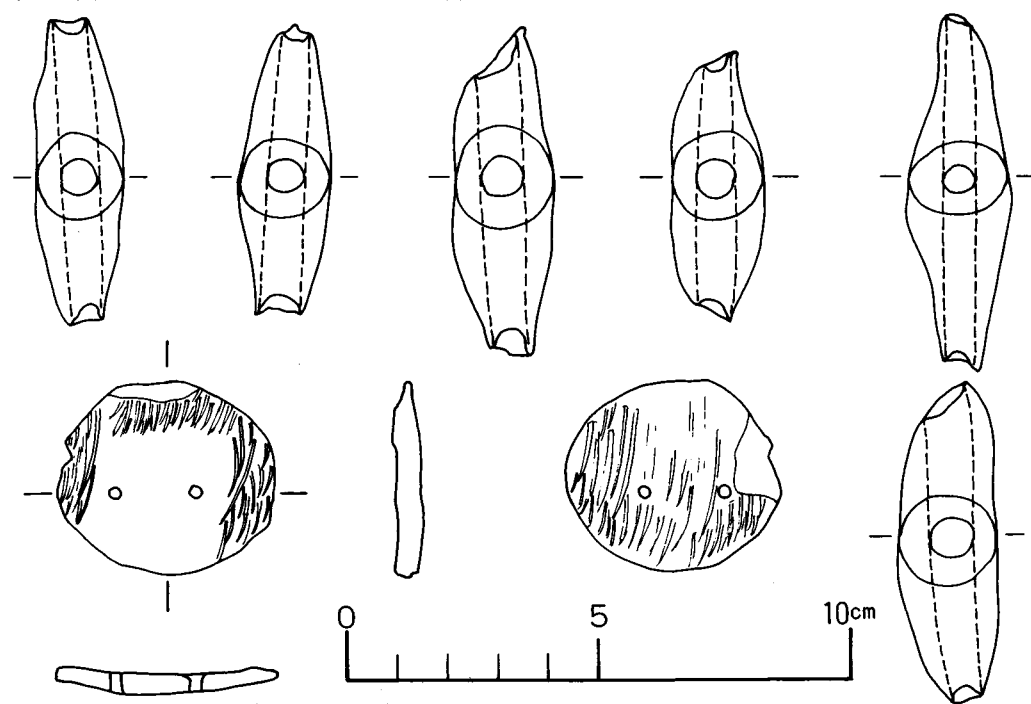
2. 土 師 器 窯 址

M-11窯址

北側が土坎によって切断されていたため、全体の規模は確認できないが、南北60cm、東西50cm範



第 22 図 2 P-14 住居址及び周辺遺構平面図



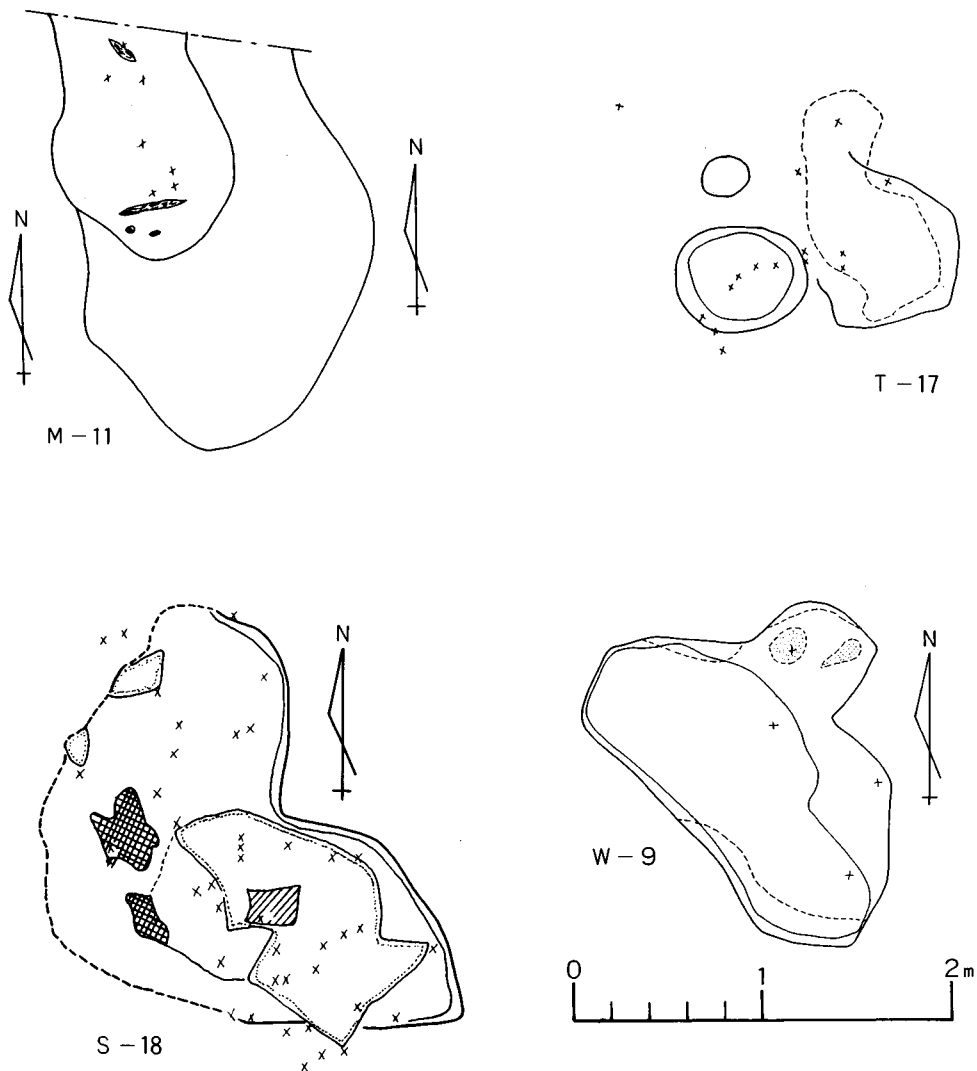
第 23 図 2 P-14 住居址出土遺物実測図

圀に焼土粒、木炭、灰が集中し、上下して土師器が出土している。この範囲を限定する掘り込みは確認できなかった。

この東および東南に、掘り込み面がみられるが、焼土等は認められない。出土遺物は、土師杯のみがみられる。

T-17 窯址

長径35cm、短径27cm深10cmの楕円形ピット内に焼土の集中をみせ、上に土師杯が完形で出土している。ピットの東、および北東側に灰の集中した個所があり、（図中点線範囲内）全体にわずかに落ち込んでいた。灰層中、もしくは、上に土師杯の破片がみられた。ピットの北に、直径12cmのピットがあるが、覆土に何の特徴もみられず、本遺構に伴うものかどうか決定しがたい。よって、規



第 24 図 土 師 器 窯 址 平 面 図

模は、東西75～80cm、南北65～70cmの範囲におよび、南北に広がる楕円形の北辺中央に、西に広がる円形を付与した格柵を示している。そして、焼土が西にあってその上部に完形遺物がみられ、灰が東に集中して出土したことは、窯址の機能を想定させるものである。

S-18窯址

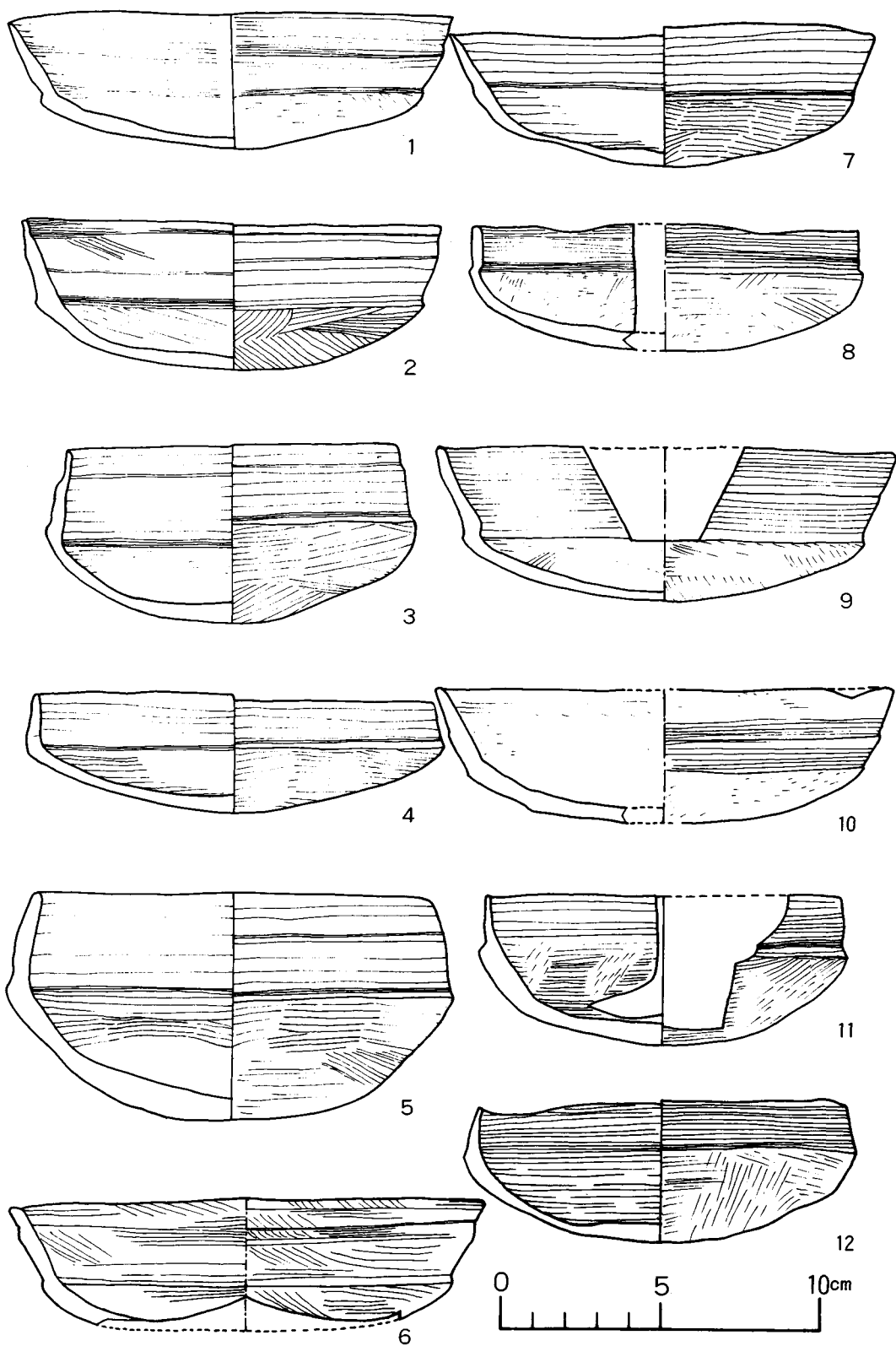
L字形を呈し、東西 110、南北 110cm、幅50cm前後を計る。中央部に灰（図中）東側に焼土（図中点線範囲）が集中してみられ、焼土上には木炭（図中）もみられた。底面はほぼ水平であるが、東側が若干落ち込む。遺物はほぼ全面にみられる。

W-9 窯址

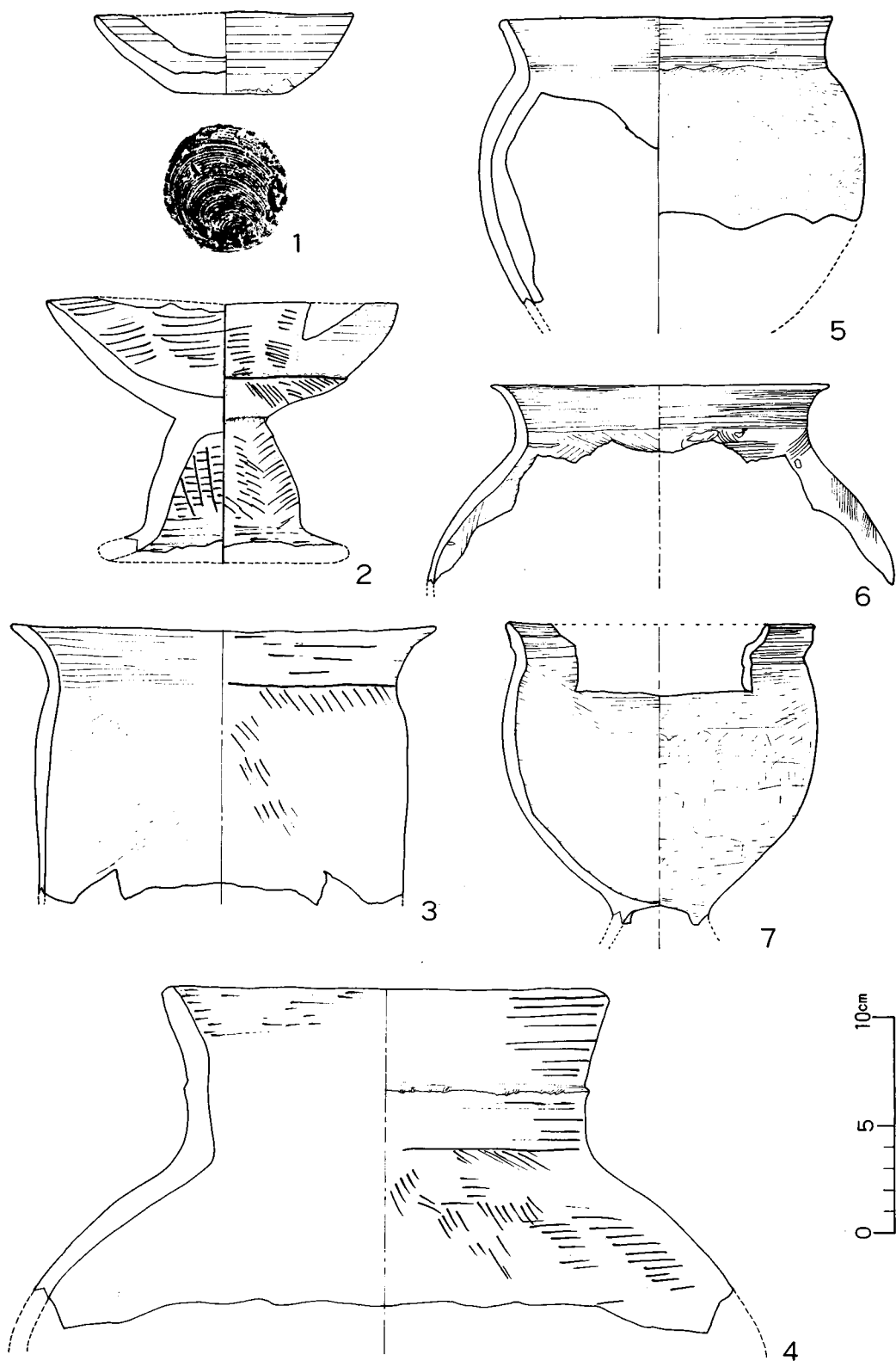
北西から南東にかけて、長さ1m、幅50cmの楕円形を呈し、底面はほぼ水平になっている。全体に灰を含む。北東中央部には、一段高い底面をもって、径30cmの張り出し部をもつ。この部分に焼土が集中し（図中内）他に焼土はみられない。遺物は土師器片がわずかにみられる程度である。

その他

2N-9住居址および、2P-14住居址の覆土上面にみられた、焼土、灰、炭化材を含有する落ち込みは、いずれも底面が、住居址の覆土堆積の状況をそのままみせており、構築した様相は呈していない。しかし、焼土の在り方は、住居址に堆積した粘土の上面が焼土化したものとする事が判明し、焼土が他から移入したものでないことを示している。これらのことから、住居址の覆土堆積進行中の窪みを利用した窯址の可能性も充分考えられるのである。2N-14例からは、土師器甕が出土している。



第 25 图 T-17・M-11窯址 2 P-13土坑出土遺物実測図



第 26 図 トレンチ 出土遺物実測図

III 古環境の復元

小排46号トレンチによって遺跡を縦断した土層を観察することができる。幹排2号と小排20-2号と間においてポイントを決め全体土層を確認した。幹排2号と小排46号との交点をNo.1ポイントとし、南へ30m毎にNo.2・3……と連続し、幹道4号との交点をNo.11とした。また小排46号と20-2号との交点をNo.12とした。

その結果No.1～No.5の南6mまではほとんど差が無く、耕作土-火山灰(Ta)-灰白色粘土-黒褐色粘土-泥炭(2層)-火山灰(Tb)-泥炭(6～12層)-と連続し、さらに灰褐色粘土層および黒褐色粘土層が交互してみられ、その下位に、青灰白粘土層(青ネバ)と黄褐色粘土層が混在する。No.5ポイント南6mから火山灰Tb層が水平レベルに間断無く出現し、北へ向けて連続する。後に述べる花粉分析資料のAポイントは、このNo.5ポイントFの土層である。

次にNo.5ポイントの南6mからNo.9ポイントの南8mまでの土層は、基本的には前述の層位とほとんど同様(火山灰Ta層のレベルもほとんど変化が無い)であるが、連続していた火山灰Tb層が大部分の個所でみられなくなり、その存在が極稀になる。また、泥炭層も火山灰Tb層と同一の変化をみせ、ほとんどこの範囲ではみられなくなる。しかし、部分的に黒褐色粘土(前述の層位において、灰褐色粘土層と交互する黒褐色粘土に相当)上に泥炭がみられ、この2層の間に鬼高式土器がみられる。

No.9ポイント南8mからNo.12ポイント北4.8mまでの土層は、これまでと異なる。耕作土-火山灰(Ta)-灰白色粘土-黒褐色粘土、と、ここまでは全く同一であるが火山灰Taのレベルは、前者と比較して+15～20cmを測る。さらに異なる点としてこの下位に火山灰Tbおよび泥炭層を全く含まず、黒色粘土1-黒色粘土2-黒色粘土3というように、3層の黒色粘土層をもつ。

この3層各々の間に、灰褐色粘土、緑褐色粘土、褐色粘土、青灰色粘土をはさむ場合が多く、しかも各土層は連続しない。また、3層の黒色粘土も場所によって様相を違え、各々の層位として連続するとは言い難い。3層の黒色粘土および、その中間に位置する各粘土層は、ほとんど古墳時代～平安時代の土器を含有している。その下位に無遺物層である、黄褐色粘土層および、青灰色粘土層がみられる。黄褐色粘土層が上位であり、青灰色粘土層が下位である場合が多いが、両者が混在する場合も多い。この混在のし方も場所によってかなり違いをみせ、遺構の検出を困難なものにしている。また、黄褐色粘土層は厚い部分と、薄い部分があり、場所によっては黄褐色粘土層がみられず、青灰色粘土層のみがみられる場合もある。しかもこのような部分は、平面で遺跡全体をみると意外に多いのである。

No.12ポイント北4.8mからNo.12ポイントまでの土層は、No.1ポイントからNo.5ポイント南6mまでの土層と同一(火山灰Ta層のレベルも含む)である。

このように、小排46号を通して北から南へ土層を観察した結果は次のように要約できる。

1. 火山灰Ta層は全域にみられるが、No.9ポイント南8mからNo.12ポイント北4.8mの間は、そ

試 料 表

A 試料 No.5 ポイント

試料番号	採 取 地 点	岩 質	花 粉 ・ 胞 子 化 石 (個体数/g) 産出傾向
A - 1	No.5 - 1 火山灰Ta	Pumice混り暗灰色粘土	1.8×10^5
A - 2	No.5 - 2 Tb上層	暗 青 灰 色 粘 土	1.7×10^4
A - 3	No.5 - 3	青 灰 色 粘 土	3.4×10^4
A - 4	No.5 - 4	暗 青 灰 色 粘 土	4.3×10^4
A - 5	No.5 - 5	黒 灰 色 粘 土	3.6×10^3
A - 6	No.5 - 6	暗 青 灰 色 粘 土	5.1×10^3
A - 7	No.5 - 7	暗 緑 灰 色 粘 土	4.0×10^3
A - 8	No.5 - 8	暗 灰 色 粘 土	1.6×10^3
A - 9	No.5 - 9	暗 灰 色 粘 土	2.1×10^3
A - 10	No.5 - 10	青 灰 色 粘 土	6.8×10^3

B 試料 No.9 ポイント

B - 1	Tb下層泥炭Ⅰ	暗 青 灰 色 粘 土	2.5×10^4
B - 2	Tb下層泥炭Ⅱ	暗 青 灰 色 粘 土	7.2×10^4
B - 3	土器集中地点	暗 灰 色 粘 土	—————
B - 4	青灰色粘土層	青 灰 色 粘 土	—————
B - 5	土器集中地点	炭質物混り黒褐色粘土	—————
B - 6	黒褐色粘土層	黒 褐 色 粘 土	3.8×10^3
B - 7	緑褐色粘土層Ⅰ	緑 褐 色 粘 土	—————
B - 8	” Ⅱ	緑 褐 色 粘 土	1.3×10^4
B - 9	” Ⅲ	緑 褐 色 粘 土	—————
B - 10	” Ⅳ	緑 褐 色 粘 土	1.2×10^3

の他の地域との比高+15~20を測る。

2. 火山灰Tb層および泥炭層は、No.1ポイントからNo.5ポイント南6mの間と、No.12ポイント北4.8mからNo.12ポイントの間に層を成して連続し、No.5ポイント南6mからNo.9ポイント南8mまでの間では極稀にしか見られない。さらに、No.9ポイント南8mからNo.12ポイント北4.8mの間は全くみられない。

3. 遺物は、No.5ポイント南6mからNo.12ポイント北4.8mまでの間にみられ、特にNo.9ポイント南8mから南の地域で多い。

4. No.9ポイント南8mからNo.12ポイント北4.8mの間の土層は他と異なり、黒色粘土が3層存在する。

これらから、集落部分は、No.9ポイント南8mから、No.12ポイント北4.8mまでが主体であり、北へは、No.5ポイント南6mまでの範囲に及ぶ。集落部の北および南は、生活に付随する遺物は発見されておらず、泥炭等の存在から、沼地のようなものであったろうと思われる。

さて、このような状況を示すなかで、2点を選び、各土層に対して花粉分析を行い、これによって、上記の古環境を復元してみたい。なお、花粉分析は、バリノサーヴェイ株式会社に依頼したものである。

1. 試料

試料は、A地点が、10点、B地点が10点の合計20点であり、それらの試料の試料番号、土質、花粉、孢子産出傾向等については、試料表に示す通りである。

分析によって検出された花粉、孢子化石には、以下のものが挙げられる。

《A P - 1 (針葉樹花粉)》

Adies (モミ属)、Picea (トウヒ属)、Pinus haploxylon (五葉型松)、Pinus diploxylon (二葉型松)、Pinus (マツ属)、Larix (カラマツ属)、Tsuga Silboldii (ツガ)、Tdiversifolia (コメツガ)、Podocarpus (マキ属)、Taxodiaceae (スギ科)、Cryptomlria (スギ属)、T.C.T (Taxaceae イチイ科、Cupressaceac ヒノキ科、Taxodiaceae スギ科)。

《A P - 2 (広葉樹花粉)》

Tuglans (クルミ属)、Pterocarya (サワグルミ属)、Salix (ヤナギ属)、Alnus (ハシノキ属)、Betula (カバノキ属)、Carpinus (クマシデ属)、Corylus (ハシバミ属)、Castanea (クリ属)、Castanopsis (クリカシ属)、Fagus (ブナ属)、Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)、Lepidobalanus (コナラ亜属)、Aphananthe (ムクノキ属)、Celtis (エノキ属)、Ulmus (ニレ属)、Zelkova (ケマキ属)、Moraceae (クワ科)、Magnoliaceae (モクレン科)、Hamamelis (マンサク属)、Leguminosae (マメ科)、Sapium (シラキ属)、Aesculus (トチノキ属)、Buxus (ツゲ属)、Elaeagnus (グミ属)。

《N A P (草本花粉)》

Persicaria (サナエタデ属)、Polyzonunm (タデ属)、Caryophyllaceae (ナデシコ科)、

Chenopodiaceae (アカザ科)、Thalictrum (カラマツソウ属)、Crusiferae (アブラナ科)、Impatiens (ツリフネソウ属)、Umbelliferae (ヤリ科)、Carduoideae (キク亜科)、Artemisia (ヨモギ属)、Cichorioideae (タンポポ亜科)、Gramineae (イネ科)、Typha (ガマ属)、Cyperaceae (カヤツリグサ科)、Sagittaria (オモダカ属)、Zea (トウモロコシ属)、Cardesia (マルバオモダカ属)、Nymphoides (アサザ属)。

《FP (形態分類花粉)》

Triporate pollen (三孔型花粉)、Tricolpate pollen (三溝型花粉)、Tricolporatepollen (三溝孔型花粉)、Inaperturatepollen (無口型花粉)。

《FS (羊歯類孢子)》

Lycopodiaceae (ヒカゲノカズラ科)、Selaginellaceae (イワヒバ科)、Osmundaceae (ゼンマイ科)、Polypodiaceae (ウラボシ科)、Sphagnum (ミズゴケ属)、Monoletespore (単条型孢子)、Triletespore (三条型孢子)。

《その他の微化石》

Pseudoschizaea (淡水性藻類)。

2. 試料分析及び古環境

A 地点試料

A-1 試料

草本花粉の割合が非常に多く、全体の59.6%を占めた。その殆どがGramineae であり52.1%であった。その他にCyperaceae・Sagittaria, Umbelliferae, Artemisia 等が低率で検出された。

針葉樹花粉は全体の26.7%を占めた。その代表的なものとして、Pinus が9.4%、Taxodiaceae が14.0%検出された。その他に Abies, Podocarpus, Cryptomeria, 等が低率で検出された。

広葉樹花粉は全体の9.8%と少なく、Alnus, Betula, Carpinus, Corylus, Castanea, Lepidobalanus, Zelkova, 等が低率で検出されたにすぎなかった。

羊歯類孢子は少ない。

古環境はGramineae, が非常に良く生育した草地と云えよう。そしてGramineae と共にUmbelliferae, Artemisia, Cichorioideae, Cyperaceae, Sagittaria 等と一緒に生育していたものと考えられる。

一方、樹木は、Taxodiaceae と Pinus が主体となって草地の周囲に林地を形成していたものと考えられる。

古気候は温帯であり、現在と同じと云えよう。なお、Sagittaria, が生育していたことにより、池沼の環境も存在したものと考えられる。

A-2 試料

草本花粉の割合が多く、全体の46.1%を占めた。その代表的なものとしてGramineae が29.5%、Cyperaceae が10.2%、Artemisia が4.3%検出された。その他にCaryophyllaceae, Crusiferae, Umbelliferae, Sagittaria 等が低率で検出された。針葉樹花粉は全体の9.8%と少なかったも

の、Taxodiaceae, が5.1%と比較的良好に検出された。

広葉樹花粉は全体の32.7%を占めた、その主なものとしてAlnus, Betula, Corylus, Fagus, Cyclobalanopsis, Lepidobalanus, Zelkova, 等が2～4%の割合で検出された。

羊歯類孢子は全体の9.1%であり、Poeyodiaceae, Monolete Spore, Trilete Spore, 等が検出された。

古環境は、Gramineae, Cypraceae, Artemisia, が主体となって生育した草地と云えよう。

この草地には、その他にCaryophyllaceae, Cruciferae, Umbelliferae, Sagittaria, 等と一緒に生育していたものと考えられる。又、Sagittariaが生育できる池沼が存在したものと云えよう。

樹木は針葉樹のTaxodiaceaeと広葉樹のAlnus, Betula, Corylus, Fagus, Cyclobalanopsis, Lepidobalanus, Zelkova 等が主体となって、草地の周囲に林地を形成していたものと云えよう。

古気候は現在と同じ温帯であろう。

A-3 試料

草本花粉が全体の81.7%を占め、非常に多かった。その大部分がGramineaeであり、65.2%検出された。

その他にArtemisia, Cichorioideae, Cypraceae, Sagittaria, 等が数%程度検出された。

樹木花粉の割合は、針葉樹、広葉樹の双方を合せて21.9%であり、Taxodiaceae, Alnus, Lepidobalanus等が2～3%程度検出されたほかは、Pinus, Pterocarya, Salix, Fagus, Celtis等が低率で検出された。

羊歯類孢子は少なかった。

古環境は Gramineae が非常に良く繁茂した草地と云えよう。そしてこの草地には、Cypraceae, Cichorioideae, Artemisia, Sagittaria, 等と一緒に生育していたものと考えられる。

またSagittaria が生育できるような池沼が存在したものと云えよう。そして、樹木は、草地の周囲に散在していたものと考えられる。古気候は温帯であろう。

A-4 試料

この試料は、A-3 試料と殆んど同じ花粉孢子構成をしている。従ってA-3 試料と同じ古環境であったと云えよう。

A-5 試料

草本花粉が全体の46.7%と多産する。その殆んどが Gramineae であり、37.7%検出された。その他に Artemisia が4.9%、Cyperaceae が1.6%、Chenopodiaceae が1.6%検出された。

針葉樹花粉は全体の17.2%であり、その大部分が Taxodiaceae で、11.5%検出された。その他にPinus が4.9%、Cryptomeria が、0.8%検出された。

広葉樹花粉は全体の12.7%であり、Alnus が5.7%の他は、Cyclobalanopsis, Corylus, Castanea, Fagus, Ulmus, Zelkova 等が低率で検出された。

羊歯類孢子は全体の21.3%であり、その主なものとして、Lycopodiaceaeが 5.7%、Selaginellaceae が4.1%、Monoletespore が3.3%、Triletespore が6.6%検出された。

古環境は Gramineae が主体となって生育した草地と考えられる。この草地には Artemisia、Cyperaceae の他に、Lycopodiaceae、Selaginellaceae 等の羊歯類も良好に生育していたものと考えられる。そして樹木は、Taxodiaceae、Pinus、Alnus 等が主体となって草地の周囲に林地を形成していたものと云えよう。

古気候は温帯であり、現在と同じであろう。

A-6 試料

草本花粉は全体の51.0%と多産する。その主なものは Gramineae であり、31.0%検出された。その他に Cyperaceae が8.4%、Chenopodiaceae が5.6%、Artemisia が4.2%検出された。

針葉樹花粉は全体の13.3%であり、主なものとして Pinus が5.6%、Taxodiaceae が4.9%検出された。

広葉樹花粉は全体の8.3%と少なかった。

羊歯類は全体の24.5%であり、主なものとして Monolete spore が9.1%、Trilete spore が9.1%検出された。

古環境は Gramineae を主体にした草地と考えられる。そして、この草地には Cyperaceae、Chenopodiaceae、Umbelliferae、Cichorioideae 等の草本ならびに Lycopodiaceae、Selaginellaceae、Polypodiaceae、の羊歯類と一緒に生育していたものと云えよう。

一方、樹木は、Pinus と Taxodiaceae が主体になって生育し、草地の周囲に林地を形成していたであろう。

古気候は現在と同じ温帯であろう。

A-7 試料

草本花粉は全体の41.7%を占めた。その主なものは Gramineae であり、30.2%検出された。その他に Cyperaceae が3.6%、Artemisia が3.6%、Chenopodiaceae が2.9%検出された。

針葉樹花粉は全体の39.6%を占めた。代表的なものとして Taxodiaceae が20.1%、Cryptomeria が7.9%、Pinus が7.2%検出された。

広葉樹花粉は全体の9.4%であり、Alnus が3.6%検出された以外は Pterocarya、Salix、Carpinus、Corylus 等が低率で検出された。

羊歯類は全体の6.5%と少なかった。

古環境は、Gramineae を主体にした草地と云えよう。そして、Cyperaceae、Artemisia、Chenopodiaceae 等が Gramineae と一緒に生育していたものと考えられる。

一方、樹木は、Taxodiaceae がかなり良く繁茂し、Cryptomeria、Pinus と共に草地の周囲に森林を形成していたものと云えよう。

古気候は温帯であろう。

A-8 試料

草本花粉は全体の38.5%であり、その殆どが Gramineae で25.9%検出された。その他に Chenopodiaceae が5.6%、Cyperaceae が2.8%、Artemisia が2.8%検出された。

針葉樹花粉は全体の38.5%であり、その殆どが *Taxodiaceae* で26.6%検出された。その他に *Pinus* が5.6%、*Cryptomeria* が3.5%検出された。

広葉樹花粉は全体の11.9%であり、*Alnus* が7.0%の他に *Zelkova*, *Castanea*, *Castanopsis*, *Fagus*が低率で検出された。

羊歯類孢子は全体の11.2%であり、*Monolete spore* が5.6%、*Lycopodiaceae* が2.1%、*Trilete spore* が2.1%等が検出された。

古環境は *Gramineae* を主体にして、*Chenopodiaceae*, *Artemisia*, *Cyperaceae*, 等が生育した草地と考えられる。そして、草地の周囲には *Taxodiaceae* を主体にして、*Pinus*, *Alnus*, *Zelkova*, *Cryptomeria* 等の良好に生育した森林が存在したものと云えよう。

古気候は温帯であろう。

A-9 試料

針葉樹花粉最も多く全体の38.3%であった。その主なものとして、*Taxodiaceae* が16.7%、*Pinus* が12.5%、*Cryptomeria* が6.7%検出された。

広葉樹花粉は全体の14.2%であり、主なものとして *Alnus* が5.8%、*Zelkova* が3.3%、*Corylus* が2.5%検出された。

草本花粉は全体の21.7%であり、主なものとして *Gramineae* が7.5%、*Artemisia* が5.0%、*Chenopodiaceae* が5.0%検出された。

羊歯類孢子は全体の22.5%であり、主なものとして、*Monolete spore* が10.0%、*Polypodiaceae* が4.2%、*Trilete spore* が6.7%検出された。

古環境は *Gramineae*, *Artemisia*, *Chenopodiaceae* 等の草本と *Polypodiaceae*, *Lycopodiaceae*等の羊歯類の良く生育した草地と考えられる。そして草地の周囲には、*Taxodiaceae* と *Pinus* が主体となって *Cryptomeria*, *Alnus*, *Zelkova* 等からなる森林が存在したものと云えよう。

古気候は温帯であろう。

A-10 試料

針葉樹花粉は全体の44.2%占めた。その主なものとして、*Taxodiaceae* が18.8%、*Pinus* が13.0%、*Cryptomeria* が5.2%等が検出された。

広葉樹花粉は全体の14.9%であり、*Alnus* が6.5%、*Zelkova* が4.5%の他に *Castanea*, *Corylus*, *Lepidobalanus*, *Celtis*, 等が低率で検出された。

草本花粉は全体の31.2%であり、その殆どが *Gramineae* で26.6%検出された。その他に *Caryophyllaceae*, *Chenopodiaceae*, *Cruciferae*, *Umbelliferae*, *Cyperaceae*, *Sagittaria* 等が低率で検出された。

羊歯類は全体の7.8%であった。

古環境は *Gramineae* を主体にした草地と考えられるが、その周囲には *Taxodiaceae*, *Pinus*, *Cryptomeria*, *Alnus* 等が良好に繁茂した森林が存在したものと云えよう。

古気候は温帯であろう。

B 地 点 試 料

B-1 試料

草本花粉の割合が多く全体の42.0%を占めた。その主なものとして Gramine が26.3% Artemisia が11.2%検出された。

針葉樹花粉は全体の11.7%であり、主なものとして Taxodiaceae が6.3%、Pinus が2.4%検出された。

広葉樹花粉は全体の22.9%であり、主なものとして Lepidobalanus が5.4 %、Zelkova が4.9 %、Alnus が、2.9%、Cyclobalanopsis が2.4%、Castanea が2.0%検出された。

羊歯類花粉は全体の20.0%であり、その主なものとして Monolete spore が14.6%、Polypodiaceae が4.9%検出された。

古環境は Gramineae, Artemisia を主体にした草地と考えられる。そして、この草地には Polypodiaceae, Lycopodiaceae 等の羊歯類も良く生育していたものと考えられる。一方、樹木は、草地の周囲に Taxodiaceae, Lepidobalanus, Pinus, Alnus, Cyclobalanopsis, Castanea 等が生育して林地を形成していたものと云えよう。

古気候は温帯であろう。

B-2 試料

各花粉、孢子化石の構成は多少の差異があるものの、B-1 試料と良く似ている。従って古環境、古気候については、ほぼB-1 試料と同じと云えよう。

B-3 試料

この試料は花粉・孢子化石の産出が少なかったので大まかな傾向を述べる。

羊歯類孢子が最も多く全体の35.2%であった。その主なものとして Monolete spore が25.9%、Trilete spore が5.6%、Polypodiaceae が3.7%検出された。

針葉樹花粉は全体の25.9%であり、主なものとして Pinus が14.8%、Tsugasieboldii が5.6%、T, C, T, が3.7%検出された。

広葉樹花粉は全体の16.7%であり、主なものとして Lepidobalanus が5.9%、Zelkova が5.9%検出された。

草本花粉は全体の16.7%であり、主なものとして Gramineae が 9.3 %、Chenopodiaceae が 3.7%検出された。

古環境は羊歯と草本からなる草地と考えられ、Polypodiaceae, Gramineae, Chenopodiaceae 等が生育していたものと云えよう。そして、草地の周囲には Pinus, Tsugasieboldii, Lepidobalanus, Zelkova 等が生育していたものと考えられる。

古気候は現在とほぼ同じ温帯であろう。

B-4 試料

針葉樹花粉が全体の51.7%を占めた。その半分以上が Taxodiaceae であり、35.2%検出された。その他に Pinus が8.5%、Tsugasieboldii が4.0%検出された。

広葉花粉は全体の9.3%であり、*Alnus*, *Lepidobalanus*, *Zelkova* 等が低率で検出された。

草本花粉は全体の31.4%を占め、主なものとして *Gramineae* が15.3%、*Chenopodiaceae* が7.6%、*Artemisia* が4.2%検出された。

羊歯類胞子は全体の7.6%と少なかった。

古環境は *Gramineae*, *Chenopodiaceae*, *Artemisia* 等が生育した草地と云えよう。そして、その草地の周囲には *Taxodiaceae* が良く繁茂していたものと考えられる。その他に *Pinus*, *T-sugasieboldii*, *Alnus*, *Zelkova* 等の樹木も一緒に生育していたものと云えよう。

古気候は温帯であろう。

B－5 試料

この試料は花粉・孢子化石の産出が非常に少なかったので、古環境、古気候について述べることは困難である。

B－6 試料

草本花粉が全体の46.4%を占め、最も多かった。その大部分は、*Gramineae* であり、39.2%検出された。その他の草本花粉は低率であった。

針葉樹花粉は全体の31.3%であり、*Taxodiaceae* が19.3%、*Pinus* が10.2%、*Cryptomeria* が1.8%検出された。

広葉樹花粉は全体の7.2%と少なかった。

羊歯類胞子は全体の13.9%であり、主なものとして *Monolete spore* が6.6%、*Trilete spore* が5.4%検出された。

古環境は *Gramineae* を主体にした草地であろう。そして *Caryophyllaceae*, *Chenopodiaceae*, *Crusiferae*, *Artemisia* 等の草本と、*Polypodiaceae*, *Osmundaceae* 等の羊歯類とが一緒に生育していたものと云えよう。そして *Taxodiaceae*, *Pinus* 等の樹木は、草地の周囲に林地を形成して生育していたものと考えられる。

古年候は温帯であろう。

B－7 試料

針葉樹花粉が最も多く、全体の63.9%を占めた。その大部分が *Taxodiaceae* であり48.2%検出された。その他に *Pinus* が12.0%、*Abies* が2.4%、*Cryptomeria* が1.2%検出された。

広葉樹花粉は全体の13.3%であり、*Zelkova* が3.6%、*Alnus* が2.4%の他に *Pteroearya*, *Corylus*, *Castanea*, *Lepidobalanus*, *Celtis*, *Ulmus* 等が低率で検出された。

草本花粉は全体の10.8%で、その総べてが *Gramineae* であった。

羊歯類胞子は全体の10.8%で *Monolete spore* が8.4%、*Polypodiaceae* が2.4%検出された。

古環境は *Taxodiaceae* が非常に良く繁茂して森林を形成していたものと考えられる。

この森林には *Pinus*, *Zelkova*, *Alnus* 等も生育していたものと思われる。*Gramineae* および羊歯類は、下草として生育していたものと考えられる。

古気候は温帯であろう。

B-8 試料

針葉樹花粉は全体の55.5%を占めた。その大部分が *Taxodiaceae* であり、38.1%検出された。その他に *Pinus* が11.5%、*Cryptomeria* が2.8%、*Abies* が2.3%検出された。

広葉樹花粉は全体の9.6%であり、*Alnus* が6.4%の他は低率であった。

草本花粉は全体の27.1%であり、その殆どが *Gramineae* で24.3%検出された。

羊歯類胞子は7.8%と少なかった。

古環境は *Taxodiaceae* が良好に繁茂して森林を形成していたものと考えられる。そして *Pinus*, *Alnus*, *Abies*, *Cryptomeria* 等も一緒に生育していたものと云えよう。草本は *Gramineae* が良く生育していたであろう。

古気候は温帯であろう。

B-9 試料

針葉樹花粉は全体の42.0%を占めた。主なものとして *Taxodiaceae* が23.3%、*Pinus*が12.8%検出された。

広葉樹花粉は全体の11.0%であり、主なものとして *Alnus* が3.7%、*Lepidobalanus* が4.1%、*Zelkova* が2.3%検出された。

草本花粉は全体の41.6%を占めた。その大部分が *Gramineae* であり、30.6%検出された。そして *Chenopodiaceae* が5.0%の他は低率であった。

羊歯類胞子は少なかった。

古環境は *Gramineae* が主体となった草地と考えられるが、草地の周囲には、*Taxodiaceae*, *Pinus*, *Lepidobalanus*, *Alnus*, *Zelkova* 等の樹木が森林を形成していたものと云えよう。

古気候は温帯であろう。

B-10 試料

針葉樹花粉は全体の45.5%を占め、その大部分が *Taxodiaceae* であり、33.9%検出された。そして *Pinus* が5.8%、*Tsugasieboldii* が3.1%の他は低率である。

広葉樹花粉は全体の18.3%であり、主なものとして *Alnus* が8.0%、*Zelkova* が4.0%検出された。

草本花粉は全体の28.1%で、主なものとして *Gramineae* が17.9%、*Chenopodiaceae* が8.5%検出された。

羊歯類は4.0%と少なかった。

古環境は、*Taxodiaceae* を主体にして、*Pinus*, *Tsugasieboldii*, *Alnus*, *Zelkova* 等が良く生育して森林を形成していたものと考えられる。また *Gramineae*, *Chenopodiaceae* 等が生育できたような草地も存在したであろう。

古気候は温帯である。

3. 古 環 境 の 復 元

花粉の比率をみると、A 試料 (No.5 ポイント) は、草本花粉が圧倒的に多く、羊歯類孢子も多い。その内訳は、上層 (1~4) で草本が多く、下層 (5~10) では羊歯類が多い。4 と 5 の間に Tb 層が入ることから、Tb 層降下以前は池沼であったものが、それ以後草地に変化していったものと考えられる。

B 試料 (No.9 ポイント) は、上層 (1~3) と下層 (4~10) で大きく異なる。上層では草本、羊歯類が多く、下層では、針葉樹、広葉樹類が多い。3 と 5 は各々土器集中地点であるが (5 については試料の産出が少なく、古環境について述べられない)、羊歯類孢子的産出が多い。しかし、それ以下に堆積する層位では針葉樹、広葉樹が多く、中でも 7、8、10 では Taxodiaceae が非常に良く繁茂していたであろう。これらから、周辺に森林を形成していた草地において古墳時代集落が形成され、その後一時池沼化したものと思われる。

以上の結果、殆どの試料において Gramineae (イネ科) が良好に繁茂していたと考えられ、これを中心として、Cyperaceae (カヤツリグサ科)、Artemisia (ヨモギ属)、Chenopodiaceae (アカザ科) 等の生育した草地を形成していたものとみられる。その中で A-1、2、3、4、7、8、10、B-2、4、試料では、Sagittaria (オモダカ属)、Typha (ガマ属)、Impatiens (ツリフネソウ属) 等の湿地もしくは池沼の環境を示す植物が生育していたとみられ、これらを含む土層が湿地もしくは池沼の環境で生成されたと考えられる。

A 試料は No.5 ポイント土層であるが、先に述べたように、No.5 ポイントは、火山灰 Tb 層が出現する地点であり、湿地もしくは池沼であろうとした推定がここで裏付けられたことになる。さらに、B 試料は、No.9 ポイントであり極わずかの Tb 層がみられる地点であるがその地点をとっても草地とみなしうるわけで、集落部を形成していくのに支障はなく、ここでもその古環境が裏付けられたわけである。

さてこのように、火山灰 Tb 層が連続して層を成す部分について池沼もしくは湿地とすることが可能となれば、遺跡周辺全体においても、Tb 層の有無を調べることによって古環境が推定し得る。

小排水路の交点を観察すると次のようである。

No.13 ポイント (小排44号-小排20-2号交点) Tb 層は無く、遺跡内土層を呈する。

No.14 ポイント (小排42号-小排20-2号交点) Tb 層は無く、遺跡内土層を呈する。本ポイントより13m小排42号を北へいった地点から北へ向けて、また、小排20-2号を東へ24mいった地点から東へ向けて、Tb 層が連続する。

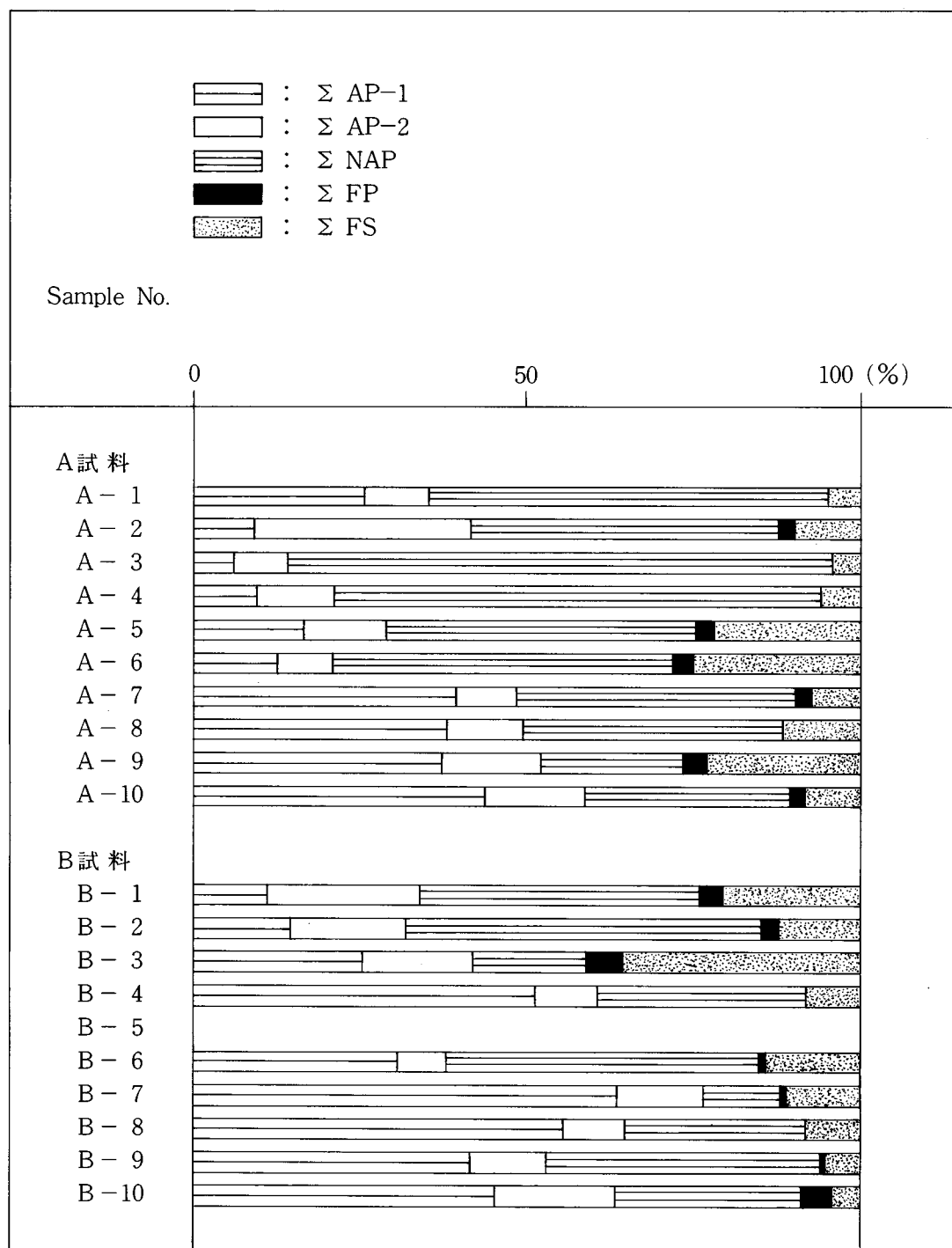
No.15 ポイント (小排20-2号-支道2-91号交点) Tb 層確認、上位に4枚、下位に3枚の泥炭層をもつ、さらに、黒褐色粘土、青灰色粘土と続き、No.5 ポイントを同様の層位を成す。

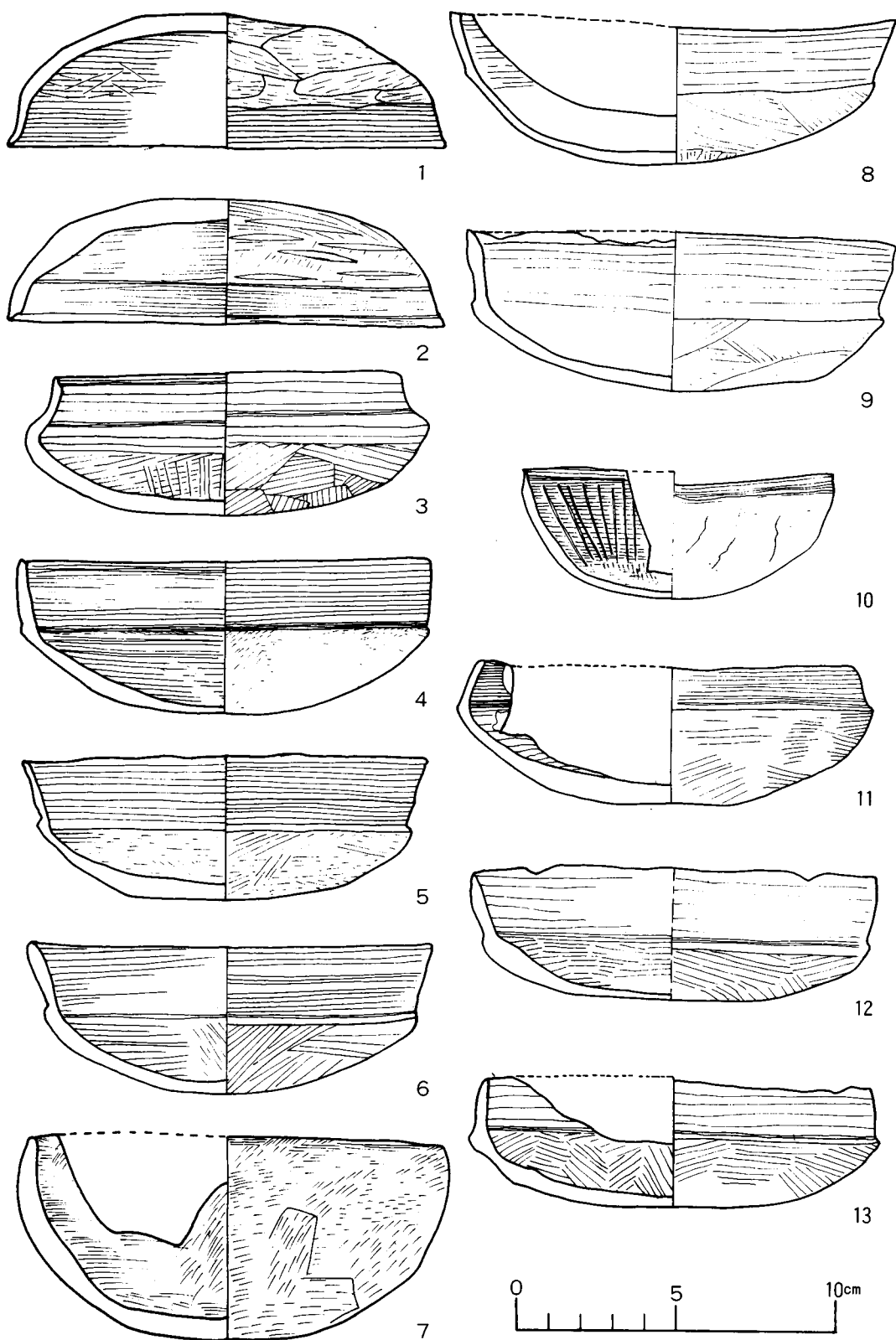
小排44号では、小排44号と幹道4号との交点より北へ135mの地点で Tb 層が出現し、北へ連続する。

また、トレンチ S ラインこの26、27区に Tb 層がみられるが、C ラインでは全くみられない。

先に記した小排46号トレンチと、これらの結果を総合すると、火山灰 Tb 層の出現範囲は第2

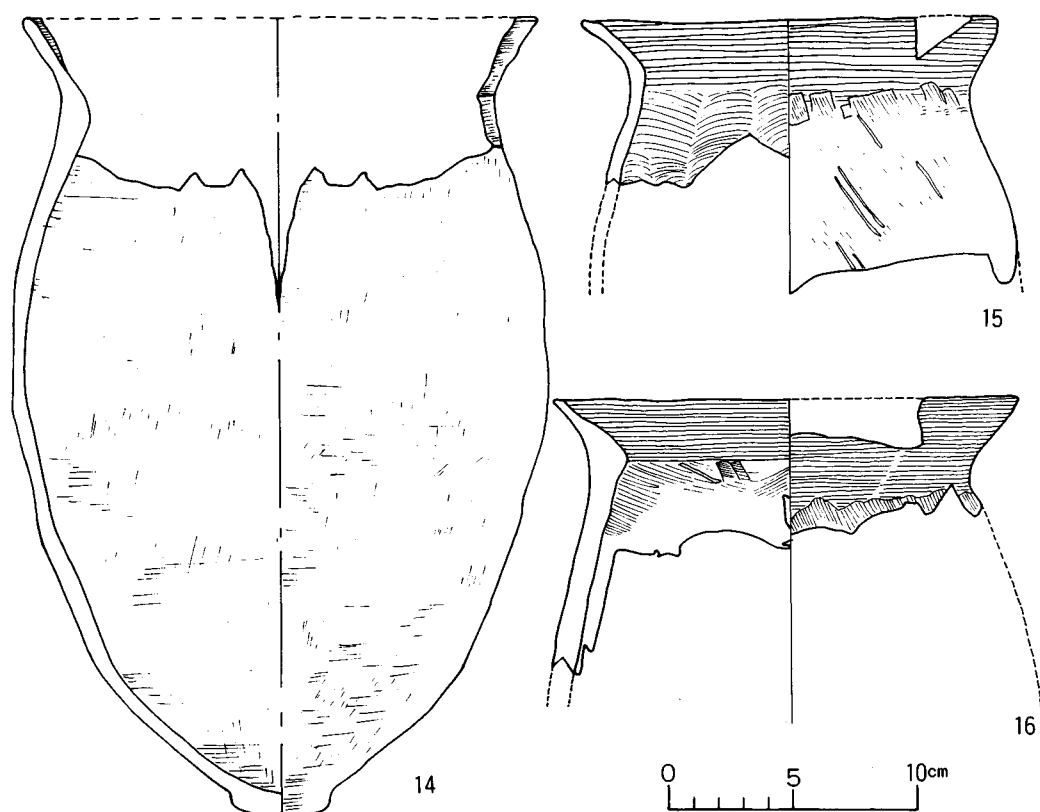
第 1 表 花粉孢子組成



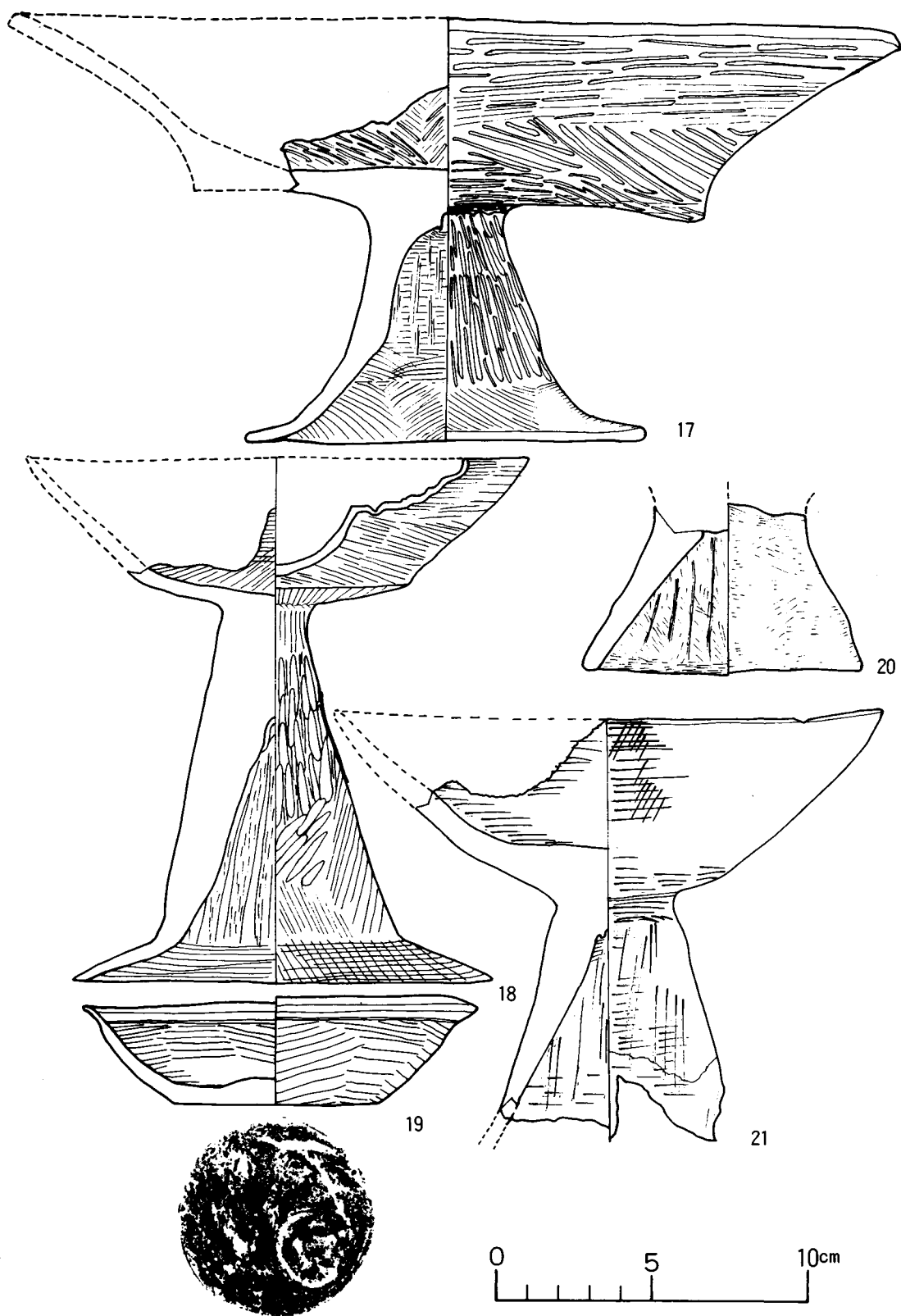


第 27 图 周边出土遺物実測図 I

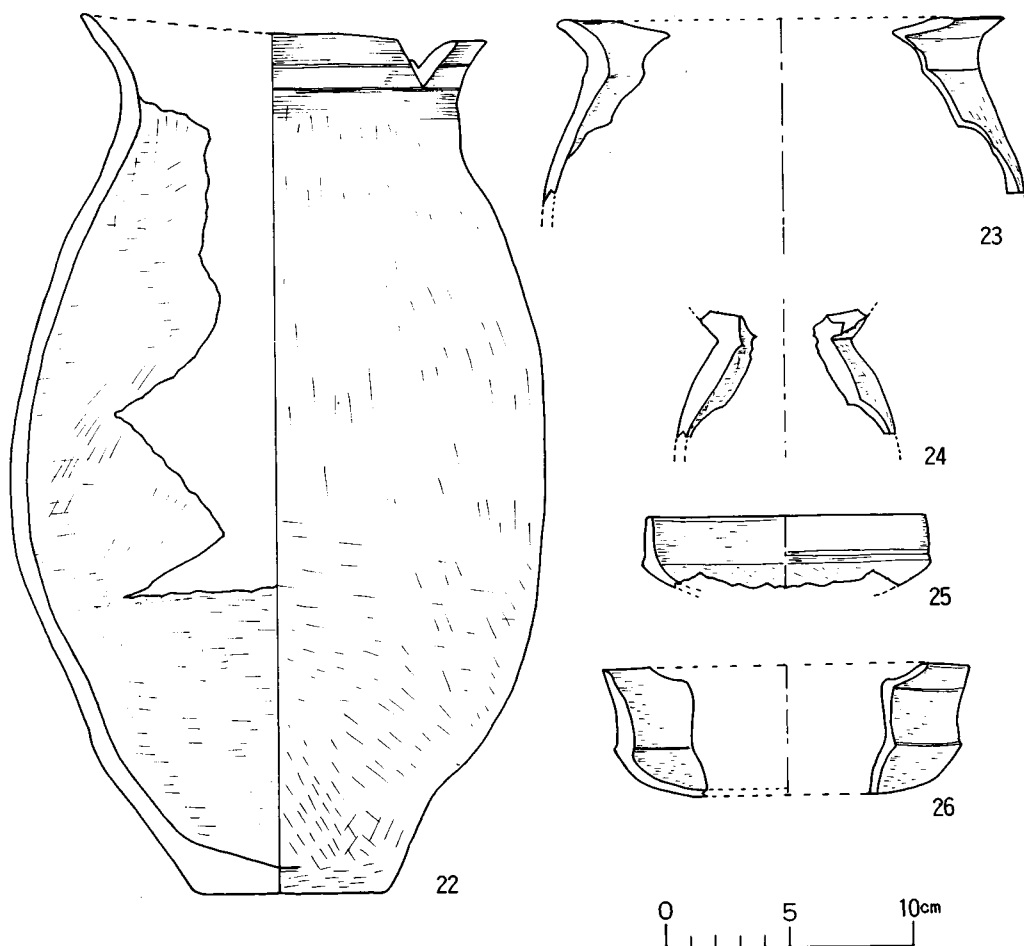
図に示したようになる。これは、古墳時代集落を形成する微高地を示すもので、集落の範囲を示すものである。(第2図1点鎖線内)



第28図 周辺出土遺物実測図 II



第 29 図 周辺出土遺物実測図 III



第 30 図 周辺出土遺物実測図 IV

第 2 表 出土遺物一覧表 凡例

①口 径	⑨脚 高	Ⓐ口 縁 部
②横撫で幅	⑩接合部幅	Ⓑ体・胴部
③器 高	⑪高 台 高	Ⓒ底 部
④厚 さ	⑫高 台 幅	Ⓓ脚 部
⑤現 高	⑬把 手 幅	Ⓔ脚中央部
⑥最 大 幅	⑭抓 口 幅	
⑦底 径	⑮裾 幅	
⑧杯 部 高		

推定の場合は'を付ける。

番号について。F-5、P-8、-1は、第5図版、第8写真図版の1ということである。

器種について、(須)は須恵器を示し、無記入は土師器を示す。

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
甕 R-17 住居址	F-5 P-8 -1	① 17.4 ② 3.4 ③ 29.5 ④-①' 0.4~0.5 ⑤ 0.4~1.5 ⑥ 0.6~1.2 ⑦ 31.5	若干外傾する口縁から大きく括れ、球形の胴部に移行し不安定な底部に至る。口縁部は幅が狭く造られている。	表① 横撫で ② 縦横撫で（口縁部と体部のつなぎの部分にはへらで押えてある。） 裏① 横撫で ② 縦横撫で（底部に近い所は縦撫でが多い。）	胎土 粗い 1~3mmの礫を多く含む 4~5mmの礫も少量含む 茶褐色 （胴部中央から底部にかけて炎があたり黒く変色） ① 欠 ② 一部欠
甕 R-17 住居址	F-5 P-8 -2	①' 22.7 ② 4.9 ④-① 0.3~0.7 ⑤ 0.5~1.0 ⑥ 30.5 ⑦' 30.0	口縁部は一旦直立し中央部から外傾する。胴部はほぼ球形を呈するが、下位に移行するにしたがって直線的になる。	表① 2回に亘る横撫で ② 削り様の撫で 裏① 2回に亘る横撫で ② 縦横撫で	胎土 粗い 1~3mm大の礫を多く含む 欠
甕 R-17 住居址	F-6 P-8 -3	① 17.8 ② 2.5 ④-① 0.5~0.6 ⑤ 0.4~0.6 ⑥ 17.9 ⑦ 18.9	大きく外傾する口縁から滑かな胴部へ移行する。最大径を胴部中位にもつ。	表① 横撫で ② 縦横の撫で 裏① 横撫で ② 縦横の撫で	胎土 粗い 1~5mm大の礫を多量に含む ①-② 半分欠 ③ 欠
甗 U-17 住居址	F-8 P-11 -1	① 25.0 ② 3.5 ④-① 0.5~0.7 ⑤ 0.4~0.7 ⑥ 26.9	口縁部を整形したのち胴部を整形し、くびれの部分に斜めのへらの跡がみられる。口縁部は大きく外反しほとんどふくらみをもたないで直線的に底部に移行する。最大径は、口縁部にあり、ゆがみをもつ。	表① 横撫で ② 縦横の撫での後縦の削り 裏① 縦横の撫で ② 縦横の撫で ○表-オレンジを主とし灰褐色、一部淡い茶 裏-オレンジを主とし、口縁部に灰褐色がす	胎土 細い 0.5~3mm程度の礫を含む ① 完存 ② 一部欠 ③ 欠 カマド袖に使用
甕 U-17 住居址	F-8 P-11 -2	① 19.3 ② 2.9 ④-① 0.3~0.7	口縁部は外反し、口唇部は厚みをもつ。胴部はわずかなふくらみもち底に至る。	表① 横方向の撫で ② 縦方向の削り 裏① 縦横の撫で	胎土 やや粗い 0.5~5mm程度の礫を含む

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		㊦ 0.3~0.4 ⑤ 12.5	礫がかなり露出しており、 外面がごつごつしている。 ○茶褐色	㊦ 縦横の撫で	㊦ 完存 ㊦ 欠 ㊦ 欠
杯 U-17 住居址	F-8 P-11 -3	① 14.1 ② 0.7 ③ 3.5 ④-㊦ 0.2~0.4 ㊦ 0.25~0.4	口縁部は短かく体部とほと んど区別がつかない。 体部は滑らかなカーブを描 き底部に至る。かなり礫が 露出している。全体に浅く つくられている。 表→褐色を基調として、黒 褐色、オレンジ色を呈 する。 裏→オレンジ色を基調とし て、褐色を呈する。	表㊦ 横方向の撫で ㊦ 縦横の撫で 裏㊦ 縦横の撫で ㊦ 縦横の撫で	胎土 やや粗い 1~3mm程度の 礫を多量に含 む。 ㊦ 一部欠 ㊦ 完存
台杯甕(?) U-17 住居址	F-8 P-11 -4	③ 4.9 ⑤ 12.9 ④-㊦ 0.6~0.9 ⑤ 6.9	脚部と体部下が残存、脚 部は、ややふくらみをもっ ており裾部に至って広がり が強くなる。 杯部と脚部の接合は杯を完 全に造りあげた後におこな われている。脚は短い。	接合部の表は横撫で 脚部は縦横撫で 色 茶褐色	胎土 1~2mm大の礫 を多量に含み 全体に露出し ている。 完存率 脚部のみ存
甕 U-17 住居址	F-8 P-11 -5	① 24.2 ② 3.2 ④-㊦ 0.6~1.0 ㊦ 0.9~1.2 ⑤ 22.2	口縁部は大きく外反し口唇 部は短形を成す。胴部はふ くらみをもたないで底部に いたる。 最大径は口縁部にある。 全体的に丁寧につくられて いる。	表㊦ 横方向の撫で ㊦ 横方向の撫での後縦 方向の削り 裏㊦ 横方向の撫で ㊦ 縦横の撫で	カマド袖に使用
甕 U-17 住居址	F-9 P-12 -6	① 23.2 ② 2.5 ④-㊦ 0.2~0.7 ㊦ 0.2~0.4 ⑤ 30.0	口縁部は外反し歪みをもつ。 胴部は、ほとんど肩をもた ないで底部に移行する。外 面には、かなりの礫が露出 している。最大径を口縁部 にもつ。 ○灰茶褐色	表㊦ 横撫で ㊦ 縦横の撫で、斜め方 向の撫で 裏㊦ 横撫で ㊦ 縦横の撫で	胎土 粗い 1~2mm大の礫 を多量に含む ㊦ 欠 ㊦ 一部欠 ㊦ 欠

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
甕 U-17 住居址	F-9 P-12 -7	① 23.4 ② 2.8 ④-① 0.3~0.45 ⑤ 0.5 ⑤ 17.2	口縁部は外反し、大きく開いている。 最大径を口縁部にもつ。口縁整形の後胴部の整形をおこなっており、明瞭な括れが造りだされている。器内は薄く丁寧に仕上げられている。胴部はほとんど肩をもたないで底部に移行する。	表④ 横撫で ⑤ 縦横の撫で 裏④ 横撫で ⑤ 縦横の撫で	胎土 細かい ④ 欠 ⑤ 欠 ○ 淡黄色
甕 U-17 住居址	F-9 P-12 -8	① 19.4 ② 2.0 ④-① 0.3~0.5 ⑤ 0.5~1.0 ⑤ 26.3	口縁部は外反し、短い。口唇部は丸味をもっている。胴部はほとんど肩をもたないで底部に移行する。胎土が粗く直接火が当たっている。最大径を口縁部にもつ。 ○ 茶褐色	表④ 横撫で ⑤ 縦横の撫で 裏④ 横撫で ⑤ 縦横の撫で	胎土 粗い 1~5mm大の礫を多量に含む ⑤ 欠
甕 U-17 住居址	F-9 P-12 -9	① 21.6 ② 2.1 ④-① 0.3~0.7 ⑤ 0.5 ⑤ 16.1	口縁部は外反し、大きく開いている。 胴部はやや肩をもち、底部に移行している。 ○ 茶褐色	表④ 横撫で ⑤ 縦横の撫で 上部は斜の撫で 裏④ 横撫で ⑤ 縦横の撫で	胎土 やや粗い 2~3mm大の礫を含む ④ 完存 ⑤ 上部存 ⑥ 欠
甕 U-17 住居址	F-9 P-12 -10	① 22.9 ② 3.5 ④-① 0.5~0.7 ⑤ 0.3~0.6 ⑤ 17.6	口縁部は外反し、大きく開いている。 胴部はほとんど肩をもたないで底部に移行する。最大径は口縁部にある。 ○ 灰褐色ベースというす茶及びこげ茶が一部	表④ 横撫で ⑤ 縦横の撫で 裏④ 横撫で ⑤ 縦横の撫で	胎土 細かい ④ 欠 ⑤ 欠 ⑥ 欠
甕 C-1区	F-11 P-15 -1	① 22.8 ② 4.0 ③ 27.8 ④-① 0.6~0.9 ⑤ 0.9~1.1 把手 4.1	口縁部は外反し、口を大きく開いている。 最大径を口縁にもつ。 胴部は底部から砲丸の様に口縁部に移行する。胎土の密度が濃い為重量感がある。	表④ 横撫で ⑤ 削り様の撫で 把手撫でつけ 裏④ 横撫で ⑤ 縦横の撫で	胎土 細かい 1~5mm大の礫を含み、数ヶ所露出している。 ⑥ 欠

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		⑥ 22.0 ⑦ 9.7 ⑬ 1.8	胴部中央に1対の把手をもつ。 ○茶褐色(直接炎が当たっている。)		①-③ 一部欠
甌 C-1区	F-11 P-15 -2	① 22.7 ② 2.5 ③ 31.5 ④-① 0.3~0.5 ⑤ 0.3~0.5 把手 2.0 ⑥ 22.5 ⑦ 10.0 ⑬ 2.3	口縁部に最大径をもつ。 口縁部は大きく外反し、括 れ部から把手部まで垂直に おちて、底部に向って緩か に収束して行く長胴の甌で ある。口唇部は短形を成し ている。把手は胴部中央や や上位にもつ。 ○茶褐色を基調として灰褐 色を呈する。	表① 横撫で ② 削り様の撫で 把手 撫でつけ 裏① 横撫で ② 縦横の撫で	胎土 細かい 2~3mm大の礫 を含む。 ①-③ 一部欠
甌 C-1区	F-11 P-15 -3	① 21.0 ② 4.0 ③ 19.5 ④-① 0.3~0.8 ⑤ 0.7~1.0	口縁部に最大径をもち口唇 部は短形を成している。 外反して大きく開く口縁部 から、若干の脹らみをもつ て底部に移行する。全体に 砲弾形を呈する。 ○白味を帯びた黄褐色土。	表① 横撫で ② 縦方向の撫で ③ 撫で付け 裏① 横撫で ② 横方向を主体とした 撫で ③ 横なで	胎土 細かい ① 一部欠 ② 完 存
杯 C-9区	F-11 P-15 -4	① 11.2 ② 2.2 ③ 3.9 ④-① 0.1~0.3 ⑤-③ 0.5~0.9	口縁部の中心に条線がみら れ明確な稜をもっている。 体部が小さく造られている。 口縁は外傾している。 ○褐色	表① 2回に且る横撫で ②-③ 縦横撫で 裏① 2回に且る横撫で ②-③ 縦横撫で	胎土 細かい 口唇部一部 欠
杯 C-6 住居址	F-11 P-15 -5	① 14.1 ② 0.7 ④-① 0.2~0.4 ⑤-③ 0.4~0.8	全体に球形を呈する。口縁 部は横撫で段を成す。 内側は縦横の撫でのち放 射線状に細かい磨が施され ている。	表① 横撫で ②-③ 横方向の削り 裏① 横撫で ②-③ 縦横の撫で	胎土 細かい 強欠
甕 N-9 住居址	F-12 P-22 -1	① 13.4 ② 3.3 ④-① 0.6	外反する口縁から、鋭利な 括れをもって、球形に脹ら む胴に移行する。括れは、	表① 横撫で ② 縦横の撫で 裏① 横撫で	胎土-粗い 1~10mm大の 礫を含む。火

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		㊦ 0.3~0.7 ⑤ 16.1 ⑥ 17.3	胴部からのへらの当てによ って造り出されている。 胴部は、整形が雑で巻き上 げ痕を良く残し凹凸がめだ つ。	㊦ 縦横の撫で	熱を受けて変 色している。 茶褐色 ㊦ ㊦欠 ㊦ ㊦欠 ㊦ 欠
甕 N-9 住居址	F-12 P-22 -2	① 16.8 ② 2.5 ③' 29.0 ④-㊦ 0.2~0.3 ㊦ 0.5~0.7 ⑤ 25.4 ⑥ 21.0	口縁部は外反し、全体の長 さからみると短い。胴部は 下脹れて最大径は口縁径よ りかなり大きい。全体に歪 み有り。2回の火熱を受け 変色している。 ○茶褐色	表㊦ 横撫で ㊦ 縦横の撫で 裏㊦ 横撫で ㊦ 縦横の撫で	胎土ー粗い 1~3mmの礫を 含む。 完存率ー底部 欠 色調ー下部は 火熱を受けて 変色している。
壺 2A-9区	F-12 P-22 -3	④-㊦ 0.2~0.5 ㊦ 0.4~0.7 ⑤ 13.7 ⑥ 15.0	底は平らであるが小さく胴 部が球形になっている為安 定がない。表面が粗く、か なり礫が露出している。頸 部幅は底部幅と同様であろ う。黒褐色を基調として、 茶褐色を呈する。	表㊦ 縦横の撫で 裏㊦ 縦横の撫で	胎土ー粗い 1~3mm程度の 礫を多量に含 み露出してい る。 ㊦ 欠 ㊦ ㊦欠 ㊦ 完存
高杯 2A-9区	F-12 P-22 -4	① 21.3 ④-㊦ 0.4 ㊦ 0.6~1.0 ⑤ 6.3	杯部下位に稜をもち上、下 とも外反している。口縁部 は大きく開き、多少歪みを もつ。 接合部は杯部から横方向に 撫でつけられている。	剥落していて、ほとんどわ からない。	胎土 粗い。 1~3mm大の礫 を含む。 赤褐色(朱色 に近い) 杯部ー半分欠 その他欠
高杯 2A-9区	F-12 P-22 -5	①' 20.7 ④-㊦ 0.2 ㊦ 0.8~1.1 ㊦ 2.0~2.3 ⑤ 7.3	杯部は2帯の粘土紐で形成 されており、接合面は凹む。 この為杯部上位で、括れを もって、大きく開く格好に なる。稜の部分で再び、接 合し、その後稜を消してい	表㊦ 横方向の撫で ㊦ 縦横の撫で 裏㊦ 横を主体とした撫で ㊦ 横を主体とした撫で	胎土 粗い。 1~5mm大の礫 を含む。数ヶ 所露出してい る。 赤褐色(朱色

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
			る部分が多い。稜以下の体部は、いわゆる底部を成し、脚との接合に重点を置いて、へそをもつ。		に近い) 杯部一欠 その他 欠
杯 (須) 2 E-9 区	F-12 P-23 - 6	① 13.0 ③ 3.9 ④-① 0.25 ② 0.2~0.5 ③ 0.5~0.6 ⑤ 5.5	口縁部は外傾し胎土は粗い。 底部は糸切り後、撫でてある。 ○灰褐色		胎土 やや粗い 1~0.5mm大の 礫を含む。 ① 一部欠 ②-③ ほとんど存
甕 (小型) Y-9 住居址	F-12 P-23 - 7	① 12.0 ② 2.6 ④-① 0.2~0.3 ② 0.3~0.6 ⑤ 12.0	球形の胴部をもち一旦直立する頸部から外反する口縁に至る。頸部は、おさえつける様な撫でによって造りだされている。	表① 横撫で ② 縦横の撫で 裏① 横撫で ② 縦横の撫で	胎土 やや細かい。 茶褐色 底部と胴部 一部欠
甕 Y-9 住居址	F-12 P-23 - 8	① 19.7 ② 3.0 ④-① 0.2~0.4 ② 0.3~0.4 ⑤ 7.7	口縁部は外反しており、ゆるいカーブで胴体につづいている。口縁部と胴体のつなぎの部分は、軽く押えてある。全体的に厚さが薄く丁寧に仕上げられている。 ○茶褐色	表① 横撫で ② 横方向の撫で 裏① 横撫で ② 横方向の撫で	胎土 やや粗く 1~2mmの礫を含む。
甕 (須) 2 M-9 住居址	F-15 P-8 - 1	① 24.0 ② 9.1 ③ 43.2 ④-① 0.7~1.9 ② 0.6~1.2 ③ 1.0 ⑥ 27.4 ⑦ 14.6	口縁部は長く、かなり外傾し、折り返し口縁をもつ。口辺部近くと、中央に2本づつ連続した波状文をもつ。(2条一帯の波状文) 底、胴、口縁部の3部に分割して造ったことが明瞭であり、接合が雑である。 胴部は緩やかな肩をもち底部へ直線的に移行する。	表① 回転台を利用した撫での後、横撫で口辺部は折り返しであり、側面は中央に1本強い線をもち横方向の撫で。口辺部と中央に波状文あり。 ②-③ 全体を巻きあげの後整形。 裏① 横撫で ② 全体を巻きあげの後整形。	胎土 やや粗い 1~2mm大の黒い礫を多量に含む。 ① } 1/2欠 ② } ③ 完存

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
杯 2 M-9 住居址	F-16 P-30 -2	① 10.6 ② 2.1 ③ 4.2 ④-④ 0.3~0.4 ⑤-⑥ 0.4~0.8	口縁部は若干外傾しているが、ほぼ垂直である。体部が若干浅い。明確な稜をもつ。内面底部は、指でおさえた様な跡がある。 ○黒褐色	表④ 横撫で ⑤-⑥ 縦横の撫で 裏④ 横撫で ⑤-⑥ 上部は横の撫でで中央部は指でおさえている。	胎土 細かい礫を多量に含む。 完存率④ ㊦ 欠 ⑤ 一部欠
杯 2 M-9 住居址	F-16 P-30 -3	① 13.7 ② 2.9 ③ 4.7 ④-④ 0.2~0.5 ⑤-⑥ 0.5~0.8	口縁部中央に1本のはっきりした条線があり、体部が浅く造られている。口縁は外傾している。 ○茶褐色	表④ 2回に亘る横撫で ⑤-⑥ 縦横の撫で 裏④ 横方向の撫で ⑤ 縦横の撫で	胎土 細かい礫を多量に含む。 完存率④ ㊦ 欠 ⑤ 一部欠
杯 (須) 2 M-9 住居址	F-16 P-30 -4	① 14.8 ③ 2.1 ④-④ 0.3 ⑤-⑥ 0.5~0.7	底部から、1cm間隔の輪積み痕がみられる。全体に浅い造りであり、緩やかなカーブで底部に至る。底部は削りによって造りだされており糸切り底である。	表④ 横撫で ⑤ 横撫で ⑥ 中心から螺旋状模様 裏④ 横撫で	胎土 細かい礫を多量に含む。 完存率 ㊦
杯 (須) 2 M-9 住居址	F-16 P-30 -5	① 13.5 ③ 3.5 ④-④ 0.2~0.3 ⑤-⑥ 0.4	口縁部と体部の区別がなく、口唇部は外反し、丸味をもつ。器肉は良く整えられ全体に均一である。体部は、直線的である。糸切り底をもつ。	轆轤 右回転	胎土 細かい礫を多量に含む。 完存率 ㊦
壺 (須) 2 M-9 住居址	F-16 P-30 -6	⑪ 0.7 ⑦' 10.0 ⑤ 2.4 ④-⑥ 1.9~2.5 ⑧ 1.2~1.3	高台の接着は丁寧におこなわれ、底面は、同心円状に撫でている。台部底面には、幅5mm、断面半円形の条痕がみられる。胴部最下面には緑色釉の流出した痕跡がみられる。	轆轤 右回転	底部のみ。
杯 (須) 2 M-9 住居址	F-16 P-30 -7	①' 13.1 ③ 4.1 ④-④ 0.3	口縁と体部の区別がなく、口唇部は内反し、丸味をもつ。底部は、上底様になっ	轆轤 右回転	胎土 2mm大の礫を多量に含む。

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		㊸-㊸' 0.5~10	ている。糸切り底である。 ○灰褐色		完存率 ㊸
杯 (須) 2 M-9 住居址	F-16 P-30 -8	⑤ 1.8 ④-㊸ 0.6 ㊸ 0.5~0.6	非常に細かい胎土である。 底部が造りだされており、 外面に一条の条痕が見られ る。糸切り底体部にやや脹 らみをもつ。 ○灰褐色	轆轤 右回転	胎土 非常に 細かい。 完存率 ㊸-㊸ 一部実存
鉢 (須) 2 N-9 住居址	F-16 P-30 -9	④-㊸ 0.2~0.5 ㊸ 0.2 ⑤ 4.5 ⑪ 0.7 ⑦ 7.4 ⑫ 0.8	轆轤によって、器肉が良く 整えられ、やや内湾しながら 上部に至る。低くて、幅 の広い高台が付けられてい る。高台底面は、外面から 撫で付けられた胎土が付着 している。内面底部に緑色 釉及び異物が付着している。 ○灰色	轆轤 右回転	胎土 細かい 完存率 ㊸ ㊸ ㊸ ほぼ欠
杯 2 O-9 住居址	F-16 P-30 -10	① 12.3 ③ 4.1 ④-㊸ 0.3 ㊸-㊸ 0.3~0.8	口縁部と体部の区別がつか ない。口唇部は丸味を帯び ている。体部と底部の接合 面は丸味をもち平底、糸切 り底である底部に移行する。	轆轤 右回転	胎土 粗い 完存率 完存 (一部口縁部 欠)
甕 2 M-9 住居址外	F-17 P-31 -11	①' 18.6 ② 4.6 ③' 29.1 ④-㊸ 0.2~0.3 ㊸ 0.3~0.9 ㊸ 0.6~0.8	口縁部は上部で外傾し、中 央部でくびれほぼ直立して 胴部に至る。わずかなふく らみをもち狭まって底部に つながる。ゆるい肩をもつ。 全体的に薄く、底部が非常 に小さい為、安定性もなく、 もろい感じがする。	表㊸ 横撫で ㊸ 縦横撫で縦の削りが 見られる。 裏㊸ 横撫で ㊸ 縦横撫で横方向の撫 でが強い。	胎土 非常に 細かい ㊸-㊸ 一部実 存 ㊸ 完存 ○うす茶
壺 2 N-9 土師器窯址	F-17 P-31 -12	① 20.7 ② 4.3 ⑤ 12.8 ④-㊸ 0.3 ~0.55	口縁部は上部で外傾し、中 央部でくびれほぼ直立して 胴部にいたる。 工器の仕上りは丁寧につく	表㊸ 横撫で、つなぎの部 分と中心より少し上 の部分に横方向の線 がみられる。	胎土 細かい 2mm程度の礫 を含む。 ㊸-㊸ 一部実

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		㊸ 0.25~0.3	られている。ゆるい肩をもつ。	㊸ 縦横撫で。上部は横撫でが多い。 裏㊸ 横方向の撫で ㊹ 縦横撫で、表より非常に滑らか。	存 表-淡い茶褐色 裏-茶褐色
壺 2 N-9 土師器窯址	F-17 P-31 -13	① 23 ② 3.1 ④-㊸ 0.35~0.4 ㊹ 0.3 ~0.35	口縁部は、全体に比べて長く口辺部は外傾し、口唇部は短形している。胴部は、ややふくらみをもって底部に至る。肩がなだらかになる。	表㊸ 口辺部は横方向の撫で、中央部は横方向と斜め方向の撫で ㊹ 上方は横方向の撫で、中央部は横方向と斜め方向の撫で 裏㊸ 口辺部は横方向の撫で、中央部は縦横の撫で、下方部は横、斜め方向の撫で ㊹ 上方部は、横方向の撫で、中央は横方向と斜め方向の撫で	胎土 細かい 1~3mm程度の礫を含む。 ㊸-㊹ 一部の実存 ○茶褐色
杯 (須) 2 M-9 住居址	F-18 P-32 -14	①' 12.2 ③ 4.0 ④-㊸-㊹ 0.3~0.4	口唇部はやや外反し、丸味をもつ。糸切りの後、底部から体部下面にかけて、スリップしており凹凸がみられる。 ○灰色	全体に横撫での後、スリップ及び撫でを部分的に施している。 轆轤 右回転	完存率 1/2
杯 (須) 2 N-9 住居址	F-18 P-32 -15	①' 12.4 ③ 3.8 ④-㊸ 0.3 ㊹-㊹ 0.4~0.8	口縁部と体部の区別はなく、丸味をおびている。	轆轤 右回転	完存率 1/3
杯 (須) 2 N-9 住居址	F-18 P-32 -16	①' 9.6 ④-㊸ 0.3~0.4 ㊹ 0.6~0.7 ⑦' 5.2 ⑤ 2.0	体部下面に縦横の撫でがある。底部、体部接合面に条痕有り。 ○灰色	轆轤 右回転	完存率㊹ 1/2

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
杯 (須) 2 N-9 住居址	F-18 P-32 -17	①' 12.2 ④-⑤ 0.25~0.4 ⑦' 0.8 ⑤ 7.2 2.6	3~5mm大の礫を含み粗い胎土で、焼もあまい。全体に磨耗している。 ○白灰色	表⑧ 横撫で、底部近く、左から右に斜めの撫で 轆轤 右回転	胎土 3~5mm大の礫を含む。 完存率⑦ 3/4
杯 (須) 2 N-9 住居址	F-18 P-32 -18		糸切り底	轆轤 右回転 ヘラ削り	
杯 (須)	F-18 P-32 -19		糸切り底 右回転		
杯 (須) 2 O-9 住居址	F-19 P-33 -20	① 12.6 ③ 3.7 ④-④ 0.3 ⑤ 0.2~0.3 ⑥ 0.6	底部はほぼ平らで丸味をもち、体部の器肉はほぼ同じである。 外傾している。 ○白っぽい灰褐色	轆轤 右まわり、回転ヘラ切り	胎土 非常に細い。 完存率⑤ 3/4 欠⑥ 完存
杯 2 O-9 住居址	F-19 P-33 -21	① 12.5 ② 3.3 ③ 4.2 ④-④ 0.2~0.4 ⑤-⑥ 0.3~0.4	口縁部は、外傾し、中央に1本の太い窪みをもち、体部は浅く明確な稜をもつ。 ○茶褐色	表④ 2回に亘る撫で ⑤-⑥ 粗い縦横の撫で 裏④ 2回に亘る撫で ⑤-⑥ 縦横の撫で	胎土 1~2mm大の礫を多量に含む。 完存率 完存 (口唇一部欠)
盤 (須) 2 P-9 住居址 住居址	F-19 P-33 -22	① 7.5 ③ 3.2 ④-④-⑤ 0.2~0.3 ⑥ 0.3 ⑭ 1.1 ⑥' 14.0	口唇部は完全な稜を成し、先端部がとがりぎみである。高台はやや外傾していて先端部は短形を成している。 ○灰色	轆轤	胎土 2mm大の礫を多量に含む。 完存率 ⑥ 完存 ④-⑤ 3/4実存
杯 (須) 2 P-9 住居址	F-19 P-33 -23	①' 12.2 ③ 3.5 ④-④ 0.4~0.6 ⑤-⑥ 0.6~0.7	口縁部と体部の区別がつかず、口縁部は外傾し、口唇部から1cm下にへこみがみられ、底部中央に脹らみがみられる。糸切り底。 ○赤褐色	轆轤 右回転	胎土 1~2mm大の礫を含む。 完存率 3/4

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
杯 (須) 2 P-9 住居址	F-19 P-33 -24	① 12.2 ③ 4.0 ④-④ 0.4 ⑤-⑥ 0.6~0.7	口縁部は外反し、底部は安定している。糸切り底。	轆轤 右回転	胎土 細かい
杯 (須) 2 N-14 住居址	F-21 P-39 -1	①' 13.0 ⑤ 3.8 ④-④ 0.2 ⑤-⑥ 0.5~0.7	器肉は良く整えられ、内湾しながら口縁部に至り、口唇部は丸味をもつ。底外面は平らであるが内面は中央部が脹らむ。	轆轤 回転へラ切り	須恵器の生焼 体部上半のみ 須恵化 完存率 ④-⑥ 半欠 ⑥ 一部欠
杯 2 N-14 住居址	F-21 P-39 -2	① 12.6 ⑤ 3.4 ④-④ 0.3 ⑤-⑥ 0.3~0.4	外面は全体に撫でが施されている。口縁は丁寧に、底面は削り様に行っている。内面は柔い工具で丁寧に撫でている。器は、口縁がやや内湾し、その傾斜をもって滑らかに底部に至る。白けた茶褐色及び灰褐色を呈する。	表④ 口縁5mmの幅に横撫で ⑤-⑥ 縦横の撫で 裏④ 横撫で ⑤-⑥ 縦横の撫で	胎土 粗く、 1mm大の礫と 雲母が含まれている。 完存率 半強
鉢 2 N-14 住居址	F-21 P-39 -3	① 30.8 ⑤ 12.0 ④-④ 0.3 ⑥ 0.3~0.9	胴部は緩かな脹らみをもち、口縁は外反する。よって口唇部は外に突き出す格好になる。外面口縁は横撫で胴部は下からの削り様撫でを施している。内面口縁は横撫で、胴部は横及び斜めの撫でを施している。黒褐色あるいは灰褐色、部分的に赤褐色を呈する。		胎土 粗い。 完存率 底部の全て、 口縁から胴部の を欠く。
甕 2 P-14 住居址	F-21 P-39 -4	① 17.4 ② 4.2 ⑤ 7.8 ④-④ 0.6~0.9 ⑥' 0.3~0.6	口縁部が長く、中央にくびれをもつ。くびれ部は上下の撫での開始線である。この様に口縁部は横撫での後上から下に撫でている。これによって口縁部と胴部の	表④ 口唇部附近は横撫で中央から胴部にかけて、縦横撫で ⑥ 縦横撫で 裏④ 縦横撫で ⑥ 縦横撫で	胎土 1~2mm大の礫を含む。 完存率 A-半 ⑥ 一部存

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
			境が不明瞭になる。口唇部は縁辺に丸味をもつが、頂部は直線的である。白味を帯びた灰褐色		
杯 2 P-14 住居址	F-21 P-39 - 5	①' 15.7 ② 1.9 ④-⑥-⑦ 0.6~0.7 ③ 6.4 ⑥ 16.5	口縁部は若干の脹らみをもって、ほぼ直立する。丸味をもった稜をもち、体部は、深くつくられており、滑らかに底部に至る。 ○茶褐色（部分的に黒色あり）	表④ 横撫で ⑥-⑦ 縦横の撫で、底部は同一方向削り様撫で 裏④ 横撫で ⑥ 縦横の撫で	胎土 2mm大の礫を多量含む。 完存率④ 1/2 ⑥ 一部破損 ⑦ 完存
杯 2 Q-14 住居址(?)	F-21 P-39 - 6	①' 12.7 ② 1.8 ④-⑤ 0.3~0.5 ⑥-⑦ 0.6~0.8 ③ 4.3 ⑥' 13.9	口縁部は内傾し丸味をもった稜から、若干の脹らみをもって、なめらかに底部に移行する。 ○茶褐色（体部に黒、明るい茶色あり）	表④ 横撫で、中央に1本太い線あり。 ⑥-⑦ 縦横撫で 裏④ 横撫で ⑥-⑦ 縦横撫で	胎土 1~3mm大の礫を多量含む。 完存率 ④ 1/2存 ⑥ 上方1/2存 ⑦ 完存
杯 2 Q-15 住居址(?)	F-21 P-39 - 7	① 10.2 ② 0.9 ④-⑤ 0.2~0.3 ⑥-⑦ 0.2~0.3 ③ 3.0	口縁部は脹らみをもって内傾し、横方向の撫で施されており、口唇部外面には、撫でと、内面からのスリッブによって生じた段差があり、条線を成す。体部外面は縦横に削りを施している。内面は、口縁部の横撫で体部の撫での後、菊花文様の磨きによる暗文をもつ。 ○黒褐色（底部はほとんど平ら）	表④ 横撫で ⑥-⑦ 縦横に削り様撫でを施している。 裏④ 横撫で ⑥-⑦ 横方向の撫で菊花文様（放射状）の磨き	胎土 細かい 完存率 ④ 1/2存 ⑥ 3/4存 ⑦ 一部欠
杯 T-17 窯址	F-25 P-42 - 1	① 13.9 ② 2.4 ③ 4.1 ④-⑤ 0.25~0.4 ⑥ 0.35~0.5	口縁部は2回の横撫でにより段をもち、外傾している。明確な稜をもち、体部は非常に浅い。灰褐色を呈する。	表④ 2回に亘る横撫で 2 ⑥-⑦ 縦横の撫で 1 裏④ 2回に亘る横撫で 1 ⑥-⑦ 同心円状の撫で 2	胎土 2~3mm大の礫軽石粒。 炎の直にあたった所あり。

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
杯 T-17 窯址	F-25 P-42 - 2	① 13 ② 2.6 ③ 4.6 ④-A 0.2~0.45 ⑤ 0.3~0.4	口縁部は2回の横撫でにより段をもち、ふくら味をもち外傾している。明確な稜をもち体部はなめらかな曲線で作られている。 ○部分的に赤褐色を帯びた黄褐色。	表④ 2回に亘る横撫で 2 ⑤-⑥ 縦横の撫で 1 裏④ 2回に亘る横撫で 1 ⑤-⑥ 同心円状の撫で 1 全体に丁寧に仕上げている 2	胎土 細粒 ○赤褐色部は朱塗りか？
杯 T-17 窯址	F-25 P-42 - 3	① 10.3 ② 2.4 ③ 5.5 ④-A 0.2~0.4 ⑤ 0.2~0.6	口縁部は2回の横撫でにより段をもち、内傾している。明確な稜をもつ。 ○部分的に赤褐色を帯びた黄褐色。	表④ 2回に亘る横撫で 2 ⑤-⑥ 上面は横撫でと同一方向で底部は縦横の撫で 1 裏④ 2回に亘る横撫で 1 ⑤-⑥ 同心円状の撫で 2	胎土 2~3mm 大の礫多量に含む軽石粒。 ○炎の直にたった所あり、そのまわりが変色(赤褐色)
杯 M-11 窯址	F-25 P-42 - 4	① 12.5 ② 1.4 ③ 3.7 ④-A 0.3~0.4 ⑤-⑥ 0.3~0.6 ⑦ 12.9	口縁部は、内傾し、1回の撫でで造られ、非常に短い。明確な稜をもち底部は浅い。 ○茶褐色	表④ 縦横撫での後、横方向の撫で ⑤ 縦横撫で 裏④ 横方向の撫で ⑥ 縦横撫で	胎土 粗い。 1~2mm大の礫を含む。
杯 M-11 窯址	F-25 P-42 - 5	① 12.4 ② 3.0 ③ 7.0 ④-A 0.3~0.6 ⑤-⑥ 0.4~1.0	口縁部は内傾し、2回に亘る横撫でで明確な稜をもつ。底部は、深く丁寧に造られているが厚さが異なっているので安定性がない。	表④ 2回に亘る横撫で ⑤-⑥ 上部横撫で底部縦横撫 裏④ 横撫で(2回に亘る) ⑤-⑥ 縦横の撫で	胎土 細かい 1~3mm大の礫を含む。 茶褐色 完存(④ 一部欠)
杯 M-11 窯址	F-25 P-42 - 6	① 14.9 ② 2.4 ④-A 0.4~0.6 ⑤ 0.3~0.6 ⑦ 4.1	口縁部は外傾し、口縁部の中央と下部に稜をもつ。胎土は粗く雑に造られている。底部は浅い。	表④ 2回に亘る横撫で ⑤ 撫で 裏④ 2回に亘る横撫で ⑥ 撫で	胎土 粗い。 1~3mm大の礫を含む。 茶褐色 ④ 欠 ⑥ 一部欠

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
杯 M-11 窯址	F-25 P-42 -7	① 13.4 ② 2.3 ③ 4.3 ④-A 0.2~0.4 B-C 0.2~0.4	口縁部は外傾し、明確な稜をもつ。底部は浅く造られ、土器全体が薄く丁寧に仕上げてある。 体部の表、裏とも中心から渦巻き状に上部に向かって撫でである。	表A 横撫で B-C 横方向の撫で、中心から上部に向けて渦巻き状に撫で 裏A 横撫で B-C 横方向の撫で、中心から上部に向けて渦巻き状に撫で	胎土 細かい 1~3mm大の礫を含む。 完存 うす茶褐色 (一部直接炎があたり変色)
杯 2 P-13 土壇	F-25 P-42 -8	① 12.2 ② 1.2 ③ 4.0 ④-A 0.3 B-C 0.4~0.6 ⑤ 12.4	口縁部は垂直で、口唇部は、若干内傾している。小型で丸味をもった稜をもち底部は深く仕上げられている。	表A 横撫で B 縦横の撫で 裏A 横撫で B 縦横の撫で	胎土 やや粗い 1~2mm大の礫を含む。 半存 茶褐色
杯 2 P-13 土壇	F-25 P-42 -9	①' 14.4 ② 2.9 ③ 4.9 ④-A 0.3~0.5 B 0.3~0.4	口縁部は外傾し、横撫でが2回おこなわれている為中央に段を成す。 明確な稜をもつ。 ○茶褐色	表A 横撫で(2回に亘る) B 縦横の撫で 裏A 2回に亘る横撫で B 縦横の撫で	胎土 細かい 1~2mm大の礫を含む。 半存
杯 2 P-13 土壇	F-25 P-42 -10	①' 14.4 ② 2.0 ③ 4.2 ④-A 0.3~0.6 B-C 0.4~0.5	口縁部は外傾している。口縁部中央に条線をもち、不明確な稜に至る。底部は浅く仕上げられ煤がたくさんついている。 ○灰褐色	表A 2回に亘る横撫で B 削り様の撫で 裏A 2回に亘る横撫で B 縦横の撫で	胎土 細かい 半存
杯 2 P-13 土壇	F-25 P-42 -11	①' 11.2 ② 1.6 ③ 4.6 ④-A 0.2~0.3 B-C 0.4~0.7	口縁部はほぼ垂直で口唇部は丸味を帯びている。 明確な稜をもち小型である。 ○茶褐色	表A 横撫で B 削り様の撫で 裏A 横撫で B 縦横の撫で	胎土 細かい 1~2mm大の礫を含む。 半存
杯 2 P-13 土壇	F-25 P-42 -12	① 11.6 ② 1.7 ③ 4.5 ④-A 0.2~0.5	口縁部は内傾し、横撫で幅が短い。底部は深く、直接火にあてた様で煤がたくさんついている。	表A 横撫で B 削り様の撫で 裏A 横撫で B 横撫で?	胎土 細かい

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		④-⑧-⑩ 0.2~0.6 ⑤ 12.3	○灰茶褐色		
杯 (須) H-10区	F-26 P-43 - 1	① 12.1 ③ 3.7 ④-⑧ 0.3 ⑧ 0.5~0.7 ⑩ 0.7~1.0 ⑦ 4.9	口縁部は内湾しつつ外傾し、 口唇は丸味をもつ、底は切り離したままで何らの処理をせず、よって、体部と底部の接点は、胎土が盛りたまま残っている。 0.5~1cm程度の礫を含み数ヶ所露出している。 ○灰色	轆轤 右回転	胎土 細かい 完存率 ⑩ 完存 ④-⑧ 欠
高杯 H-10区	F-26 P-43 - 2	① 16.6 ④-⑧ 0.2 ⑧ 0.9~1.2 ⑩ 0.8~1.1 ⑪ 1.7 ⑫ 5.9 ⑬ 4.2 ⑭ 6.6	杯部はほぼ中央に不明確な稜をもつ。この為全体が丸味をもったような感を呈する。脚部は、接合部から大きく脹らんで裾部へ移行する。裾との接合部では、幅が大きくなり、安定感を増す。全体に朱塗されている。 ○茶褐色	表④-⑧ 全体に縦横の撫で ⑩ 縦横の撫で、中央から裾部にかけて斜めの撫で 裏④-⑧ 縦横の撫で、横方向の撫での上に部分々縦の撫でが施されている。 杯、脚とも全体に縦横の撫で	胎土 細かい 1~3mm大の礫を多量に含む。 完存率 口縁部、脚部 一部欠 裾部 全部欠
甕 P-7区	F-26 P-43 - 3	① 20.0 ② 4.0 ④-⑧ 0.5~0.6 ⑧ 0.3~0.6	口縁部は外反しながら、大きく広がっている。口縁部と胴部を横方向の撫で、接合させ、胴部の側面は平らでほぼ垂直に、下位に移行していく。 ○白味を帯びたうす茶色、一部こげ茶色。	表④ 横方向の撫で ⑧ 縦横の撫で 裏④ 縦横の撫で ⑧ 縦横の撫で	胎土 粗い。 1~3mm大の礫を含む。 完存率 口縁部 半分欠 胴部 一部実存
甕 S-5区	F-26 P-43 - 4	① 20.8 ② 4.7 ④-⑧ 0.6~1.2 ⑧ 0.7~1.6 ⑥ 32.4 ⑤ 32.4	口縁部は非常に高く上位に施した横撫でによって段を成す。胴部は、大きく脹らみ、球形を成す様である。内面はほとんど剥落している。 ○茶褐色		胎土 粗く。 1~5mm大の礫を多量に含む。 完存率 ④ 一部欠

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
甕 2 F-9 住居址	F-26 P-43 -5	① 15.4 ② 2.5 ④-④ 0.5~0.6 ⑤ 0.5~0.8 ⑤ 13.2 ⑥ 17.8	球形を呈する胴部から、鋭 角的な括れをもって、短い 口縁部に至る。口縁部と胴 部の接合は、外面から押し、 内面で口縁胎土を胴部に、 撫で付けている様相が露骨 である。	表④ 横撫で ⑤ 縦横撫で 裏④ 横撫で ⑤ 縦横撫で	胎土 粗い。 1~3mm大の礫 を含む。 直接火にかけ た様である。 完存率 ④-完存 ⑤-下部欠 ⑥-全欠
甕 2 F-9 住居址	F-26 P-43 -6	① 15.8 ② 2.9 ④-④ 0.3~0.5 ⑤ 0.2~0.6 ⑤ 9.4 ⑥ 21.1	大きく脹らむ胴部から外反 する口縁部に移行し、口唇 部では反りがさらに大きく なる。口縁と胴の接合は、 口縁胎土を撫でつけている が、雑であり内面に多くの 隙間がみられる。 ○茶褐色	表④ 横撫で ⑤ 縦横撫で 裏④ 横撫で ⑤ 縦横撫で	胎土 やや粗い 完存率 ④ ½ } 実存 ⑤ 一部 }
台付甕 2 I-10区	F-26 P-43 -7	①' 14.4 ② 1.5 ④-④ 0.2~0.6 ⑤ 0.3~0.6 ⑥ 0.1~1.5 ⑤ 14.0 ⑥ 14.6	最大径を上位にもつ、胴部 からやや外傾し口縁部に至 る。口唇は丸味をもつ。口 縁と胴の接合面は、整形後 括られて鋭利な括れとなっ ている。全体に丁寧につく られている。 ○茶褐色	表④ 横撫で ⑤ 上部は横撫で中央は、 縦横撫で 下方は横撫で 裏④ 横撫で ⑤ 縦横の撫で	胎土 やや粗く 1~2mm大の礫 を多量に含む。 完存率 ½
杯 (蓋) 小排46号 6 ポイント	F-27 P-46 -1	① 13.8 ② 1.8 ③ 4.2 ④-④ 0.3~0.4 ⑤-⑥ 0.7~0.6	口縁部は、外反し体部は、 底部まで横方向に円を描く 様に向い削り、撫で、磨き という技術で仕上げてある。 ○黒褐色 口縁内側に段をもつ。	表④ 横撫で ⑤-⑥ 縦横の削りを行い その後撫でを施し 部分的に磨きをか けている。 裏④ 横撫で ⑤-⑥ 横方向の撫で	胎土 細粒。 焼きも良い。
杯 (蓋) 小排46号 6 ポイント	F-27 P-46 -2	① 13.7 ② 1.3 ③ 3.8	口縁部は、外傾し体部は、 縦横に底部まで削り、撫で 最後に磨きを入れ、きれい	表④ 横撫で ⑤-⑥ 縦横の削り、次に 撫でを施し部分的	胎土 非常に 細く、焼き も良い。

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		④-⑨ 0.4 ⑩-㉔ 0.4~1	に仕上げてある。口唇部内側に段をもつ。 ○黒褐色	に磨きをかけている。 裏⑨ 横撫で ⑩-㉔ 縦横の撫で	
杯 小排46号 6 ポイント	F-27 P-46 - 3	① 11.0 ② 1.5 ③ 4.5 ④-⑨ 0.3 ⑩-㉔ 0.4~0.55 ⑥ 12.8	口縁部は、内傾し稜に丸味をもつ。体部は縦横に削り様の撫でを施し比較的荒く仕上げてある。明確な蓋受け部をもつ。口唇部内側に横撫で前につけられた段をもつ。 ○黒褐色、内面一部茶褐色須恵器杯の模倣である。	表⑨ 横撫で ⑩-㉔ 縦横の削り撫で、 底部は、同一方向の削り様撫で 裏⑨ 横撫で ⑩-㉔ 縦横の撫で	胎土 1~2mm 大の礫。
杯 小排46号 6 ポイント	F-27 P-46 - 4	① 13.0 ② 2.1 ③ 4.9 ④-⑨ 0.25~0.45 ⑩-㉔ 0.2 ~0.55	口縁部は、若干外傾しているが、ほぼ垂直である。明確な稜をもつ。口唇部は、断面三角となる様な段を内側にもつ。 ○褐色を帯びている。	表⑨ 横撫で 2 ⑩-㉔ 縦横の撫で 1 裏⑨ 横撫で 1 ⑩-㉔ 円心円状の撫で 2 (横撫)	胎土 1~2mm 大の礫多量 に含む。 炎が直接あたった所あり (片側)
杯 小排46号 6 ポイント	F-27 P-46 - 5	① 12.8 ② 2.0 ③ 5.0 ④-⑨ 0.2~0.3 ⑩-㉔ 0.5~0.8	口縁部は、外傾し、内面は丸味をもち、体部は、縦横の削り様の撫でにより底部に向う。全体に歪みあり。 ○赤褐色	表⑨ 横撫で ⑩-㉔ 上部は横撫で、底部は同一方向の縦横の削り様撫で 裏⑨ 横撫で ⑩-㉔ 縦横の撫で	胎土 1~2mm 大の礫を含む。 やや細い。
杯 小排46号 6 ポイント	F-27 P-46 - 6	① 12.7 ② 2.2 ③ 4.9 ④-⑨ 0.4 ⑩-㉔ 0.3~0.5	口縁部は、外傾し、内面は丸味をもつ。体部は、削り様の撫でによって直線的に底部に向う。器肉は、良く整えられ、4mm前後を計る。 ○赤褐色	表⑨ 横撫で ⑩-㉔ 縦横の撫で 裏⑨ 横撫で ⑩-㉔ 円心円状の撫で 底を中心に円を描いている。	胎土 2mm大 の礫を含む。 やや細い。
杯 小排46号 6 ポイント	F-27 P-46 - 7	① 13.1 ③ 6.3 ④-⑨ 0.3	口縁部は、内傾し、体部は縦横に撫でで底部まで向かい荒くやきあげられている。	表⑨ 横方向の撫で ⑩-㉔ 削り様の撫で 裏⑨ 横方向の撫で	胎土 1~2mm 大の礫を含む。 粗い。

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		㊦-㊧ 0.5~0.8 ㊦ 13.6	全体に丸味をもつ。(碗とよぶべきか) ○茶褐色	㊦-㊧ 横方向の撫で	直接炎をあてている。
杯 小排46号 9ポイント	F-27 P-46 -8	① 14.2 ② 2.1 ③ 4.6 ④-㊦ 0.2~0.3 ㊦-㊧ 0.2~0.4	口縁部は、若干外傾し、口唇部は、鋭角的に切断されている。 明確な稜をもつ。きれいに仕上げられている。 ○茶褐色	表㊦ 横撫で 1 ㊦-㊧ 縦横の撫で、磨いて有る。 2 裏㊦ 横撫で 1 ㊦-㊧ 縦横の撫で 2	胎土 1~2mmの礫を含み、やや荒い。 底全体が直接炎にあたったと見られる。
杯 小排46号 9ポイント	F-27 P-46 -9	① 12.9 ② 2.3 ③ 4.9 ④-㊦ 0.2~0.5 ㊦-㊧ 0.2~0.4	口縁部は、若干外傾し、全体に丁寧に仕上げられている。明確な稜をもつ。 ○茶褐色	表㊦ 横撫で ㊦-㊧ 縦横の撫で 裏㊦ 横撫で ㊦-㊧ 縦横の撫で	胎土 細かい-8に比較すると重い。
杯 表採	F-27 P-46 -10	① 9.7 ③ 4.0 ④-㊦ 0.1~0.3 ㊦-㊧ 0.2~0.4 ⑥ 9.8	全体に丸味をもつ。 うす焼である。 内面は、横方向の撫での後放射線状に磨きが施されている。 ○茶褐色	表㊦ 上部5mm~8mm幅を横撫で ㊦-㊧ 同一方向の横撫でで底部に向う。 裏㊦ 横撫で段をもつ。 ㊦-㊧ 同一方向の横撫でにし、その上に放射線状に磨かれている。	胎土 やや細かい。 一部直接炎があたったと見られる。
杯 表採	F-27 P-46 -11	① 11.7 ② 1.4 ③ 4.4 ④-㊦ 0.2 ㊦-㊧ 0.2~0.8 ⑥ 12.9	口縁部は、内傾し、明確な稜をもつ。 厚焼である。 ○灰褐色で表一部茶褐色	表㊦ 横撫で ㊦-㊧ 縦横の撫で 裏㊦ 横撫で ㊦-㊧ 横の撫で	胎土 1mm大の礫を含む。 やや粗い。
杯 表採	F-27 P-46 -12	① 12.7 ② 2.1 ③ 4.2 ④-㊦ 0.3~0.4 ㊦-㊧ 0.2~0.8	口唇部は、内反し、口縁部中央にふくら味を帯びる稜をもち体部から底部にかけて滑らかに出来上がっている。 ○茶褐色 (一部すす)	表㊦ 横撫で ㊦-㊧ 縦横撫で 裏㊦ 横方向撫で ㊦-㊧ 横方向撫で	胎土 1~2mm大の礫を多量に含む。 底全体にすすがかかっている。

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
杯 表採	F-27 P-46 -13	① 12.3 ② 1.6 ③ 4.0 ④-④ 0.2~0.4 ⑤-⑥ 0.3~0.7	口縁部は、ふくら味をもつて、直立し、稜をもつ。 体部は、右から左へ横にへらを入れた跡がみられる。 ○茶褐色（一部灰褐色）	表④ 横方向撫で ⑤-⑥ 縦横撫で 裏④ 横方向撫で ⑤-⑥ 縦横撫で	胎土 1~2mm 大の礫を多量に含む。
甕 小排46号 9 ポイント 北 2 m	F-28 P-31 -14	①' 20.8 ② 4.1 ③ 32.0 ④-④ 0.5~0.6 ⑤ 0.5~0.8 ⑥ 0.9	若干丸味を帯びた小さな底部から、楕円形を呈する胴部に滑らかに移行していく。 胴部からは緩やかに括れ、口縁部は外傾している。 口唇部は丸味をもつ。胴部最大径は、ほぼ中間にあり口縁径より若干大きくなる。 胴部外面は、2 次的な火熱を受けてほとんどが剥落しており、凹凸がはげしい。	表④ 横撫で ⑤-⑥ 縦横の撫で 裏④ 横撫で ⑤ 全体が縦横の撫で ⑥ 縦横撫で（特に横撫でが強い。） ○茶褐色（底部附近黒ずんでいる。）	胎土 粗い。 1~2mm大の礫を含む。 完存率 1/4
甕 小排46号 9 ポイント 北 2 m	F-28 P-31 -15	① 16.8 ② 2.2 ④-④ 0.4 ⑤ 0.4~0.5	外傾した口縁に横撫でが施されているが、括れ部から胴部にかけて、斜めに削りが施されている為段差が生じている。この為、括れがより鋭角的な感を呈する。 胴部は口縁径より幾分大きく脹らむ程度であろう。	表④ 横撫での後、横方向の撫で ⑤ 縦横の撫で 裏④ 横方向の撫で（横方向の線がある。） ⑤ 縦横の撫で ○茶褐色を基調にこげ茶、うす茶を呈する。	胎土 やや粗い 1~5mm大の礫を含む。 完存率 口縁部— やや完存 胴部—一部存
甕 小排46号 9 ポイント 北 2 m	F-28 P-31 -16	① 18.7 ② 4.2 ④-④ 0.4~0.7 ⑤ 0.9~1.6	口縁部は、外反し、口唇部は丸味をもち、大きく開いている。口縁部全体かなり歪みを生じている。胴部との接合している部分は厚く横方向の撫でで接合させている。そして、胴部もかなり側面が凹凸している。	表④ 横方向の撫で ⑤ 縦横の撫で 裏④ 縦横の撫で ⑤ 縦横の撫で ○外側→こげ茶 内側→茶褐色	胎土 やや粗い 1~3mm大の礫を含む。 完存率 口縁部— 一部欠 胴部—一部存
高杯 幹排 3 号と 小排23号交点	F-29 P-47 -17	① 29.0 ③ 13.3 ⑤ 7.6	脚部と比較して、杯部が、極端に大きい。杯底面は、中央部が水平であるが稜の	杯部は、内面底部をのぞいて、丁寧な撫での後、磨きがかけられている。内面底	胎土 細かく 焼きも良い。 完存率 1/2

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		⑮ 13.0 ④-④-⑮ 0.5 ㉔ 0.4 ⑩ 0.7~1.1 ⑮ 1.8	部分は、下降している。稜から口縁部にかけて、外反しながら大きく開く。脚部は、直線的に開き、裾部にかけて、緩かにカーブをえがいてひろがる。杯と脚の接合は杯が凹脚が凸である。白味の強い淡黄色基調として、黒褐色及び朱色を呈する部分がある。	部は撫でのみである。脚部は、外面、裾部内面に撫で後の磨きかけられている。脚部内面は横方向に連続する撫でが施されている。杯脚接合面は、脚部、胎土が杯部に撫でつけられている。	
高杯 表採	F-29 P-47 -18	① 16.2 ③ 17.0 ⑨ 12.2 ⑮ 13.6 ④-④ 0.3 ㉔ 0.4~0.6 ㉔ 0.2 ⑩ 0.4~2.8 ⑮ 4.0	口縁部は、外傾し、稜が少し外につき出し、体部から脚部にかけて縦の撫で接合させている。杯部は、全体を丁寧な撫でで仕上げている。脚部は、杯との接合面で極端に細かく裾に向けて直線的に開く。縦横の撫で、上から下に向けて、へらで撫でおろし、裾部と接合させている。脚最奥部に棒によって刺突して整えた痕が顕著である。脚部が長く細い。脚部から裾部にかけて鋭角的にひらいている。 ○茶褐色	杯部、口縁部は、細かい縦横撫で、体部は、縦横撫で、ところどころ縦横撫で、裏は縦横撫で 脚部 細かい縦横撫で 裾部 縦横撫で	胎土 細かい 完存率 杯部 ㊦存 脚部 完存 裾部 一部欠
杯 表採	F-29 P-47 -19	① 12.8 ② 3.4 ④-④ 0.1 ㉔ 0.3~0.5 ㉔ 0.5~0.8 ⑦ 6.7	山茶碗のような感を呈する。口縁部の内面と外面の両面共縦横に撫でられている。口が広く、底が丸く平らな為に非常に安定している。底部の内側は、中央がもりあがりごつごつし、内側を縦横に撫でつけ、外側は糸切りの後撫でつけている。全体に荒い礫が非常によく露出している。体部に若干	表㉔ 横方向の撫でと斜めの撫で ㉔-㉔ 全体を横撫での後縦横の撫で 裏㉔ 横方向の撫で ㉔-㉔ 横撫での後横方向の撫で	胎土 1~5mm 大の礫を多量含む。 粗い。 完存率 口縁部一部欠

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
			の脹らみをもって口縁部に至る。口縁部は、外反し、丸味をもつ。 ○うす茶色（半分赤茶色）部分的に灰褐色		
台付甕(台) 表採	F-29 P-47 -20	⑧ 4.8 ⑨ 5.0 ⑮ 9.0 ⑤ 5.5 ④-⑩ 0.6~1.4	脚部のみ残存。 外面は、斜めあるいは横に撫でている。内面を撫で付けによって整形した後底面を造り出しており、内面に胎土の盛り上りをみる。底面は丸味を帯びず、平らである。脚上端に不整円孔があり、体部が凸、脚部が凹で接合されたようである。 ○灰褐色(一部茶褐色あり。)	表脚部—横縦撫で上方にと ころどころ縦撫で めだつ。 裏脚部—縦横の撫で	胎土 粗く。 1~2mm大の礫 を多量に含む。 完存率 脚のみ
高杯 表採	F-29 P-47 -21	① 17.6 ⑧ 6.1 ⑤ 13.4 ⑧ 3.7 ④-④ 0.3 ⑧ 0.6~0.9 ⑤ 2.6 ⑩ 0.5~4.2	杯部は、全体的に細かい縦横の撫で、でき口唇部から若干の脹らみをもって稜から接合面へ移行する。稜は丸味をもっており、ほとんど稜とは、いえない。 横の撫ででつないでいる。 脚部は、上から下に斜めに磨きをかけている。 杯部は、直線的に開く。 ○茶褐色	杯部—全体に縦横の撫で、 左から右にかけて斜めに撫でを入れている。 脚部—全体が非常に丁寧な細かい縦横の撫で、上から下に縦の撫でを入れている。下方一部に強い横撫で、裏は、全体縦横撫でだが、接合部附近は横撫で、中央が縦撫で、下方は、横撫でが強い。 接合部—体部から脚部にかけて横撫ででとめている。裏は、体部から脚部にかけて横撫ででとめている。	胎土 粗く。 1~2mm大の礫を含む。 完存率 ④ 欠 脚部下方は、ほとんど欠、その他完存。

器 種	番 号	大 き さ (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
甕 幹道と小排 44号交点 北2m	F-30 P-48 -22	① 16.3 ② 4.4 ③ 35.6 ④-① 0.5~0.7 ⑤ 0.6~1.9 ⑦ 7.3	口縁部は、少し外傾し、ほぼ垂直しており、口唇部は、ゆがみをもつ。胴部は、ゆるいカーブを描き、最大径を胴部中央にもち、底部に至る。底部が全体に比べて非常に小さい為安定性に欠ける。大きな礫が、露出している。	表④ 横方向の撫で ⑤ 上方→縦の削り 下方→縦横の削り ⑥ 横の削り 裏④ 横方向の撫で ⑤ 縦横撫での後、ところどころ縦、横の削りが見られる。 ⑥ 縦横撫で	胎土 粗い。 2~3mm程度の礫を多量に含む。 ④ ㄱ欠 ⑤ ㄱ欠 ⑥ 完存 ④ 淡い茶褐色 ⑥ 濃い茶褐色
甕 3ポイント	F-30 P-48 -23	① 18 ② 2.2 ④-① 0.5~1 ⑤ 0.4~0.5	口縁部は、上部で外傾し、中央部でくびれはほぼ直立して胴部にいたる。内面は大きな礫が露出している。	表④ 横方向の撫で ⑤ 縦の削り 裏④ 横方向の撫で ⑤ 縦横撫で	胎土 粗い。 1~3mm大の礫を含む。 ④⑤ 一部存 茶褐色
高杯 幹道と小排 46号交点	F-30 P-48 -24	④-① 0.6~1.4 ⑤ 0.5~0.9 ⑩' 5.4	脚部一部のみ残存。脚の大きく脹らむ高杯である。外面は丁寧に撫でつけられている。	表⑩ 縦横撫で（体部からの撫でつけて接合） 裏⑩ 縦横撫で（体部から横撫でで接合）	胎土 非常に細かい。 ⑩のみ一部実存。 茶褐色
杯 幹道と小排 44号交点 北2m	F-30 P-48 -25	①' 11.2 ② 1.9 ④-① 0.25~0.7 ⑤ 0.2~0.5	口縁部は、内傾し、明確な稜をもち、底部は浅い。	表④ 横撫で（口辺部横方向の撫でで稜附近に2本の線あり。 ⑤ 横方向の撫で 裏④ 横方向の撫で ⑤ 稜附近横撫で、その他横方向の撫で	胎土 非常に細かい。 ④⑤一部実存 ④⑤黒褐色
杯 小排44号 7ポイント	F-30 P-48 -26	①' 14.8 ② 3.4 ④-① 0.2~0.8 ⑤ 0.3~0.4	全体に比べて口縁部が長い。明確な稜をもち、底部は浅い。	表④ 横撫で ⑤ 横方向の撫で 裏④ 横方向の撫で ⑤ 横方向の撫で	胎土 粗い。 0.5~2mm大の礫を含む。 ④⑤一部存 ④黒みをおびた茶褐色 ⑤茶褐色

III ま と め

中島遺跡は、利根川の南約3km、荒川の北約4.5kmに位置する。遺跡は、これら両河川の古流路によって形成された沖積地の接点にあたり、北側を利根川、南側を荒川によって複雑な影響を受けている。こうした両河川の接点に微高地が在り、そこに集落が存在したわけである。こうしてみると、中島という名称がそのままこの地の状況を物語っているようである。このようにして堆積した粘土層は不安定であり、連続せず、遺構の検出を困難なものとした。さらに、我々の発掘技術の未熟さがこれに拍車を掛けることになったのは誠に慚愧に耐えない。しかし、若干の知見を得たので、ここでそれらをまとめ、年代観を加えてみたい。なお、ここで使用する編年基準は、古墳時代の、和泉、鬼高、真間、国分の区分であり、細分された、鬼高Ⅰ・Ⅱの区分は使用しない。一時期内の区分は各々の具有する要素によって古、中、新としてとらえ、それは一時期内の変化として認識したい。

1. 遺 構 に つ い て

中島遺跡において発見された遺構は、住居址および土師器窯址が主体をなす。住居址は、その出土遺特からみると、古墳時代鬼高期の古段階、中～新段階から、真間期、国分期までが認められる。しかし、これらの各期の住居址は、継続するものでなく、数度の断絶がみられる。土層の状況によると、その原因は洪水によるものと思われ、幾層もの薄い粘土層が住居址を埋めている。土師器が集中して出土している土層内において、水辺に繁茂する植物群が多量に確認されたことは、集落を営む地域でも一時的にせよ水が停滞したことを想起させ、集落がこの為廃絶したことを物語るものである。各期の住居址を通観してみると、全て柱穴、および、貯蔵穴をもたない点が先ず指摘される。この点については、発掘調査中、問題点として、各住居址共、床面を数度精査した結果であることを付言しておく。

鬼高期古段階の住居址は、M-9住居址、2F-9住居址であり、これらを中心としたトレンチから出土した遺物は、ほとんど同様の時期を示す。また、C-6住居址出土の杯形土器もこの時期を示し、拡がりは、遺跡北半に及ぶと考えられる。

鬼高期中～新段階の住居址は、本遺跡の中核をなすもので、C-1区から、2P-14住居址まで広範にわたる。

鬼高期、住居址の形態は方形を基本として、長方形を呈するものもある。主軸方位は約45°を中心として東へ振れる場合が多いが、ほぼ南北を向くものもある。鬼高期で古い段階のものは前者であり、新しいものが後者である。カマドは設置されている場合が多い。その位置は、北東壁中央のものが主体であり、稀に北西に有するものもある。(20-9住居址、2N-14住居址)。カマドをもたない例は、時期の問題ではなく、集落内における、各住居の用途の差であると解している。カマドは煙道部のみが竪穴外へ出る。カマドを構成している粘土は、特別なものでなく、付近に存在する粘土を使用している。

真間期に比定される住居址の確実な例は、U-17住居址のみである。主軸方位は、N-90°-Eを示し、鬼高期の新しいタイプと同様の傾向を示す。2N-14住居址は、覆土中に真間期の土器が放棄された状況で発見されており、鬼高期中～新段階の住居址に比定している。

国分期の住居址は、2M-9住居址、2N-9住居址、2P-9住居址である。なかで、住居址の形態が明確なものは、2N-9住居址である。横に長い形態を呈し、北壁中央にカマドをもつ。カマドは、馬蹄形を呈し、大部分が竪穴外へ張り出す。裾に花崗岩質の切石を直立させて使用していた。内側は赤色化し、強い火熱を受けた様子がうかがえる。この時期のカマドもやはり、前代と同様、特別な粘土を用いず、付近に堆積している粘土を使用している。国分期の遺物は、この付近を中心として、20-13付近まで拡がりを持ち、遺跡の北西部に集中するようである。

このように各期の住居址は、地域を移動して集落が営まれていた様相を呈している。

土師器窯址は、2期に区分される。M-11、S-18、T-17、W-9の4基はいずれも鬼高期中～新段階であり、杯形土器のみ出土している。そして、各々が独立した遺構で発見されている。

2N-9住居址、2P-14住居址の覆土上で確認された例は、いずれも甕形土器のみ出土している。時期は国分期である。しかし、住居址覆土埋没の一過程を利用しており、特別な施設をもたない為、この例が、土師器窯址とし得るかどうか疑問である点は、本文中に述べたとおりである。

4基の土師器窯址の平面形態は凸形を呈し、ほぼ一定の形状をみせるが、各々独特の内容を示す。4基の窯址を比較してみると、T-17は遺物の集中地点下に円形ピットを有するのに対し、M-11は遺物をのせている床面が脹らみをもつ、S-18は全体に窪んでおり、W-9は上下2段の水平面をもっている。このように、土師器窯址底面は、様々な形状をもつのであるが、特にT-17、M-11例のように同一の器種を生産する場合においてもその形状を違えている点からすると、底面の形状は生産技術に何ら関与するものでないといえる。隣接の深谷市・上敷免遺跡の場合、その時期は若干異なるが、やはり同様の形状を呈している。

土師器窯址の分布地域は、各々の時期に該当する住居址の分布地域と同一である。

発掘調査で確認された遺構は、住居址16基、土師器窯址6、その他と、数が少ないが、これは、土層が不安定であったため、平面で確認することが困難であったこと、また面発掘の面積が極端に制限されていたことが原因である。トレンチ等によって確認された住居址等、遺構の可能性をもつものはかなり多く、遺物の拡がりと併せ考えると、集落の範囲は、「古環境の復元」で述べた集落形成可能地域（微高地上）全域に拡がるものと考えられる。

2. 遺物について

遺物は古墳時代和泉期～国分期に及び、器形は高杯、杯、甕、甗、壺などが見られ、特殊なものとして有孔円板、土錘がある。なお、() 内の数字は図版番号―遺物番号を示す。

土師器

高杯形土器は6点ある。(29-2)に示した高杯は、杯部の下位に明確な稜を持ち、杯部全体が小さく造られている。一方、脚部は直線的に下方に開き、細かく、長く造られていて、強く屈曲した裾部へ移行する。これらの特色は和泉期のものであって、この時期に比定して良いものと思う。

(12-4、5)の2例は、明確な稜をもち、大きく外反する杯部である。しかし、5の例の場合稜が不明確な部分もある。また、4の例では不明確であったが、5の例では杯部に「ヘソ」をもつ。これらの特色を総合してみると、和泉期的な要素が強いが、新しい要素も多く、そのうち最も新しい時期とするのが妥当と思われる。(29-5)例は、稜が不明確になり、全体的に内湾するように丸味をもつ。脚部は逆に外反し、緩やかに外方に広がる。これらの特色から本例は鬼高期中葉の所産と考えられる。(26-2)および、(30-3)の2例は共に、大きく脹らんだ短脚をもつ。後者には杯部がみられないが、前者を見てみると、稜がわずかに残存し、全体に丸味をもつ。この2例もやはり鬼高期中葉に位置づけられよう。

以上の高杯形土器はいずれも朱塗されている。

(29-1)は、杯部が巨大であり、明確な稜をもって、大きく外反する。脚部外面および杯部は全面にわたって丁寧にへう磨きし、光沢さえもつ。和泉期の所産であろうか。その他、(8-4)は、胎土が粗く、高杯の脚部ではなく、台付甕の脚部ではないかと思われる。強い火熱を受けており、そのことをより強く思わせるものである。真間期の所産であろうか。

杯形土器は、鬼高期古段階から真間期に及び、5種類に区分される。それらは、さらに、整形技法、全体の形態によって細分される。

I…口縁部が内傾する類である。

I-a、(27-3)、須恵器杯の模倣であり、蓋受部をもつ。体部外面は削りによって整形している。

I-b、(21-6、25-12、27-11、13)明確な稜をもち、口縁部に比して、体部が深い。底部は若干平坦になっている。

I-c、(25-3、5)明確な稜をもつ。口縁部と体部の深さはほとんど差がなく、全体に、底の深い形態を呈する。

II…口縁部が直立する類である。

II-a、(21-5、25-8、11)明確な稜をもつ。口縁部が短く、体部が丸味をもって深く造られている。全体に、底のやや深い形態を呈する。

II-b、(25-4、27-4)明確な稜をもつ。口縁部に比して体部が深目であるが、ほとんど差はない。底面は丸底である。

II-c、(16-2、30-4)明確な稜をもつ。II-b類と好対称であり、口縁部が大きく、体部が浅い。また若干平坦な底部をもつ。

III…口縁部が外傾する類である。

III-a、(27-5、6、9、12)明確な稜をもつ。口縁部は器肉に脹らみをもち、外傾の度合いが少ない。口縁部と体部の深さはほとんど差がない。若干の平坦面をもつ底部である。

III-b、(11-4、25-7、27-8)明確な稜をもつ。口縁部は先端に移行するにつれて器肉が薄くなり八形を呈するものと、先端部を水平に切り取った□形を呈するものがある。口縁部と体部の深さはほとんど差が無く、丸味を滞びた底部をもつ。

Ⅲ－c、(16－3、19－21、25－1、2、6、9、10) 稜をもつ。2段の横撫でが施されている。口縁が高いのに比して、体部が極端に浅い。この一群の中でも19－21例は、他の例が口縁部内面が直線的に外傾しているのに対して、強い丸味をもつ。外傾しているというよりもむしろ、外反しているといえる。このように、19－21例は他例よりも後出すると考えられ、本来別の類を設定すべき例である。なお、(30－26)もこの類であろう。

Ⅳ…球形の体部を有する類である。

Ⅳ－a、(27－7) 口縁部は内湾し、稜をもたない。

Ⅳ－b、(11－5、27－10) 口縁に横撫でが施され、稜をもつ。口縁は直立する。内面にへう磨きによる暗文をもつ。外面はへう削りのものと、撫でによって調整したものがある。なお、後者は小型である。

I～Ⅳにおいてみられる稜は、I－aを除いて、横撫でによって造り出されている。

V、(8－3、21－2) …全体に浅く扁平な類であり、稜をもたず、口縁部と体部の区別が明瞭でない。

その他、(21－7)、口縁部は脹らみをもち、外形からすると、内湾している感を呈するが、全体的には直立している。体部は極端に浅い。内に、へう磨きによる暗文がある。

小型であり、黒色を呈する。

さて、このような結果、I－aが最も古い段階に位置し、Ⅳ類、も同時期とみられる。そしてI－b、Ⅱ－a、b、Ⅲ－aから、I－c、Ⅲ－c、と続き、Ⅱ－c、Ⅲ－b、Ⅲ－cのち別類へと移行すると考えられる。以上が鬼高期に属するもので、V類に至って真間期に入ると考えられる。

甕形土器については、カマドの出現と共に変化をもつ、煮沸用の甕についてみていくこととする。

I…球形の胴、強く屈曲した括れ部から、外反する口縁へ移行する形態を示す。最大径を胴上部にもつ。総体的に小型である。(12－1、7、26－5)

Ⅱ…楕円形に脹らみをもつ胴から外反する口縁へ移行する形態を示す。最大径を胴中央にもち、長胴化の傾向を示す。胴の脹らみに比べて口縁径が小さい。(12－2、30－22)

Ⅲ…口縁径が大きく、胴の脹らみが少なくなる。最大径は、胴部中央やや上位にあるが胴部最大径と、口縁径の差は少なくなる。底部が極端に小さい。(6－3、28－14、15、16)

Ⅳ…大きく外反する口縁に最大径をもち、肩の張った長胴をもつ。(8－2、9－6、7、8、9、10)

V…頸部を有し、外傾する口縁から、肩の張った卵形の胴部へ移行する。最大径を胴上位(肩)に有する。(17－11、12、13)

甕におけるI～Vの変化は、鬼高期古段階(I、Ⅱの一部)、中～新段階(Ⅱの一部、Ⅲ、)、真間期(Ⅳ)、国分期(V)に比定し得る。

須恵器

中島遺跡でみられる須恵器には、杯および甕がある。

杯は大半が轆轤水びき後、回転糸切りによって底部切り離しをおこなっており、大部分が糸切りのままであるが、中には、糸切り後、周辺部にヘラ削りを施しているものもある。糸切り底をもつ例は、口径と底径の差が若干大きくなっている。

ヘラ切りとみられる例は口径と底径の差が少ない。

甕は、大きな折り返し口縁と頸部に2帯の波状文帯をもつことを特徴とする。

このように、糸切り周辺部のヘラ削り技法を残しつつ、糸切りのみで終える例が多くなる時期であるといえる。この時期は、坂詰秀一氏のいうⅣ期、岡田茂弘・桑原滋郎氏の轆轤からの切り離し及び調整等からされた10分類の第8類、および第9類-aに比定し得る。よって、これら須恵器に付与される年代は、9世紀を中心とした年代であるといえるであろう。

以上、中島遺跡において発見された遺構、遺物について述べてきたのであるが、各住居址、窯址における出土土器の時期、および、それら各遺構自体に付与される時期は下表のとおりである。

第3表 遺構一覽表

	遺 構 名	遺物の出土位置	出土土器時期	遺 構 時 期
1	R-17 住居址	床上	鬼高期（新）	鬼高期（新）
2	U-17 "	床上	真間期	真間期
3	C-6 "	覆土中	鬼高期（古～中）	鬼高期（古）
4	M-9 "	床上	鬼高期（古）	鬼高期（古）
5	P-9 "	床上	鬼高期（新）	鬼高期（新）
6	Y-9 "	覆土中	鬼高期（古）	鬼高期（古）
7	2A-9 "	住居址構築基盤層中	和泉期	鬼高期（古）
8	2F-9 "	床上	鬼高期（古）	鬼高期（古）
9	2M-9 "	覆土中	鬼高期（新）国分期	国分期・もしくはそれ以前
10	2N-9 "	覆土中	国分期	国分期
11	20-9 "	床上	鬼高期（新）	鬼高期（新）
12	2P-9 "	覆土中	国分期	国分期
13	2M-14 "	覆土中	国分期	国分期・もしくはそれ以前
14	2N-14 "	覆土中	鬼高期（中～新）真間期	真間期・もしくはそれ以前
15	2P-14 "	床上	鬼高期（古～中）	鬼高期（中）
16	2K-17 "	覆土中	鬼高期（中～新）	鬼高期（新）
17	2P-13 土壇	覆土中	鬼高期（中）	鬼高期（中）
18	2Q-14 竪穴	覆土中	鬼高期（古～中）	鬼高期（中）
19	2Q-15 "	覆土中	鬼高期（古～中）	鬼高期（中）
20	M-11 土師器窯址	床上	鬼高期（中）	鬼高期（中）
21	T-17 "	床上	鬼高期（中）	鬼高期（中）
22	S-18 "	覆土中	鬼高期（中）	鬼高期（中）
23	W-9 "	覆土中	鬼高期（中）	鬼高期（中）

引用・参考文献

- 井上肇「7世紀の杯形土器について」埼玉県立博物館紀要－6、1979
- 岩崎卓也「東日本における土師器の研究」史学研究4、1964
- 岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」多賀城跡調査研究所紀要I、1974
- 倉田芳郎「南関東における住居址出土の土師器」考古学雑誌50－3
- 坂詰秀一「関東の須恵器」「世界陶器全集」第2巻
- 酒井清治『石川窯址』『千葉・南総中学遺跡』先史10、1978
- 高橋一夫「国分期土器の細分・編年試論」埼玉考古第13、14号、1975
- 岡部町教育委員会「後榛沢遺跡群の調査」1978
- 上里町教育委員会「原・清水南」1978
- 下廓遺跡調査会「下廓遺跡」1978
- 埼玉県教育委員会「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」埼玉県遺跡発掘調査報告書5、1973
- 埼玉県教育委員会「本郷東、愛宕」埼玉県遺跡発掘調査報告書7、1975
- 埼玉県教育委員会「中堀・耗安地・久城前」埼玉県遺跡発掘調査報告書15、1978
- 埼玉県教育委員会「東谷・前山2号墳・古川端」埼玉県遺跡発掘調査報告書16、1978
- 埼玉県教育委員会「舞台（本文編・資料編）」埼玉県遺跡発掘調査報告書17・18、1978
- 埼玉県遺跡調査会「水深」1972
- 埼玉県遺跡調査会「枇杷橋遺跡発掘調査報告書」1973
- 深谷市教育委員会「上敷免遺跡」1978
- 城ノ越遺跡調査会「城ノ越遺跡」1978



1. 航 空 写 真



2. 遺 跡 遠 景



3. トレンチ 9 ライン



4. 発掘風景



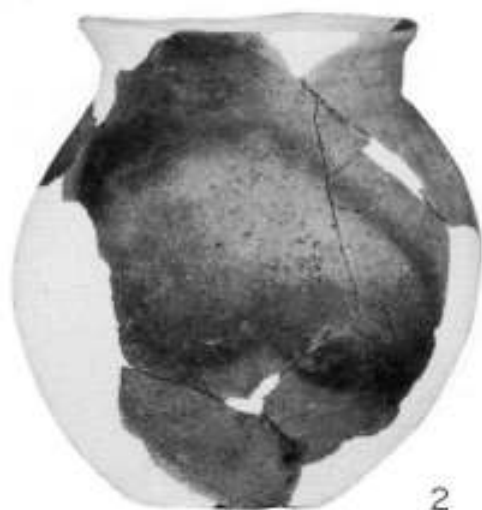
5. 面発掘状況



6. R - 17 住居址



7. R - 17 住居址
遺物出土状況



8. R-17住居址・2M-9住居址出土遺物 (1)



9. U-17住居址



10. U-17住居址カマド前遺物出土状況



11. U - 17 住居址出土遺物 (1)



6



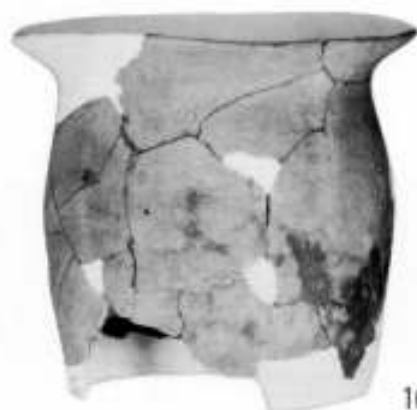
8



7



9

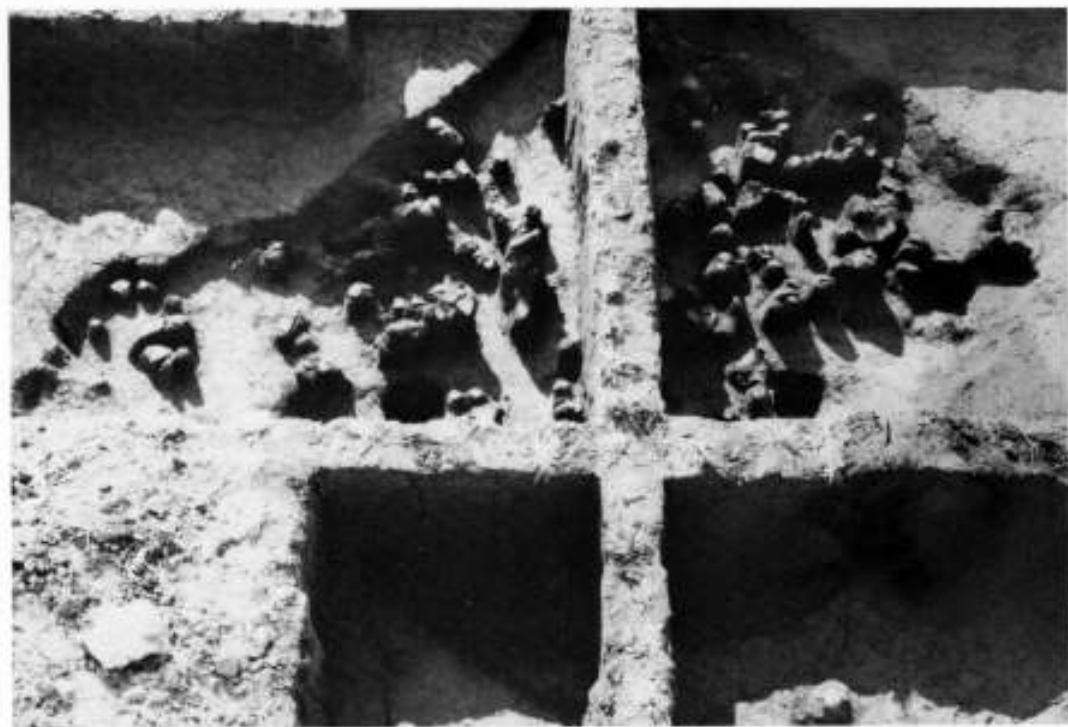


10

12. U - 17 住居址出土遺物 (2)



13. C-1 区遺物出土状況



14. C-6 住居址



15. C ライン 出土遺物



(上) 16.

M-9 住居址



(左) 17.

P-9 住居址



18. Y - 9 住 居 址



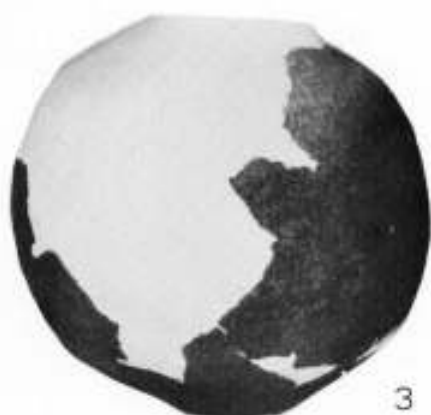
19. Y - 9 木 棺 墓



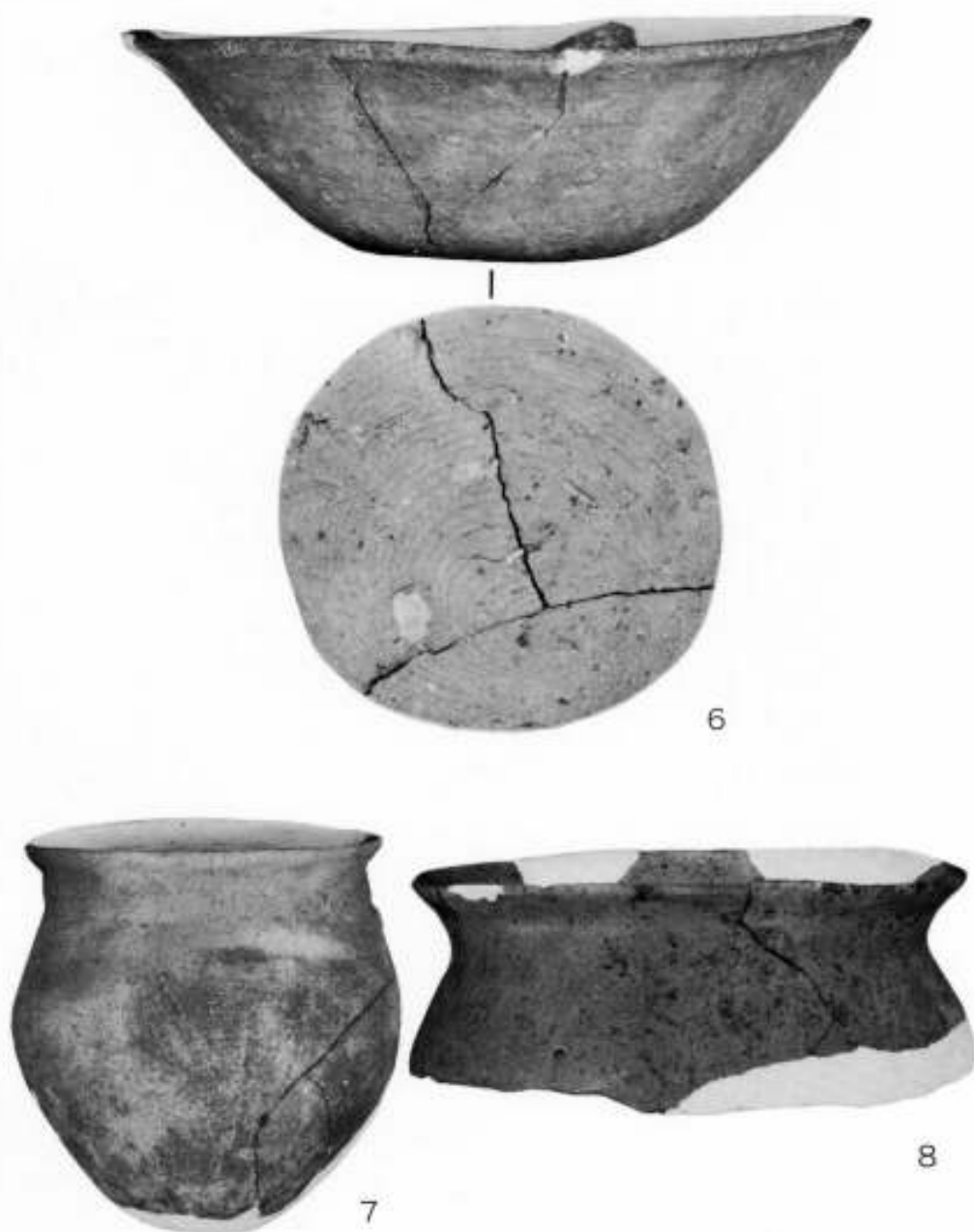
20. 2 F - 9 住 居 址



21. 2 K - 17 住 居 址



22. 9 ライン出土遺物 (1)



23. 9 ライン出土遺物 (2)



24. 2 N - 9 住 居 址



25. 2 M - 9 住 居 址



26. 20-9・2P-9 住居址



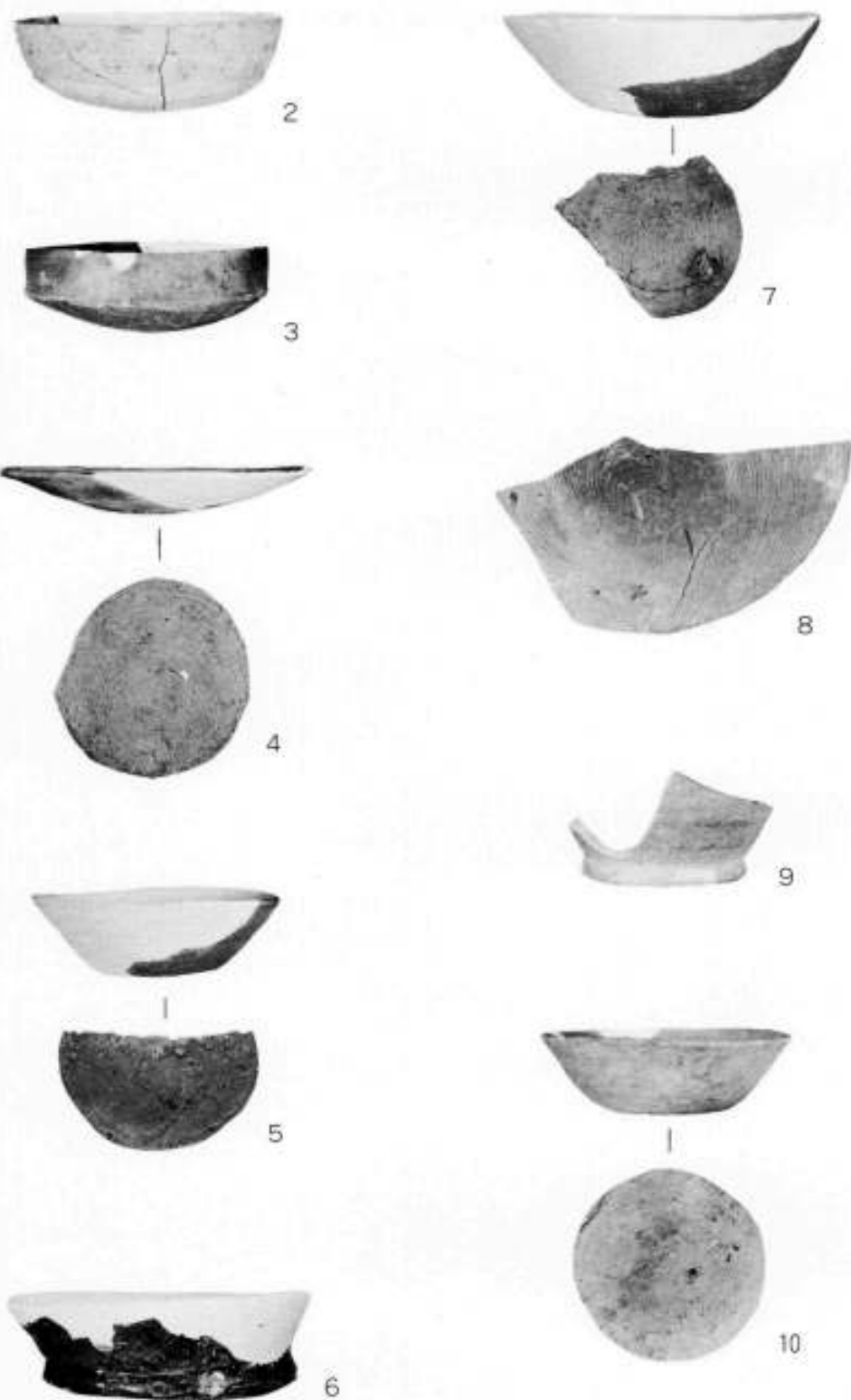
27. 2M-9 住居址遺物出土状況



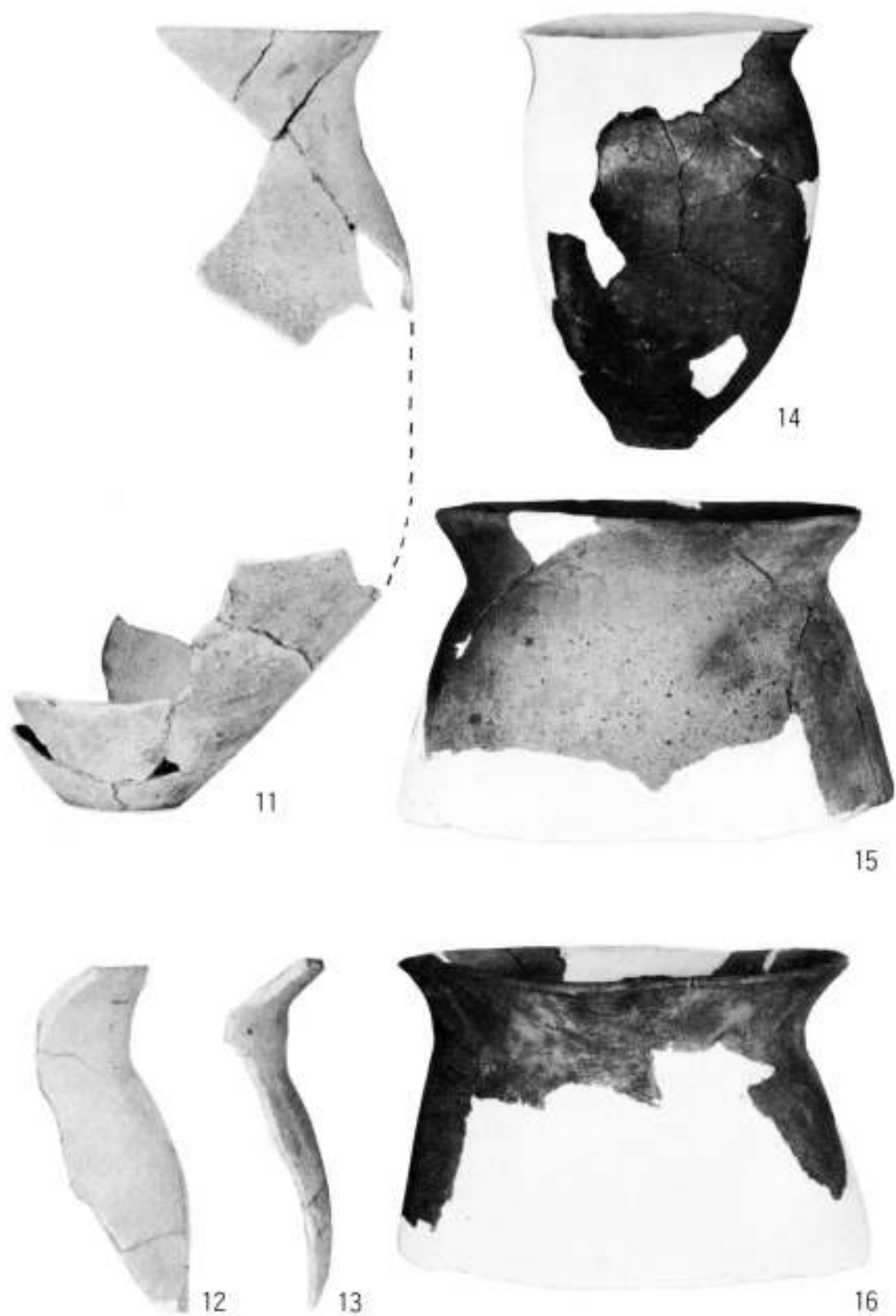
28. 2N-9 住居址カマド



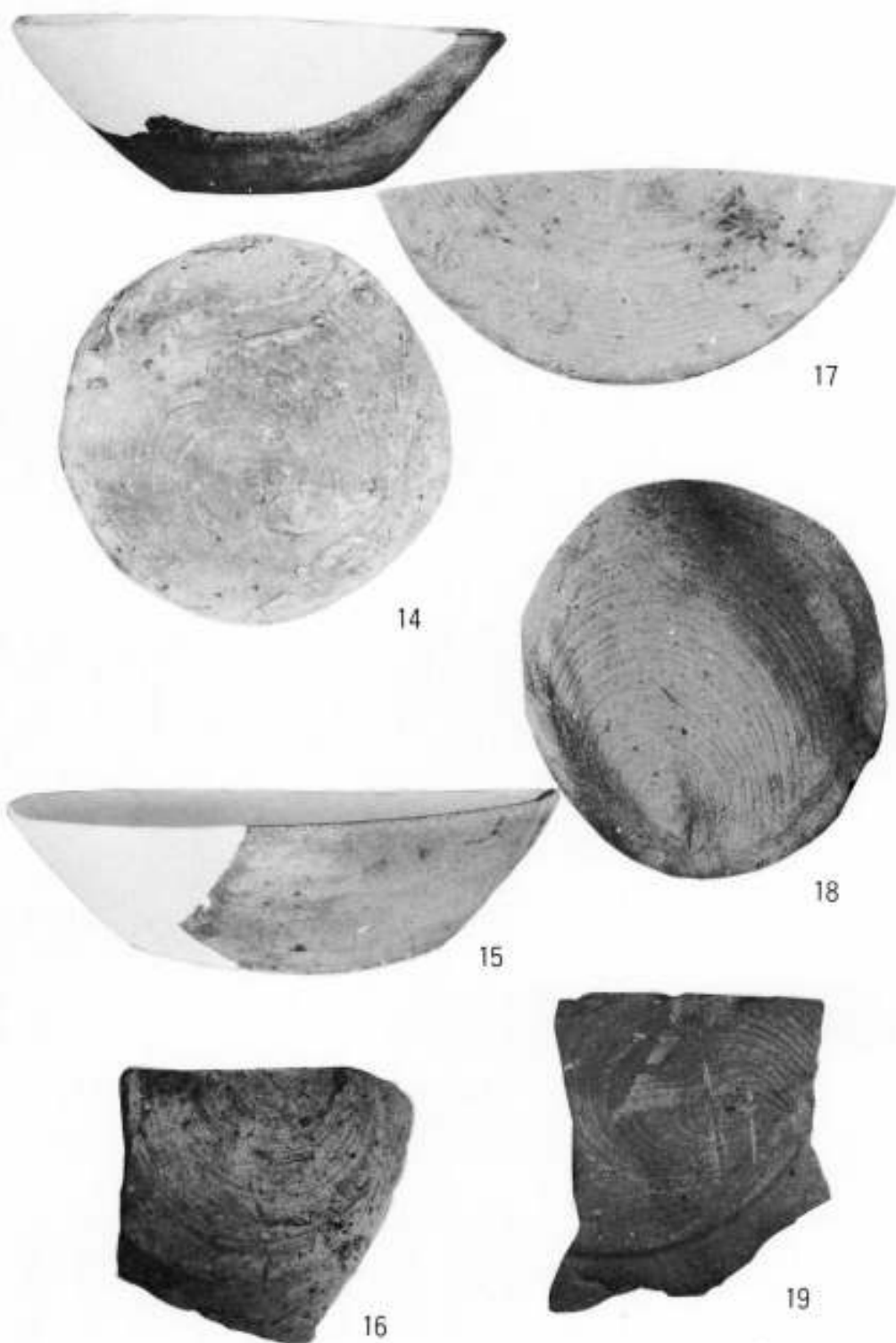
29. 20-9 住居址カマド



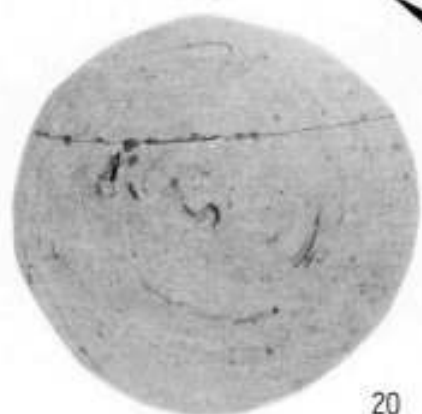
30. 2M-9・2N-9・20-9・2P-9 住居址出土遺物 (2)



31. 周辺出土遺物(1)及び2M-9・2N-9・20-9・2P-9 住居址出土遺物 (3)



32. 2 M - 9 + 2 N - 9 + 20 - 9 住居址出土遺物 (4)



20



21



23



24



22

33. 2 M-9 + 2 N-9 + 20-9 + 2 P-9 住居址出土遺物 (5)



34. 2 M-14・2 N-14 住居址遺物出土状況



35. 2P-14 住居址



36.
2P-14住居址カマド



37. 2 P - 13 土 坑



38. 2 Q - 14 · 15 竖 穴



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14

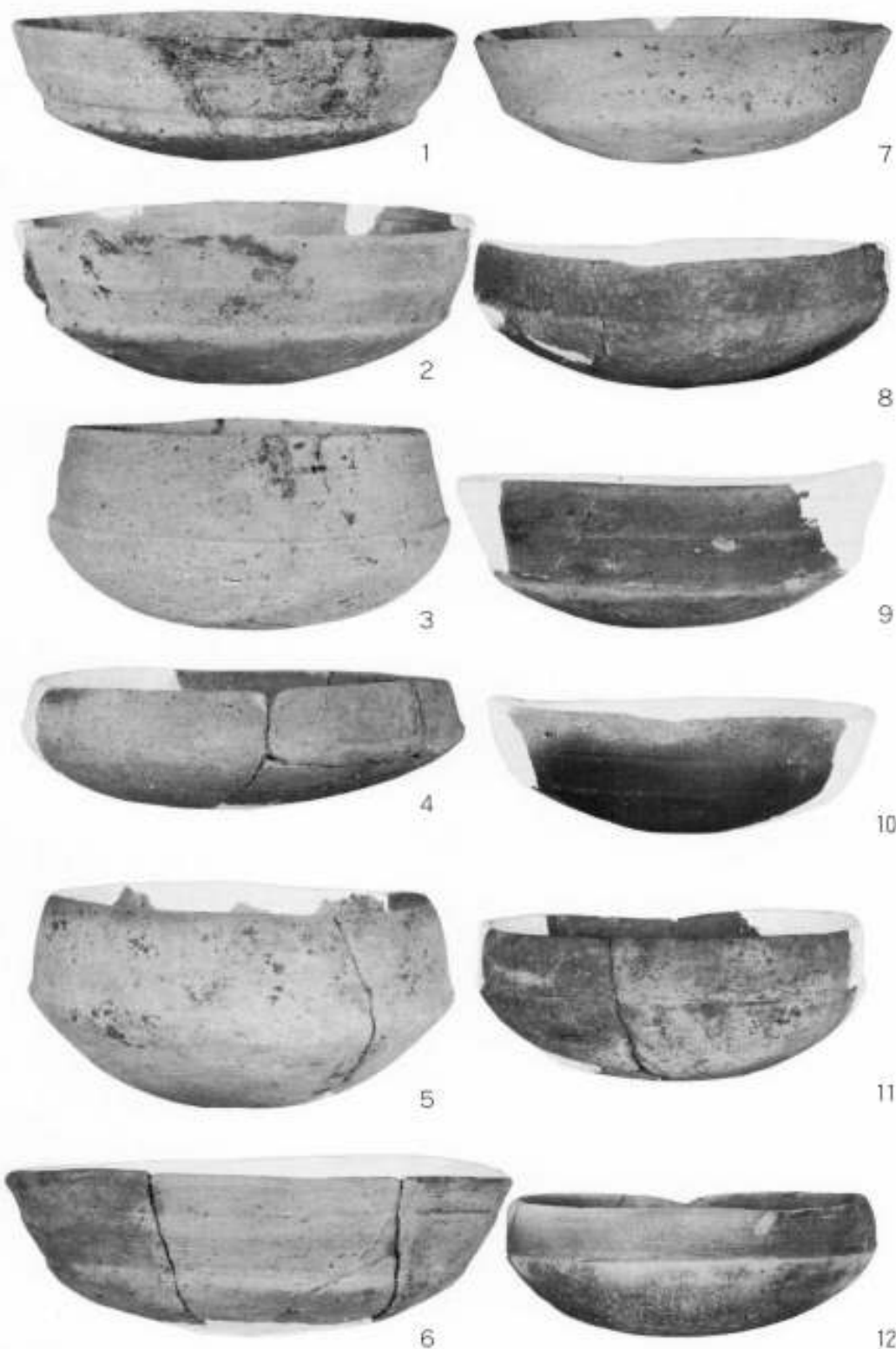
39. 2N-14・2P-14 住居址出土遺物



40. M - 11 土師器窯址



41. T - 17 土師器窯址



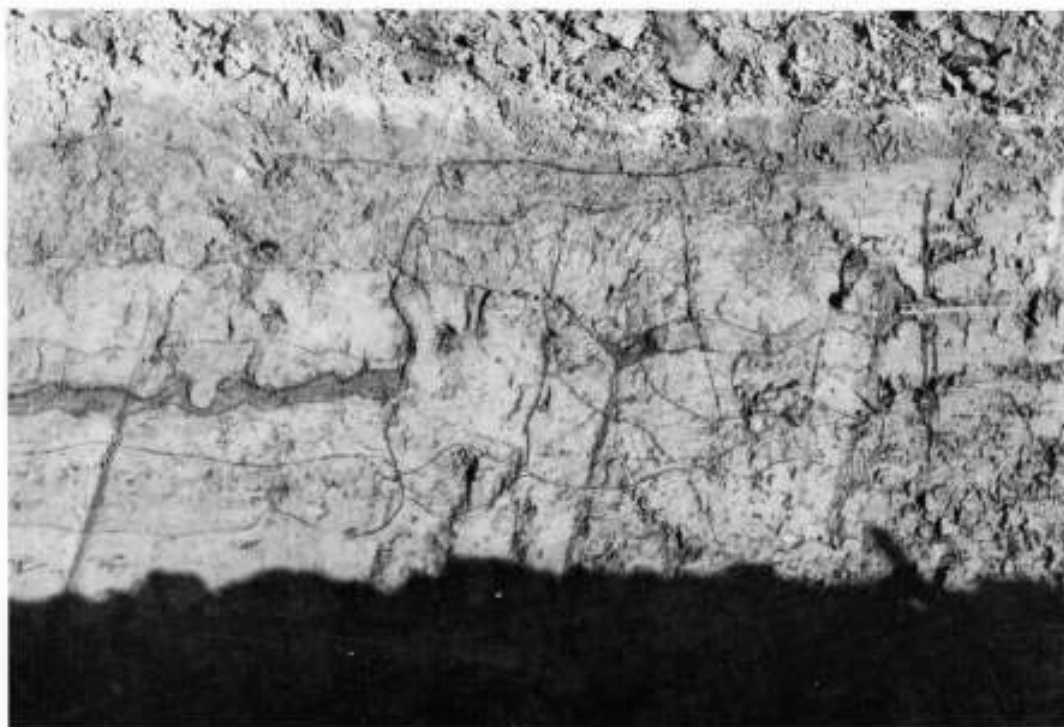
42. M-11・T-17 窯址 2 P-13 土坊出土遺物



43. トレンチ出土遺物



44. 小排 21 号



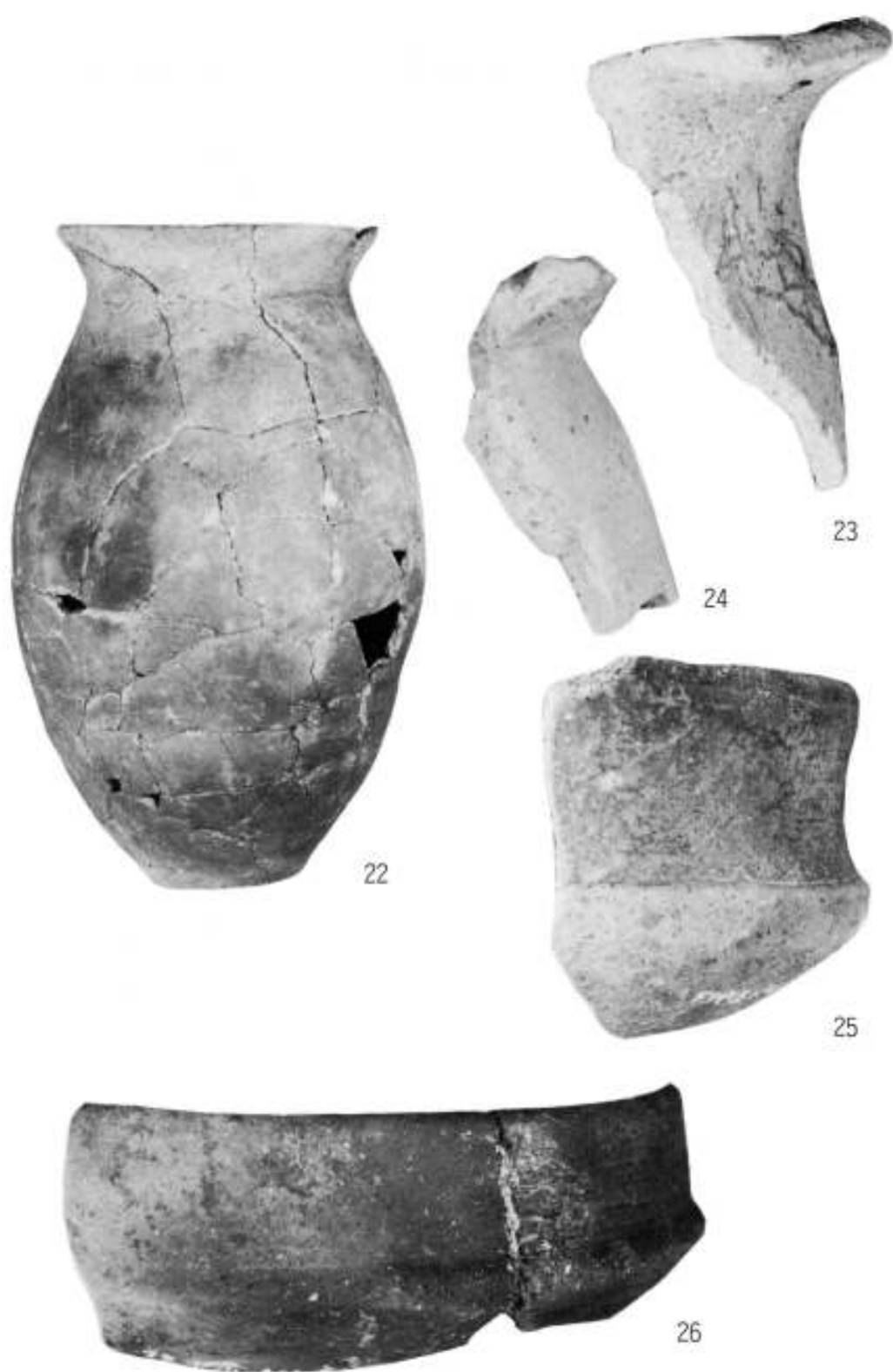
45. 浅間 B 軽石層出現状況 (小排 46 号)



46. 周辺出土遺物 (2)

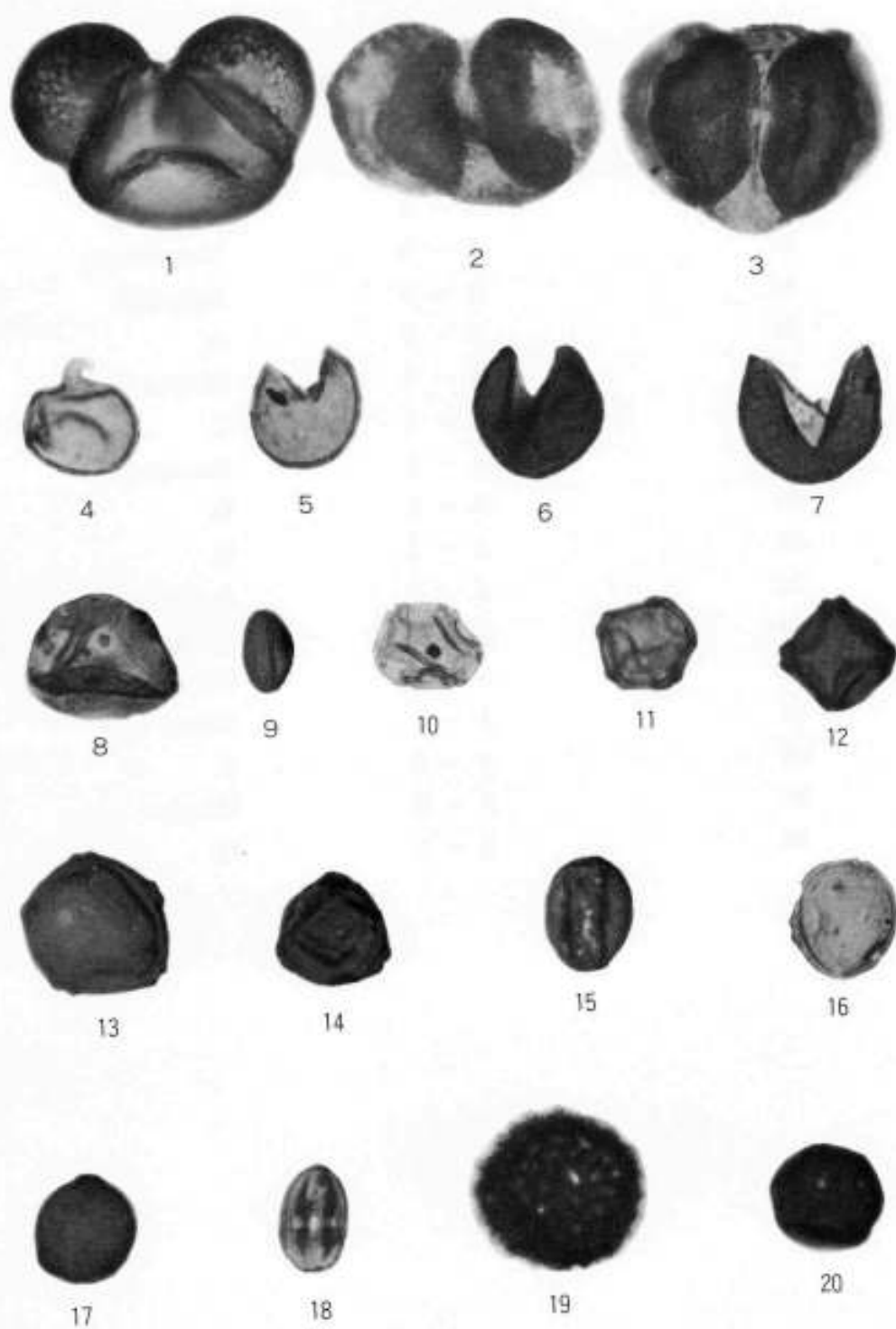


47. 周辺出土遺物 (3)



48. 周辺出土遺物 (4)

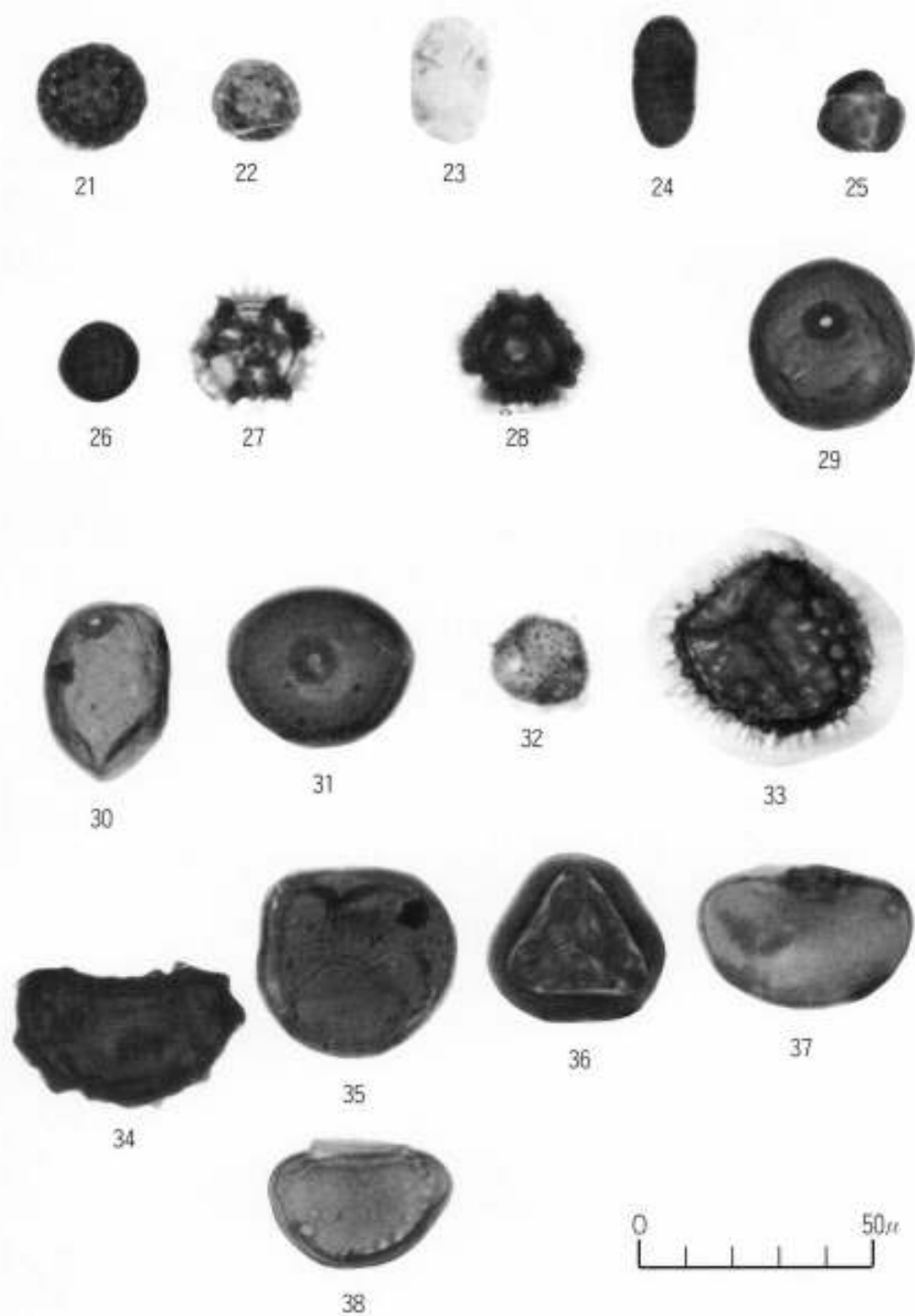
Photo No.	Sample No.	Pollen and Spores
PLATE 49		
1	A — 7	Pinus
2	A — 4	P.
3	A — 1	P.
4	A — 7	Cryptomeria
5	A — 7	Taxodiaceae
6	A — 6	T.
7	A — 1	T.
8	A — 4	Pterocarya
9	A — 3	Salix
10	A — 7	Alnus
11	A — 4	A.
12	A — 1	A.
13	A — 1	Carpinus
14	A — 4	Corylus
15	A — 4	Lepidobalanus
16	A — 7	Celtis
17	A — 4	C.
18	A — 2	Aesculus
19	A — 1	Percicaria
20	A — 2	Caryophyllaceae



49. 化石花粉放大写真 (1)

PLATE 50

21	A — 3	Chenopodiaceae
22	A — 4	C.
23	A — 3	Impatiens
24	A — 3	Umbelliferae
25	A — 5	Artemisia
26	A — 1	A.
27	A — 4	Cichorioideae
28	A — 1	C.
29	A — 1	Gramineae
30	A — 1	G.
31	A — 1	G.
32	A — 3	Sagittaria
33	A — 5	Selaginellaceae
34	A — 6	Polypodiaceae
35	A — 1	Trilete spore
36	A — 3	T. s.
37	A — 6	Monolete spore
38	A — 1	M. s.



50. 化石花粉放大写真 (2)